

を俳諧の胃の腑に落し、よく消化し得るやを驗した。謡曲の歌詞を採つてこれを俳諧に轉じやうとした試みも、實はその一つだったのである。——が、宗因は何故謡曲に目をつけたか、それを考へる時、先づ反射的に想像されるものは、謡曲と民衆との關係である。謡曲の民衆化——或ひはさうは云へないまでも、可なりそれに近かつたであらう兩者の接觸を思ふのである。

何故ならば、宗因の新運動は、俳諧の民衆化がその目的であり、彼の新しい試みがそれへの呼びかけである以上、充分にその効果を豫想してかゝつた事に違ひないからである。民衆は我が風馬牛のものに對して喝采をおくる筈はない。當時の民衆にとつて謡曲は——尠くとも謡曲中のあるきゝどころ位は、所謂「通り文句」として彼等の耳近いものとなつてゐたであらう事が察せられる。と同時にまた、如何にそれが民衆にとつて「新しい」興味であつたかといふ事も想像し得る。新しいものへの「穿ち」は、當に喝采を二倍する事實を知つてゐるからである。

俳諧に於ける宗因のこの試みの成功は、引つゞき其角らをして、更にその趣味を深からしめるにいたつた。即ち其角は「謡曲は俳諧の源氏」であるとして、常にその利用を忘れなかつた。しかしながら、川柳に於ける程、その事の甚しいものはないであらう。——が、これは單なる模倣踏襲に過ぎないものであつたらうか。如何に先人がその事に成功したからと云つて、時代的に何等の興味

を呼ばぬものを、後人が徒らに採り上げる筈はない。人の好みがそこに集つたればこそ、自らかゝる流行を招來したと見ねばならぬ。

能樂が、徳川幕府の式樂となつて、西より東に移つて以來、その最も盛りを極めたのは、五代將軍綱吉治下の元祿期だと云はれてゐる。將軍綱吉は能樂を好む事深く、能役者たちを厚く遇したのみならず、また自ら謡ひ、時に起つて舞つたといふ程の熱心なるこれが庇護者であつた。従つて上好みところ下これより甚しきはなしで、この事は直ちに民衆の上にも反映し、上下を通じて能樂趣味に目を足らずとした。即ち、町人間に於ける謡講の續出は年を追ふて盛んになり、この將軍を失つても、民衆への普及はとゞまる處を知らなかつた。かて、幕府が町人への馴走「御能拜見」の盛儀の催しは、彼等の名譽心を煽つて、いよゝゝその民衆化に拍車をかけたのである。

謡曲界の大事として今に傳へられる十五代觀世太夫元章の、明和年間に於ける謡曲詞章の改訂、所謂「明和の改正」の如きは、明らかに一面この時代に於けるかういふ謡曲の普遍化を物語るものではない。

川柳は、寶曆期の江戸に創つて、さういふ民衆の間に「はじめて得た我等の詩」として發達して來た平民文學である。従つてこれが、さういふ民衆の好みを反映しない譯はない。その以前に於け

る俳諧と謡曲との関係は、單にその歌詞を句の中に借りた所謂「文句取り」に過ぎなかつたが、川柳では更にそこから進んで、能そのものをまで題材とするにいたつた。能樂黃金時代を今眼の前に見る感じである。

では、江戸民衆の謡曲趣味は、如何なる姿をもつて川柳の中に現れてゐるか、謡曲中その題材の最も民衆に馴染深い「安宅」を例として、以下少しくそれらの種々なる姿を眺めてみやう。

二

鴻門楯破れ都の外の旅衣、日も遙々と越路の末、——舞臺はいよ／＼シテの出である。川柳家はこゝを

山 伏 の 姿 辨 慶 よ く 似 合 ひ

と詠つてゐる。辨慶は三塔の遊僧ならぬ勇僧、桑門の身に長刀三昧の荒武者の末である。これは諸國一見の僧などいふしほらしい姿よりも、太刀を帶せし山伏の方が、同じ僧に扮するにしても似つかはしい、といふのである。それにしても山伏姿とは辨慶よくぞ氣がついたといひ度い處である

が、しかしこれは因縁が無い譯ではないとして、川柳家は

山 伏 に 度々 化 け る 源 氏 方

なども詠つてゐる。即ち源氏には既に頼光、山伏姿となつて大江山に酒顛童子を退治したゞめしあり、その姿は源氏には幸先きよき變装として、義經主従もそれにあやかつたのであらうと穿つたのである。

さて義經主従一行、安宅の關へとさしかゝると、こゝには富樫の何某あつて、鎌倉の命を奉じ山伏と見たら一人も通すまじと相守る。そこで

山 伏 を 初 手 は と が く し く 咎 め

と川柳家はやつてゐるが、とがくしくとは富樫を振つた秀句で（この句「柳多留」十五篇に出づ後の所謂「狂句」はこゝらより始まるもの）あまり褒めた出来ではない。

辨慶は、南都東大寺勸進の僧と偽つて關を通らうとする。すると富樫が、さらば勸進帳を讀めといふので、辨慶も今はいたし方なく、

入れぬもの安宅でさがす笈の中

で、本来あらばこそその笈の中より往來の卷物一卷取り出だし、勸進帳と名づけつゝ高らかにこそ讀み上げるのであるが、川柳家はこの有名な勸進帳の文句を、川柳に借用する事を忘れてはゐない。最愛の夫人に別れ、戀慕やみがたく云々、涙玉を貫く思ひを善途に翻して云々の條をとつて、

さいわいのふじんに別れやけになり

なんだ玉をつらぬき小袖をもらひ

などゝ、これを轉用して卑俗なる人の様を描き出したり、或ひは

大佛も元トいろ事で出来給ふ

といふやうに、東大寺大佛縁起を世話にくだいて、我に身近い譬話にしてゐるなど、江戸庶民の詩らしい面目を見せてゐる。

更に面白いのは、その勸進帳の中に「俊乗坊重源諸國を勸進す」とあるのを採つて

鐵棒が俊乗坊を先きに立て

と、この俊乗坊をそこの寄附集めの坊さまと見立て、町内の金棒引が我から好んでさういふ連中を引廻すおせつかいを寫し、江戸市井風俗の一情景を描き出してゐる事である。

「川柳の味といふものは、かういふ處にある。高きものも低きものも、自分と平行の生活の中に置き直して眺める。江戸文藝の輕味は、この潤達なものゝ中から生れて來るのである。

百きとう五十ぼたいと武藏よみ

といふ句もまたさういふ氣分の濃厚な作である。これは辨慶が勸進帳の中で「一紙半錢の奉財の輩は、この世にては」云々と云つてゐるのを捉らへて、祈禱料が百文、御布施が五十文といふ處が普通相場であつたらしい當時の市井生活を穿つたものである。

さて、舞臺では勸進帳も濟み、許されて關を越さうとすると、太刀持が強力を見とがめ「判官殿の御通りにて候」といふので、富樫の呼び止めとなるが、川柳家はこゝを

山伏の十二人目をまてといふ

と詠んでゐる。主従以上十二人、いまだ習はぬ旅姿、とある本文に従つて、強力姿となつて後へ下つた義経は、その十二人目に相違なかつたらうといふ、少し理づめになつてゐるが、それをそのまま素直に句にしてゐる處に呑氣さが見えてほゞ笑まれる。かくて辨慶は、一期の浮沈極りぬと

珍らしい忠義主君をぶちのめし

といふ事になるのであるが、しかし法便の爲めとは云へ、流石に辨慶も主君を打つ杖は重かつたであらうといふので、

強く見せ弱き安宅の杖の先

など、その心中を察した狂句もある。――が、こゝを最も川柳家らしい見方をしてゐるのは

五條ではぶたれ安宅でぶちのめし

といふ句であらう。因果はめぐる。その昔牛若丸と名乗る頃、五條橋に於いて辨慶をさんぐに毆

つたから、今は我身にかへりて來て辨慶にぶちのめされるといふのである。辨慶、腹の何所かでは一寸蟲が納つたに違ひないと、餘計な心配をするのも川柳家である。

主を打つ家來を杖の安宅關

これは主を杖で打つ家來、その打つ家來が打たるゝ主にとつては杖とも柱とも頼む人だといふ、頗る技巧に富んだ句であるが、かういふ作を弄した句は、一寸見には面白いが、情を主とすべき詩に於いては純粹さの點から排すべきものとされてゐる。川柳家もまた現在ではこれらを「狂句」と稱して排斥してゐる。

舞臺は漸く波瀾を終つて、次に判官の述懐となる。その述懐の文句の中に「實にや思ふ事、叶はねばこそ憂き世なれ」とあるのを、川柳家はこれも借用して

思ふ事かなはねばこそふりつける

と轉じ、遊女などの無心叶はぬその腹いせに、客を振る素つばぬきを行つてゐる。しかしこれなどは謡曲の歌詞轉用の例としては上乘の出來であらう。

義經主従、かくて、辨慶さそくの働きによつて關を越え、虎の尾を踏み毒蛇の口をのがれたる心地の中に無事に奥州へと落ちるのであるが、川柳家はこの關越えを、函谷關に於ける孟嘗君の故事に思ひくらべ

すゞかけとくだかけで越す關二つ

と詠んでゐる。すゞかけとは云ふまでもなく判官一行の山伏姿の事であり、くだかけとは鶏の事、函谷關に於けるつくり鳴きを云つたものである。

三

安宅に關する句は古川柳の中に三十何句もある。しかし果してそれら全部が謡曲の安宅に關係あるかどうかは疑問である、歌舞伎の方でも、今日の歌舞伎十八番中の本行によつた「勸進帳」は新しいとしても、既に安永二年の類見世に中村座に於いて、海老藏の辨慶、團十郎の富樫で「御攝勸進帳」の名題にそれらしいものが演じられて居るし、それに作者達が、單に傳説をもととして所謂「詠史川柳」として試みたものと思はれる句も尠くないので、今俄に全部を謡曲に結びつけやうとは

しないが、しかしこの僅かの例をもつてしても、川柳に於ける謡曲の扱ひ方のあらましは御承知を頂けたかと思ふ。最後に私はこゝに説明し得なかつた句の中から謡曲の「安宅」に關係あるらしいもの二三を掲げて、一先づ稿を終ることにする。

妄語戒關所で辨をふるてる

法螺貝を安宅で吹くが仕舞ひなり

君五兩臣八百で關を越え

名將も日かけを行くは瘤が出来

武藏坊あたかもまことらしく讀み

【附記】こゝに引例した「安宅」の古川柳には殊に狂句式のものが多いため、本稿により正しい川柳を示し得なかつたのは残念であるが、これの目的がその川柳的價値よりも、謡曲そのもの扱ひ方を主としたので、題材をわざと耳近いものに選んだためである。さういふことは或ひは失敗であつたかも知れないけれど、しかしこれによつて多少共江戸民衆の謡曲への關心を傳へる事が出来たとすれば幸ひである。昭和八年七月

川柳の民謡味

— 平民詩の一つの姿 —

川柳は、もちろん諷ふべく生れたものではない。その川柳の中に、民謡をたづねやうとすることは、人あるひはこれを、畑に蛤を求むるのたぐひとも見るであらう。しかしながら、時に私共は、畑の中に「蛤」を発見しないとも限らない。私は川柳なる短詩の発生から見て、たしかにその中に化石した蛤の——いや、現に古川柳書の幾冊かは、聲を忘れた「民謡」の多くを、靜かにその中に眠らせてゐる。私は今、その化石した蛤のいくかを掘り出して、川柳に於ける民謡の味をさぐつて見やうと思ふのである。

洒落本、黄表紙に、文學を平民の手に奪ひとつた江戸人は、また詩歌をも平民のものとなさずにはおかなかつた。即ち雜俳の發生がそれである。川柳とは、平民文學の確立された寶曆の世、その雜俳に胚胎して、江戸に生れた最も特色ある最も平民的な一短詩である。詠ふべく、その詠ふべき術を知らず、もろくの美しきものに對するわが嘆きを、徒らに風にまかせてゐた江戸の民衆は、

この川柳といふ（正しくは前句附と呼ぶべきである）最も氣安き詩型を得て、どんなに狂喜したとか、そこには他の詩歌に見るが如き約束の何ものもなかつた。何等の氣構えもいらなかつた。我が日頃の言葉をもつて、赤裸々に我が思ふところを詠へばいゝのである。——俗語を以て俗人の俗腸をそのままに吐き出す、これが川柳なる詩の國の持つ憲法のすべてであつたのである。

實に川柳は、我々平民に與へられた唯一の、わが嘆きを奏すべき琴であつた。彼等は詠つた。嬉しいにつけ、悲しいにつけ、腹が立つにつけ、らちもなく詠ひ捨てた。そして彼等は常に腹ふくるゝを忘れたのである。川柳を指して白眼の詩とするのは當らない。川柳は何所までも彼等平民の抒情詩である。逝ける芥川龍之介氏は、傘雨久保田萬太郎氏の發句を指して「東京の生んだ歎かひの發句である」と評したことがあつたが、この「歎かひ」はまたこゝにもある。しづかに川柳に耳傾ける時、人はそこにその「溜息」を感じるであらう。

民謡詩人としての北原白秋氏は、その著すところの「日本の笛」の序文に於て、次の如く民謡を定義してゐる。即ち「民衆そのものゝ叫びが、民衆相當の歌謡の體を爲した」とし、「民謡は外形に於て純粹なる彼等の言葉を以て謡はれ、その本質に於ては常に彼等の感情そのものであらねばならない」とその姿を教へてゐる。しばらくこの白秋氏の定義に従ふとしても、川柳はまた民謡に

近いものであることを知る。川柳詩の作者は、決して孤を願つてはゐなかつた。(ある人は古川柳の多くがその作者の名を傳へてゐぬ點を以て民衆詩としての値打を云々してゐるが、私はこれを探らない)常に彼等は衆の單位としての個であることを望んでゐた。彼等の詠ふところのものは、私のこゝろであると共に、それはたゞちに「あなた」のこゝろであつた。彼等は彼等と共に笑ふべきものを笑ひ、彼等と共に泣くべきものを泣いた。——既にその發生に見ても、またその作句態度に見ても、かうして詠はれて來た川柳に、どうして民謡の味が、匂ひが無いと云へやう。

一茶の俳諧を語るものは、必らず彼の發句に於ける「童謡味」を見通さなざらう。一茶は永遠の童子であつた。しかも極めて野生的な。彼は子供の如く笑つた。子供の如く喜んだ。子供の如く泣いた。子供の如く拗ねた。子供の如く執した。——彼は性慾に於てさへ子供の如く生一本であつた。この一茶の詠ふところの發句に「童謡味」のあることは理の當然である。その一茶の發句に最も近いと云はれてゐる川柳に、また「民謡味」のあることは當然であらう。彼の「童謡味」に對してこれの「民謡味」であることの相違は、たゞ川柳詩の作者が、彼にくらべて大人であつたことである。——と云ふことは決して純粹さの多少を指すのではない。川柳詩の作者達は、彼よりも、もつと浮世の鹽氣に漬つてゐたといふことである。

川柳に於ける民謡味を語るには、かく言葉を構えてくゞしく説明するよりも、句そのものに就いて見て頂く方が早いやうである。今私の手もとは「俳諧武玉川」の數冊がある。(俳諧武玉川は江戸座の點者、四時庵、慶紀逸撰するところの俳諧の高點句集である。従つてこれに川柳と名づくることは安當でないが、後世の川柳の母體として、また始めて民衆の手に移つた俳諧として、その詩感の純粹さに於て、江戸の民衆詩を傳へるのに最も好適の書としてこれを選んだ。この句集は寛延三年にその初編を出し、安永五年までに十八編刊行されてゐる)私はこの手近な句集の中からそこに靜かに眠る、聲を忘れた民謡のいくつかを捜し出して見やう。

嘘をつけとの大三十日來る

これはその初編の第三句目に置かれた句である。嘘をつけとの大三十日來る。既に立派な民謡の姿ではないか。どうしやうもない人間の燒糞の叫びである。この句は「との」といふこの二字に千鈞の重みがある。「との」は背水の陣を張つた象である。以下初編、二編の中より數句を拾つて、便宜順序をたてゝ述べることにする。

日本の金のうごく晴天

この暢氣な大まかな云ひ廻しは、これこそ民謡の味であらう。うら／＼と晴れわたつた一日、鐘一つ賣れぬ日はない江戸の町を中心に、日本にはどんなに金が動いてゐる事か、この作者の氣持を思つただけでも、我々はほゝ笑ますには居られぬではないか。

様々な人が通つて日が暮れる

日常の平凡事が時に我々の眼に、非常な驚きとして映らぬこともない。私はある時、數日飲みつゞけて一日、ぼんやりとその旗亭の二階から今暮れ行く往來を眺めてゐたことがある。男が通る、女が通る、年寄が通る、子供が通る、自轉車が通る、自動車を通る、荷馬車を通る、何所から來て何所へ行くのか、私は私に少しも交渉のないその人達の活動を、一體あの人達は何であゝ動いてゐるのかと、別世界に住むものゝやうに不思議に思つた。この句はその心であらう。

しやぼんの玉の門を出て行く

これも何でもないことである。しかし、フワ／＼と我が門を出て行くしやぼん玉をじつと見送つた時、その人にはどんな氣持があつたか、同じくしやぼん玉のやうに、何かフワ／＼としたものゝ

中に、捉へどころのあるやうな無いやうな、妙な淋しさを味はひはしなかつたか、そのフワ／＼とした氣持を、フワ／＼と詠ひ出したところに、この句の面白さがある。

一日の機嫌も帯の締め心

人の氣持の機微を捉へた句である。我々は弱い。我々は常に見えざるものゝ大きな手に支配されてゐる。——いや、支配されずには居られないのである。神の存在を疑ひながらも、猶神の存在を信じやうとしてゐるのが人間である。我々は心の何所かで、常に何ものかに頼らうとしてゐる。さういふ弱い人間性の内實の消息をあからさまに傳へたのがこの句である。

淋しい時に藏をながめる

おもひ直して三絃をひく

腹の立つ時見る爲めの海

これらの句は、いづれも同じやうな氣持を詠つたものであるが、その一句々々から、淋しい人間の溜息が聽けるやうではないか。これに似た句に

叱られた日のわけて夕ぐれ

といふのがある。この句は前の三句にくらべると、もつと深いところを詠つてゐる。たゞでさへ淋しい夕暮である。それを何を叱られたか、叱られた後の、たよるべきすがるべき、總てのものを一度に失つて仕舞つたやうな、やる瀬ない氣持がよく判る。障子には名残りの陽が黄色く残つてゐやう。叱られた日のわけて夕ぐれ、しみじみとする。

佛の夜の障子やたばこ盆

死別か生別か、いづれにしても戀を失つた人の歎きであらう。忘れやうとしても忘れられぬ妄執の悲しみが詠はれてゐる。私の友人に妻に他へ走られた男がある。彼は私に涙さへ浮かべて自分にあんな奴を忘れて仕舞はうと努めてゐるのだけれど、あいつと起居を共にした部屋の何かを見る度に、晝間でも煮湯を吞まされたやうな堪らない氣持になるので、それがやりきれないと訴へたことがあつたが、この句も矢張り未練といふ言葉だけでは説明はむづかしからう。

鶴の死ぬのを龜が見てゐる

この句は云ふまでもなく「鶴は千年、龜は萬年」といふ譬を踏まいて出来た句には違ひないが、深く味つて行くと、たゞ安直に「思ひつきだ」とこれをかたづけして仕舞ふことは出来ないやうな、何か怖ろしいものを藏してゐるやうな氣がする。人生といふものゝ上に黒く覆ひかぶつてゐるであらう何かの影を、この句はまさしくと我々に見せつけてゐる。

時雨るゝ空にあかい吉原

これなどは、このまゝ立派な民謡である。バラ／＼と音たてゝ降り過ぎる時雨の夜空、淺草の觀音堂の大屋根とも思はるゝ闇の向ふに、ホンノリ空を染めてゐるのは吉原であらう。耳を澄すと茶屋の騒ぎ唄から、町々を歩く金棒の音、いや、張見世の妓達の聲までが、何だか聞こえて來るやうな氣がする。この「あかい吉原」は、當年の江戸人の血をどんなに湧かしたとか。その憧れを偽らずに詠つたものがこの句である。吉原を詠つたものにはまだこんな句がある。

煙になつても這入る吉原

この句は、例へば死なうと焼場は三の輪だ。煙になつても吉原へは直ぐ裏門から忍び込める。

いや、忍び込まずには置くものかといふ、まことに馬鹿々々しいやうな句であるが、當年の江戸人の吉原に對する意氣は全くこの通りであつたらしい。現在の東京人の、吉原へ對する感情を以てしては、この句の價値はそれほど受取れぬかも知れないが「三十日に月の出る里」と吉原を謳ひ「業平の惜しいことには地者なり」と吉原へ足の踏んごめぬ男を嘲つた時代にあつては、この句に詠まれた如き氣持は、江戸人のひとしく抱いてゐた偽らぬ理想であり、偽らぬ願ひであり、偽らぬ本能であつたらう。さればこそ

深く這入れれば法の吉原

といふ句さへある。遊びもこゝへ達してこそ、始めて悟道に入るを得たといふのであらう。これが蕩兒の禪であり、江戸人の哲學であつたかも知れない。この本能のまゝを大膽に詠ひ出した彼等の聲に、私共は民謡を感じる事は出来ないであらうか。

私の與へられた紙數は、今漸く盡きやうとしてゐるので、以下一々の説明を述べることが出来な

いが、
情け知らずの筑波見てゐる

雪折れも千鳥も枕してのもの
惚れたとは短い事の云ひにくき
夢の夜ながら人は寢道具
冬の牡丹の魂ひで咲く
物思ふ相手がなさに蚊帳をつり
朝顔の思ひ直して二つ三つ

等のいづれにも、何所かに民謡の匂ひがしてはゐないか。あるものはこれを二十六字の俚謡體に打ち伸ばせば、立ちどころに朗々と謡ふことが出来やう。

川柳を單なる皮肉、滑稽、諷刺の詩として、これを素通りする人は、まだ銀座の片側より知らぬ人である。踵を廻らして向ふ側へまでわたつて見るがいゝ。諸君は必らず川柳なる平民詩の中に、どうしやうもない人間愛慾の、永遠に變らぬ姿を見つけ出して、かつて知らぬ驚きを喫するに違ひない。

以上、こゝにつくる一文は「民謡味」といふ傍系的な標題を選んだ爲め、眞の川柳の姿を云ふことが出来なかつたのは遺憾であるが、民謡をたづねて僅に擧げた前掲の數句に、もし川柳の一つの

影を認められた方があつたら、その人はやがて川柳の全き姿を想像するに難くないであらう。今はしばらく標題に従つて、川柳の中に、化石した蛤を求むるに止めて置く。(昭和二年八月)

川柳の文献的價值

——關東大震災を顧みて——

私共の一生は恐らく三萬日とはあるまい。さういふ短い人生の間にあの大地震災といふやうな重大な経験を味つて來た事は、ある意味に於いては自らを祝福すべきであらう。

あの日私は、隅田川の水の中に家族を抱へて避難しながら「大變だ」と思つた。そして私は、滅多な人生では到底遭ふ事を得ないであらうこの大變を、自分の爲めによく見て置く事だと考へた。さう考へると私は、早速親達を田舎の親戚の許へ送り届け(といふのは私もまた家を失つて仕舞つたからではあるが)直ぐ様東京へ馳せ戻つて、未だ餘燼けぶる中を、西へ、東へ、駈け廻つた。鐵骨ばかりになつた吾妻橋をおのゝく足に渡りもした。文字に知る死骸の山といふのを如實に見せた被服廠の中へもまぎれ込んだ。さうして見た。火と煙と灰と脂と血と涙と死とを。——私は一生この事を忘れまいと、見、聞きした事をシツカリ胸の中へ刻みつけて歩いた。

さういふ印象はまだ昨日の事のやうに、ナマ／＼と私の上に生きてゐる。それなのに月日は、この事實を七年といふ遠い過去へ押しやつて、思ひ出の中のものとしやうとしてゐるではないか。思へば早いものである。

私は今、自分の古い選句の整理を行つてゐる。折に觸れ、閑を得ては、新聞の切抜きや書抜き帳の中から、思ひ出の一句一句を、楽しみながら拾つてゐるが、大震災の七周年記念日を前にして特に興深いものはそれらの中の震災吟である。

私とその川柳欄を擔當してゐる都新聞社は、幸にあの業火をのがれた爲め、割合に早く整つた新聞を出す事が出来たので、川柳欄なども、他紙に先んじて、十一月十五日から復活した。従つて當時の「都柳壇」を覗いて見ると、その大半は他紙のそれに見ぬ震災吟で埋められてゐる。

七年後の今日、私は再びそれらの句を読み味ひかへして、昨日の印象のマザ／＼と眼前に髣髴するのを覺えた。私共はあの大變に處して、如何に生きて來たか、それらの句を通して、新たな感慨の中に當時の私共の生活を振りかへつて見やうと思ふ。

夢の 様 で したと 獨りぼつち也 紅笑子
都落ち 金指輪 だけよく 光り 逢二

止むを得ず 錦紗を着てる 不仕合せ 雀の子

私共はこゝに三様の罹災者の姿を見る。第一は親子兄弟を失つて奇しき命を助かつた人であらう。獨りぼつち也の言葉の中に茫然として今日を疑ふ憐れなその人の姿が描かれてゐる。第二の句は金指輪を捉へ來つた所に警拔な川柳眼がある。この不調和金指輪の光りの中に、その人の昨日の生活が見えるではないか。第三の句は恐らく誰もが身近い人々の上に見出した姿であつたらう。

配給に 老母頂く 餅がつき 雪葉
配給所 尤もらしい なり 來る 幸坊主
家中で 慰問袋の中を あて 逢二

袖に時雨のかゝる時、人の情の奥を知るといふが、實際あの時ぐらゐる物を貰つて嬉しかつた事はなかつた。一本の芋にさへ涙を流した。しかし物を貰ふ事が楽しみになり、當然の權利の如く心得るやうになつてはもうお仕舞ひである。罹災者の多くが恩に狎れず、よくいつまでも恩を恩として受けてゐたか、川柳家はその間の微妙な消息をさへかく詠つてゐる。

奥様を 捜しあてれば ドラ 焼屋 舟 灯

と云つて今更大工にもなれず
此際に處する道あり牛めし屋 新吉坊

人間命があれば兎に角食ふことである。食ふといふ事の前に見榮は不必要である。藝妓がするもん屋を始めた。奥様が復興焼や五色揚屋を始めた。立派な髭の男が牛めし屋を始めた。等、等、みなよく働いた。さういふ當時の有様を殊に第一の句は表裏をつくして描き出してゐる。

日比谷村お向ふの子も夕刊屋 銀杏
丸の内巡査になつた友に合ひ 女神丸
繪葉書屋腋の下から一つ賣り 雀郎

これも生きんが爲めに働く人々の姿である。第一の句は日比谷のバラック街に收容された罹災者の子供達が競つて夕刊賣となり活躍した俤である。全くあのしつこい夕刊少年達には同情しながらも惱まされたものである。この句の日比谷村などいふ言葉は、やがて難解のものとなるに違ひない。第二の句は非常時の東京警備の爲め警官に不足を生じた警視廳では、地方から巡査を狩り集める一方、教習所の卵をドン／＼街頭に送つた。この爲め一時は巡査が往來の人に道を訪ねたなどいふ喜劇さへ行はれた。それと共に當時また俄に殖えたものは地圖屋と繪葉書屋である。この繪葉書屋、時々禁止の焼死者の寫真などを賣つてお目玉を喰つた。でも食ふためにはその冒險も敢てせねばならぬ。さういふ緊張したユーモアがこれ等の句には見える。

山の手へ行く度殖える皿小鉢 雪葉
焼止り小癩にさはる様に賣れ 直山人
焼け出され同士が出合ふ神樂坂 よし坊

銀ブラに對して神ブラ、新ブラなどの言葉を生んだ程、焼け残りの山の手は繁昌は素晴らしいものであつた。だがこれらはするとん屋や茹あづきではない。忽ちマーケットを産み、忽ちウエトレスを産み、そして忽ち地代の値を吊り上げた。さういふ山の手方面の賑ひは、確に下町の焼けた商人達に泣面に蜂の感を抱かせたに違ひない、しかしながらその山の手焼けた人々に言はせれば、そこにはまた何か一言あつたのであらう。

氣の毒にしても避難者長過ぎる 青秋郎
焼け残り貰へないのを損に云ひ 女神丸

いつそ焼けたをねたむ失業 雀郎

即ち川柳家は焼け残つた人々の不平をかう云つてゐる。罹災者には幾組も押込まれる。着てゐた着物は脱いでやつて仕舞ふ。その上貰ふものは貰へず、たゞ本當に家の形だけが残つたのみの事。それで焼けた連中に羨まれちや立つ瀬が無い。私達もよくこの愚痴を聞かされたものである。人間大がいの事では自分を幸福だとは思はないものらしい。けだし第一の句の如きは、その連中の本音だつたやうである。

バラツクへ訪ねる友も着たつきり 明吟
 バラツクの一軒目立つ二階建 三太夫
 設計圖金庫の上へ擴げて見 古詠柳

バラツクといふものも、震災が産んだ一景物であつた。耳新しいこの建物を見物すべくわざわざ上京した人々もあつた程である。なんだバラツクといふのは小屋か、この人々はさう云つて變哲もない顔をした。しかしバラツクに住む人々にとつては決して變哲もない朝夕ではなかつた。月させば疊にこぼれ、時雨すれば屋根に音する此のバラツクの夢に、在りし日の我家を見る淋しさはどん

なであつたらう。だがバラツクは復興の第一歩であつた。平家のバラツクは二階家となり三階家となつて、つひに今日の本建築とまで清ぎつたのである。

父さんの夜警が來たと戸を開ける 直山人
 氣まぐれにトキの橋をうつ夜警團 茂坊
 町内に地震以來の友が出來 雀郎

人は最後の瞬間に於いては、自分一個の事より考へない。その危険が漠然とした不安に代つた時始めて衆の力を考へる。震災後もろくの流言蜚語の中から自警團や夜警團が産れたのは當然である。自警團の餘りに武者修行的な暴威にはいさゝか聾聵せざるを得なかつたが、夜警團は確にいゝ試みであつた。あの爲め一時にもせよ、いかに市民が自治的な觀念を涵養されたか知れないであらう。緊張の中にも何所か遊びのある、落語の「二番煎じ」のやうなあの生活は、隣りといふものにどんな親しみと力とを感じた事か、第三の句はそのこゝろを詠つたものである。

ひよつこりとオーバセータでやつて來る 三太夫
 卷脚絆するくにして旦那來る 可喜津

ゴム足袋を脱ぐと會社の上草履 三太夫

まつたくあゝいふ非常時に和服の長裾は甲斐々々しくない。第一當時は焼残りらしく見られるのを恥とした。従つて随分失禮な容姿が流行したが、殊に殖えたのは俄洋服子で、あゝいふ時でなくては到底大手を振つて往來を歩けぬやうなものもあつた。巻脚絆をする／＼にした旦那など、どうしてもゴルフ場通ひの姿ではない。かくして震災はたうとう淺草の詩人久保田萬太郎氏に洋服を着せて仕舞つた。各新聞の家庭欄に婦人の洋服化が論じられたのもこの時である。

撥だこを見つけて騒ぐバーの客 直山人
五反田へ俺の女が出た噂 一若
焼跡へ歸らぬ女 途で逢ひ けい坊

山の手のバーに撥だこを騒がれる女、新開の土地から肩身を狭く現はれた女、死別か生別か旦那を失つて新しく生きる事を考へねばならぬ女、さういふ昨日に變る今日の姿を、川柳家はまた花柳界の女等の上にも見た。殊に第三句目の焼跡へ歸らぬ女の一句は、途で逢ひの一語によつて、その

姿が生々と寫し出されてゐる。

夜警から裏の旦那の顔を知り 雀郎
本妻と妾とひよんな初対面 茂坊
避難して来れば妾に子まであり 同

川柳家はあの混雜の中に、妾といふ特殊な存在をもまた見遁さなかつた。人間の愛憎は人が思ひ／＼の生活を許されてゐる時に於いてのみ起る心的現象である。一つの目的を前に等しき緊張を必要とする場合、それらの人々の心には、愛憎といふやうな感情を超越した、神に近いものが天下るに違ひない。が——震災餘談としてかういふ川柳もまた一つの生活詩的意義を有するであらう。

お前のも池に居たと嫌がらせ 美津夫
託兒所の窓でよく似た子を見つけ 一若
被服廠見て来てからの奢りなり 雀郎

こゝに描かれたものは死の姿である。嚴肅なるべき死の前で、川柳家は遊戯してゐるのであらう

か。川柳家は遊戯してゐるのではない。死に對する生者の三つの見方の偽らぬ描寫を行つてゐるだけである。第一の句は、死者の醜惡を厭ふ心の裏に、死に對する恐怖に戦く愚かしきものゝ姿を描いたもの、第二の句は子の死とそれに對する涙ぐまじき母性愛とを描いたもの、第三の句は死に對する無常觀を描いたものである。

落つけば矢つ張り世間せち辛し　矢之倉
女房の智恵も交る復興　明吟
玄米の味を忘れる面白さ　雀郎

あの大震災を天譴と見る人は天譴と見て、自らを戒めるのもよいであらう。少しきびしい災難と見て、玄米の味を忘れ行くところにもまた人の世の面白さはあるのである。如何の觀をなさうともさう理窟づけて自分から捨て、行くところに復興の元氣は湧き起つて來るのである。

以上私は、大震災の始末を語るわづかの句をこゝに拾つて見た。しかしながら私は、それらの句に再吟味を加へて、その優劣を今更らしく語らうといふのではない。尊い血で描かれた人生の記録として、死線に彷徨した人々の姿を、しつかり句の中に見て頂けばいゝのである。

あの當時、その驚きと嘆きを、詩歌に託したものは、ひとり川柳家のみではなかつたであらう。

しかしながら何がよくこの川柳の如く、生きた姿を寫し得たか。短歌は餘りに概念的であり、俳句は餘りに觀念的であつた。餘りにも彼等のそれは、たゞ一人の驚き、たゞ一人の嘆き、に過ぎた。

——私は此の事實を前に、川柳の文獻的價值といふ一面について考へて見た。

最近、風俗の研究資料として古川柳は重要な地位を占めるに到つた。これは川柳の客觀的描法が偽らぬ時代の寫生として役立つて來たからである。まつたく古川柳の作者の多くは、我が嘆きを他人の姿の上に托して、冷やかに眺める術を心得てゐた。彼等は常に決して第三者といふ立場を忘れなかつた。彼等はそこから正しく物の姿を掴まうとしたのである。従つて彼等の驚きは常に衆の驚きであつた。そこにこの短詩の社會的意義が生れて來るのである。川柳家は大地震といふ稀有の大變に際して、圖らずも川柳の持つさういふ一つの特徴を、遺憾なく發揮したのであつた。私がこれらの句に興味を覚えるのは、かゝつてこの事實の上にあるのである。だからと云つて、しかし私は時事川柳第一主義を唱へるものではない。時事川柳のいのちは、その時代の人の、事實の前に於ける反射的興味にのみあるので、詩歌としての永遠性は望めない。震災吟の多くも、やがては後世の人から、古川柳のそれに對すると同じく、難解のものとなされるに到るであらう。私はたゞ川柳の有するかういふ一面を震災吟に託して語つたまでである。(昭和四年八月)

芥川龍之介氏と川柳

——私をして語らしめよ——

「唯僕に對する社會的條件。……僕の上に影を投げた封建時代のことだけは故意にその中にも書かなかつた。なぜ又故意に書かなかつたかと云へば、我々人間は今日でも多少は封建時代の影の中にゐるからである」

これは芥川龍之介氏の遺書「或舊友へ送る手記」の一節である。が、私はこの短い文章の中に何か芥川氏らしい——東京人としての芥川氏らしいある姿を感じない譯にはいかない。

その日——七月二十四日は、きのふまでの酷暑にひきかへ、夜來の雨は、思はず床の毛布を引き寄せた程、朝を涼しいものにしてゐた。昨夜は兩國の川開きで、その趣味講演に愛宕山の放送室に起られた飴ン坊氏を、向島の例の家に迎へて遅くまで痛飲した爲め、今朝は何となくものうく、折からの日曜を幸ひに、シト／＼と庭木に降りそゞぐ雨の音を枕に聞きながら、午近くまで眠りをむ

さぼつてゐたのであつたが、思へばこの時既に一代の文匠芥川龍之介氏は、永久に覺めぬ眠りの床に安らかにその身を横たへてゐたのである。

一日なす事もなく、書齋の整理などして夕方になつて仕舞つた私は、徒然のまゝにこの夜小石川の某所に開かれた「新屋會」の句會に久しぶりで出席した。句會の後の甘い疲労にからまれた體を快い夜風にまかせながら、宮尾しげを、太郎丸、三太郎など歸途を同じくする連中と一つ電車の人となつた。私が芥川氏の死をはじめて聞いたのは、實にこの車中に於いて、あつた。

私も三太郎も、いづれ劣らぬ芥川氏の愛讀者だつたので、車中に落つくといつか二人は、近刊の「改造」に載つた「西方の人」を話題にのぼしてゐた。

「君はあれを讀んでどう思つた。何か可怪しなところがありやしなかつたか」

「どうも自分ばかりドン／＼先へ歩いて行つて仕舞つてゐて、ガツチリ四つに組んでゐるところが無いやうだが……」

私はそんなことを三太郎に話かけてゐた。と、「芥川」といふ名が耳に入つた爲めか、今まで太郎丸と何か語つてゐた宮尾が、突然私の方を振りかへつて

「芥川は自殺しましたよ」

と云つた。私は自分の耳を疑つた。が、それも須臾の間、私はいつか笑ひ出した。

「冗談いふな」

「いや、本當ですよ、今朝。さつきラヂオのニュースにありましたもの」

私は宮尾の眞顔を見通さなかつた。私の胸は轟いた。然し私はまだその事實を信じやうとはしなかつた。——そんな一大事が起らうとはどうしても信じられなかつたからである。

私は芥川氏が常に催眠薬を用ゐてゐるといふ話を聞いてゐたので、その量でも過ごして、人事不省になつた、そんなことの間違ひだらうと思つてゐた。三太郎も私と同じやうな解釋だつた。

「けれども、芥川ならやりかねませんぜ、今の文壇で直ぐ自殺といふことの連想出来るのはあの人だけですよ」

さう云つて私を驚かしたのは太郎丸だつた。私は悪いことを云つて呉れたなと思つた。今まで心の隅にそつと仕舞つて置いたものを、グツと掴み出されたやうな氣がした。私はもう平靜では居られなかつた。

その事實を信じまいとつとめてゐた私も、今では宮尾の報告のあまり簡單なのが寧ろ焦つたくなつて來た。私はもつと詳しく、もつと確實に、その眞相が知りたかつた。

私は早く家へ歸つて今夜のラヂオの話が聞きたかつた。私は家の玄關を上るなり、母に、今夜のラヂオのニュースが、確かに芥川氏の死を報じたかどうかを訊ねて見た。

「あ、毒藥を嚥んだのだつて。奥さんと菊池寛といふ人へ書置きがあつたさうだよ」

社會の一出來事として、芥川氏の死を報ずる母の答は、あまりにもハツキリとしすぎてゐた。遺書！ 私はもう口がきけなかつた。

「どうして死んだのだらう」

私は口の中で繰返して見た。だがどうしてもまだ心から信じる氣にはなれなかつた。自分の眼、自分の耳で、しつかりその眞相を確かめぬ以上、疑ひなしにそれを肯定することは出来なかつた。おそらくは事實だらうと思ふ心の底に、何か一縷の望みを残したまゝ、私は寒々とした氣持の中にとも角もあすの朝の新聞を待つことにした。

意地悪く新聞は遅かつた。出社時間のギリ／＼まで待つたが、まだ新聞は配達されなかつた。私は妙な焦燥を感じながらいつもの電車の人となつた。と、私の眼の前には大きな芥川龍之介氏の寫眞があつた。氏の死を報ずる大きな活字があつた。或る舊友へ送る手記といふ氏の遺書があつた。あゝ芥川氏の死はつひに事實だつたのである。私は「貼りたての障子に穴をあけられたやうな」何

とも云へない寂しさに襲はれた。

事實はつひにどうしやうもない事實である。私は社の机の前で、芥川氏の死——何にもつかまへどころのない、その「死」といふボヤツとしたものを、しばらくボンヤリ見つめてゐた。そして私は、何といふ理由なしに「しやうがないな」と、自分自身につぶやいたのであつた。

私は、私と芥川氏との、それはホンの往來で摺れ違つた位にしか過ぎない、浅い短い、然し一生その喜びは忘れないのであらうところの交渉について、しづかに振りかへつて見た。

私が芥川氏を知つたのは、——といふよりも、私が芥川氏に知られたのは、極めて最近のことである。何かの用事で芥川氏を訪問した私の友人が、話のついでに氏の作品の熱心な愛讀者の一人に私があるといふやうなことを、氏に語つたらしい。これがそも／＼の最初である。氏はこんなことをも大變に喜んで呉れたやうで、その友達へのある用件の手紙の端へ、僕のものを読んでみてくれるといふのは前田といふ方ですか、そんなら川柳をやる方でせう、僕は前田といふ人の川柳をいつも見てゐます、といふやうなことを書き添へて來たのを見せられた。大正十四年、恰も「川柳みやこ」全盛時代の夏のことである。

川柳みやこは創刊號から芥川氏始め文壇詩壇のある人々へ毎號拜呈してゐた。どうせ讀んでは呉

れまいけれど、これも川柳運動の何かの一つにはなるであらうと思つて續けてゐたのであつたが、私はこの芥川氏の手紙を見て、その好意に感激した。私は氏の好意に對しその時感謝の手紙を出したかどうだか、今は忘れて仕舞つたが、それに前後して氏から、私と川村花菱氏との「武玉川」の句解についての論争に對する好意ある言葉及び拙句

佛の姑口あゝて寝る

に對する思ひがけない讀辭を頂いた。

「武玉川」に就いてのそれは、私の花菱氏に對する駁論の態度を褒め、併せて例の問題になつた

安弔ひの蓮の明ぼの

の私の句解に賛意を表されたもので、當時四面楚歌、柳壇こぞつて私の説に反對し、いさゝか自分の旗色の悪い時であつたから、私にとつてこの芥川氏の味方は百萬の援軍とも思はれ、私は本當に涙をこぼして喜び狂じた。正直な話、その時の私の心は、たとへ柳壇こぞつて私の敵となるとも私は恐れない。私はこの一人に知つて貰つただけで満足である。私はこの一人の理解者が得たいばか

りに戦つてゐるのだとさへ思つた程である。(私は今までこの事をわざと活字にしなかつた。私はそんなことから私の文壇への成心などいふ事を云々されたくはなかつたからである。尙、安弔ひの句については、私の名こそ出さね、芥川氏自身がその事を「改造」六月號の「文藝的な、餘りに文藝的な」の一項「川柳」の中にも書かれてゐる)

それから間もなく「川柳みやこ」第十二篇の巻頭に掲げた氏の「輕井澤にて」の句

きぬぎぬや耳の根ばかりあでやかに
死ねとも思ふ秋風の末

の二句を、輕井澤の避暑先から寄せられたのであつた。

當時私達はこの句を見て、たゞ氏の才に敬服するばかりであつたが、今となつてしみんくこの句を読み返し味つてみると、こゝにもまた今日の黒いものが何か薄墨色に匂つてゐるやうにも思はれる。殊に私の句

佛の姑口あいて寝る

に共鳴をおくられた氏の心持には、作者として徒らに、唯ニヤ／＼と顎を撫でゝはゐられないもの

があるやうな気がする。

私如き後輩が、芥川氏の「死」を擇ばれた胸裡を推察することは遠慮せねばならぬ。いや、知らうとしても私如き凡下^{ほんか}の徒には迎もつかひ知ることを得ないであらう。然し聞けば氏は家庭的にも不幸な方であつたさうである。家といふ重い棟の下に、辛くも今日まで「生きるために生きて」來た氏が、夜更けて靜かに階下なる寢室に降り、何にも知らずに幸福さうに、鼾の音も安らかに眠られてゐる御養父母や伯母君のその枕邊に立たれた折々、どんな感慨で寝顔を見られた事か。この句の作者である私は、今更ながら私の句に、私の作意以上に恐ろしいものが藏されてゐるのを知つて、いや、おしへられて、慄然としたのである。

氏の私に寄せられた「きぬぎぬや」の句も、かうして考へて行くと、唯氏が「小生もちよつとまねをして見たくなつた」といふやうな、そんな思ひつきからつくられたものではないやうにも思はれて來る。甚だ不遜ではあるが、私は試みに私の「佛の姑」の句に、氏の二句を附けて、變形的な「三つもの」をつくつて見た。

佛の姑口あいて寝る
きぬぎぬや耳の根ばかりあでやかに

死ねとも思ふ秋風の末

この私の借越を許されたい。然しこれを通して讀んで、何かをそこに感じないであらうか。私はこの句に夢二氏の寝起きの美人の嬌態の圖を配した輕はづみを思ひ出して、腋下に汗を覚えてゐる。さぞかし氏は當時「知らざる者の愚」を憐れんで苦笑されたことであつたらう。

該博なる氏の識見と理解は、そしてまた都會人としての趣味性は、決して「川柳」なる文藝にも無關心ではなかつた。「文藝春秋」の氏の追悼號に掲げられた日夏歌之介氏の思ひ出話を讀むと、度々古川柳に就いて語り合つてゐられたやうでもあるし、前掲「改造」所載の「文藝的な、餘りに文藝的な」を見ると、私共の新川柳運動にも理解を持たれ、殊に今日川柳が置かれてゐる詩歌としての地位には、有難い程の（當り前の事であるが、盲千人の現在の詩歌壇の人達に較べて）同情を寄せられてゐたやうである。氏に機會があつたなら、或ひはもつと川柳をつくられてゐたかも知れない。現にいつぞやの「文藝春秋」に發表された、何といふ標題であつたか、今手許にその雑誌が無いので思ひ出せないが、輕井澤の印象を叙した散文詩體の短章其他は、立派に川柳であつた。

私はこれほど氏から好意を寄せられながら、不幸お目にかゝる機會が得なかつた。お言葉に甘へてお邪魔に上らうと思ひは思つてゐながらも、お仕事の性質からウツカリ御迷惑をかけてはとそれ

を惧れたり、また私といふ人間が、始めての方をお訪ねするといふことに、どうも氣おくれのするタチなので、その中に何かの機會を見つけてと、そんな當てにもならぬものを當てにしてゐた爲めたうとうその聲咳に接することを得なかつた。

私の書齋に、氏の書を額に欲しいと思つたので「榴花洞」と書いて頂き度いと失禮だが御願ひしたところ、僕でよかつたらいつでも書いてやるから來い。とまで云はれてゐたのに本當に残念なことをした。今は悔んでも追ひつかない。

氏に最後に御手紙をあげたのはこの六月である。「改造」六月號に載つた氏の「川柳」の原稿を「昭和川柳」の第二號に轉載させて戴き度いと思つたので、お願ひをしたのであつたが、あれは自分としてみまだ考へが充分でないから、専門雑誌への轉載は今しばらく待つて欲しいといふ叮嚀なお断りの御返事で、これは成就しなかつた。

この事は後で聞いたことであるが、あの「改造」の氏の川柳觀に就いては當時九段老人を始め大分川柳家からいろ／＼な手紙が行つたらしく、氏も尠ならず迷惑されたとのことである。そんな爲め遠慮しての私への断りであつたのであらうが、今更ではないにしても、かういふ川柳家の態度はまことに情ないことである。少し位間違つたところがあつたにしても、そんなことは何でもないので

はないか、それよりもさういふ人が川柳といふものに關心を持つた、それだけで既に大きな收穫ではないか。川柳家もいつまでこんな根性でゐては、川柳もなか／＼世に出まい。出ないのが當り前である。烏なき里の蝙蝠の思ひ上りにも困つたものだ、私はその話を聞いてしみ／＼慨嘆した。

私はその原稿の御願ひをする時、併せて、近頃は下さう御氣分がよろしいやうだから、來月はお邪魔に上り度いと書き添へた。全くその頃の氏は、矢次早に大作を發表され、外見には素晴らしく元氣に見えたので、私も思ひ切つて御目にかゝりに上らうと思つたのだつた。そして早く涼しくなる日の來るのを楽しみに待つたのであつたが、つひにその日は私の上に惠まれなかつた。

私は七月二十七日。酷暑の谷中齋場に於て、我が尊敬する芥川龍之介氏の靈前に、最初のそして最後の「さよなら」を恭しく捧げたのであつた。

その時私は亡き人を偲んで、私の手帳の中に次の一句を認めた。

眼の色の人には見えで面白し

然し、私の胸の障子にあいた穴はどうしやうもない。昭和二年八月)

回首槐安夢一場

——川柳家としての劍花坊——

九月十三日、鎌倉建長寺正統院に於ける井上劍花坊先生の葬儀は、まことに氣持のよい——氣持よいなどいふ言葉は或ひはかういふところに用ゐるのにふさはしくないものかも知れない。しかしあの一切の虚飾虚禮を廢した式順、例へば長つたらしい引導に替へるに、偈といふのか簡單明瞭なる詩文を唱してやんだ導師たる管長の態度などまで、如何にも安心しきつた大往生の人を送るといつた感じの、悲しみの中にも何か快いものがあつた。建長寺管長菅原疊華和尚が、劍花坊先生の靈への香詩は

送迎六十五星霜 回首槐安夢一場

唱出尋常茶飯句 劍花園裡放奇光

といふのである。二句目の『槐安夢』は、かうして文字に書いて見れば、それが南柯夢として名高

い淳子禁の故事を言つたものであらう事が判るが、最初、正統院の式場に於いて疊華和尚の口にそれを聞いた時は、場所が鎌倉であるだけに、それをさうは受取らなかつた。回首槐安と切つて夢一場と聞き、この槐は、源實朝の歌集の題に選ばれた金槐の「槐」と解し、即ち大臣の座位を意味させた周の故事を思ひ浮かべたのである。さうして如何にもと、在りし日の先生の、二本榎時代の華やかな面影を、いつか回想してゐたのであつた。

大正八九年前後の所謂「二本榎時代」は、正に先生にとつて我が世の春であつたに相違ない。その門に多くの秀才を擁し、ひろく全國に奉信者を持つて、柳梅寺派にあらずんば川柳家にあらずの平家の奢りを今に見せたものである。當時私は、語るべき友も無く久良伎社の末席にあつて、如何にその敵陳の光景を眩しく眺めたことか、それを思ひ現在をかへりみ、まことに夢一場、私は無量の感慨に耽つたのである。

送迎六十五星霜、しかも先生ぐらゐその門に人の送迎の多忙だつた方はなかつたであらう。先生轉すればまた人も變つてゐた。かういふ柳梅寺の變轉は、何によつて來たつたか、私はこれを、先生の川柳への發足當初に於いて、既に負はされてゐた宿命と見るのである。

古島一雄氏の思ひ出話によれば、先生の川柳革新に起つた動機は、古島氏の慫慂によるものだと

ある。漢詩人井上秋劍氏は、古島氏からこの誘ひをうけるまで、川柳に對して如何程の關心と興味とを持つてゐたか、これは一つの疑問でなければならぬ。新川柳の大旗をかゝげたものゝ、何を目標とすべきか、非文學的な狂句の排撃は當然の仕事として、さて破壊の後の建設、その目安を何所に置くべきかに就いて、先生に確たる何ものかの把握があつたとは、其後の行動に見て信じられないのである。

先生と前後して起つた我が舊師久良伎先生の川柳革新の目標は「柳多留」への復歸、謂はゞ新寶曆の建設にあつた。新川柳興つて三十二年、久良伎先生は今尙「江戸」に立籠つてゐる。江戸は久良伎先生にとつて、川柳運動の序論であると共に、また既に結論でもあつたのである。

久良伎先生は、その事の正否は別として、最初からしかく結論を持つてゐたが、劍花坊先生にはその結論が無かつた。いや、結論が持てなかつたのである。先生の目ぐるしき川柳的衣がへ——さういふ變轉は、所詮は、その結論を求めてのあがきであつたと見てはいけなからうか。勿論それには影響され易いといふ先生の「弱氣」な素質が手傳つてはゐたが。

その先生が、今年のはじめ、珍らしくも結論らしいものを見せた。即ち川柳は「冷刺的洞察の裸體詩、熱愛的共感の社會詩」であるといふ「新興三十二年の綜合川柳觀」の發表である。その言ふ

ところを要約すれば「人を警め、時代を諷刺し、社會に響かせる」つまり「時事に對する生きた句」が眞個の川柳であり、それを要望するといふのである。

かういふ、先生が新川柳精進三十二年にして漸く落ついたところは何所であつたか。——古島一雄氏はその思ひ出話の中で、氏は先生に「時事を諷して貰ひたかつた」のであるが「失敗した」と述懐してゐる。この失敗は、一面、新川柳の發展は如何なるところにあつたかを暗示するものであるけれど、その古島氏が先生を川柳界へ送り出す當初、先生に望んで得られなかつた世界。意識的には相違があるにせよ、結局は同じ時事諷刺の世界ではなかつたか。

私は、この一文を「川柳人」誌上に讀んだ時、しみじみ「輪廻」なるものゝ姿を見ると共に、また何か疲れたる先生をその中に感じたのであつた。あゝしかしそのうしろに、今日の「死」が待つてゐやうとは誰が豫想し得たであらう。

かうして先生の川柳運動の跡を振りかへれば、それは單に平らなる一つの圓を描いたに過ぎないのである。しかしながら荒野に描かれたる圓、それは決して無駄なものではない。それは將來の花圖を約束するものだからである。その功績にのみ見ても、先生は新川柳の開拓者として、永遠にその名を記憶されなければならない。

先生は安らかに眠られていゝ、しかも先生は今、川柳的にも兎に角或る光明を得て、その長い旅を完全に終つたのである。今日のこの葬儀に、何か大往生の人の最後の營みにふさはしいものを感じるのは、さういふ先生の靈の安心の現れであらうと、私はみまへにその冥福を祈りながら、三たび香を拈じたのである。

——合掌——

(昭和九年九月)

南無川柳佛

——人としての井上劍花坊——

逝ける井上劍花坊氏に就て、何か記せとのことであるが、氏が川柳家として歩んで来た三十二年即ち新川柳の提唱者として、そしてまた指導者としての業績は、私共が今のこの感傷から醒めた時改めて嚴肅に、検討されなければならぬものである。従つて私は、こゝでは一切そのことに觸れず、私の思ひ出の中にのみある氏の面影を傳へて、知を辱うしたその日の光榮を回顧するにとゞめ度いと思ふ。

私が兎に角「劍花坊」といふ名前を覺えたのはいつの頃からか、今記憶にない。しかし十四五の頃でもあつたらうか、何んといふのかその誌名も忘れたが、ある軍人關係の雜誌に「拙者は大石内藏助ぢや」といふ連載小説を執筆してゐた「司馬僧正」といふ人が、井上劍花坊といふ川柳の先生だといふことを既にその時知つてゐたのだから、その名を耳にしたのは可なり古いことなのであらう。

その後、十六七から川柳に興味を覺え、雑誌の投句などを始めるやうになつて、いよ／＼その名は私になつかしいものとなつて行つたが、お目にかゝつたのはそれからすつと遅れて、私が講談社へ入社した翌年——大正七年の正月、社主催の新年會が白山の某所に開かれ、私も接待役としての席に待した時がはじめてであつた。

その頃私は、川柳を、十世川柳平井省三氏に聽いてゐたので、新川柳界には、たゞ一人久良伎門の津雲國利氏を知るのみの、他には全く柳友といふものを持たなかつた。従つて私の名前などいふものは、東京の川柳界には無いのも同然であつたが、劍花坊氏は名乗ると直ぐこの無名子を思ひ出して呉れ、川柳家がかういふ雜誌社に入つたことは、何かにつけて柳界に便宜であると云つて喜ばれ、私は感激してそのお流れを頂戴したことを今もつて覺えてゐる。

こんな譯で、柳界の先輩としては、お目にかゝつたのは、誰よりも劍花坊氏が最初であり、もし師をもとむるとすれば當然その門に入るべき私であつたが、運命といふものは面白いもので、間も無く、米澤から東京へ歸任された津雲氏の紹介で、その四月私は未知の久良伎氏の門に連らなることゝなつたのである。

今日の人には、久良伎門、劍花坊門などゝいつても、別に強く響かないが、當時はこの二派は柳

界に於ける源平兩氏の對抗にも似て、互ひに覇を争つてゐた。

私が入社當時の久良伎社は第三期ともいふべき時代で、卯木、夜叉郎、東魚など、いふ先輩も餘り足しげく見え、同人は實に寥々たるものであつた。それに引かへ劍花坊派は、所謂「二本榎時代」の黄金時で、我世の春を謳ふ聲は天下に徭し、私など久良伎社の片隅から、それを「なに俗流が」と云ひながらも羨やましいものに眺めてゐた。

そんな事から、劍花坊氏に御無沙汰をつゞけること、三四年にも及んだが、しかし氏は、さういふ間にも數ならぬこの私を、よく覚えてゐて呉れた。忘れもせぬ大正十年十一月六日、柳樽寺主催の全國川柳大會が淺草の宮戸座前の「あづま」に開かれた時のことである。當日久良伎氏はこの句會に於ける最も重要な選者であつたが、この時病體の爲め選句不可能となつて、私へその代理を命ぜられた。しかし格から云つても容易ならぬ選である。わが社中だからと云つて、主催者たる劍花坊氏の諒解がない以上、獨斷をもつて私を推挙すべくもない。私をこの晴れの席に選者として起させたのは、勿論劍花坊氏も私を認め、久良伎氏の申出に賛成して呉れたからであらう。

私はその日、さういふ一代の面目をほどこしたばかりではない。その夜公園劇場裏の「テツボウ軒」に催された懇親會に於いて、當時私にとつては眩しい存在であつた三太郎氏や、雉子郎氏や其

他劍花坊派の錚々たる連中と、はじめて盃を交はし、談笑する機會を得たのである。私が今日川柳家として、多少ともその名を知られるにいたつたのは、實にこの時、劍、伎二大先輩の（あゝ私はこの兩氏を恩師と呼ぶべきである）海の如き宏量によつて破格の地位を與へられたことにはじまると云つてもいい。

劍花坊氏は其後も、同派に何か特別の催しがあると、私を選者として迎へて呉れた。私はその光榮に顛へながらも、その頃はもう雑誌社をやめて新聞社づとめとなつたので、意の如く出席することを得ず、いつも不義理をつゞけて來たが、氏はこれをも許されたのであらうか、かういふ不徳の私にもかゝはらず、私の方に何か催しがあつて氏をお迎へすると、大概では快く出席され、何かと指導された。

私は別にこれに對しての御恩報じといふ譯ではなかつたが、劍、伎兩氏が還曆を迎へられて以後といふものは、私も妻帯してやゝ家庭らしいものを作りその自由もあつたので、この川柳界の兩長老をお慰めする氣で、年一回粗飯を用意し、茅屋にお招きすることを例として來たが、氏は「久良伎君と語るのが愉快だから」と云つて必らず見えられ、よく食ひ、よく飲み、よく語られて歸られた。そして夕ぐらぬ私の蒐集品に目を止められては、後日その出所、用途等を熱心に問はれ、傍人

にさも珍品の如く吹聴されるので、却つてこちらが赤面することがあつたが、それほど私の家の印象を快いものにされてゐたやうである。

今年の正月のその十日は、恰度氏は、芝の恵知十の何かの會に講演の約束があり、大分御多忙のやうであつたが、それでもそちらの終るのを待つて自動車で駆けつけられ、夜遅くまで語られて歸つた。その時はもう體が多少不調だつたらしかつたが、それでも頗る元氣で、相變らず久良伎氏と言葉戦ひをやつて居られた。

それから二月、西念寺に故飴坊氏の追悼を兼ねた建墓記念の句會が催された時、會場で氏にお目にかゝると、氏は今日は君としく語り度い、一杯獻じ度いのだが、何所か考へて置いて呉れと、やさしい眼を私に與へた。しかし私はその晩他からも歸りを一緒にしたいといふ話が澤山あつたので、どうすることも出来ず、氏との懇談會は後日に譲り、私は今もつてこのことを残念に思つてゐる。其夜は他の連中と共に氏にもつきあつて頂くことにして、一同銀座のある小料理屋で歓談したが、氏は一同の話を大さう面白がり、盃もはやつて更けて歸られる時も、別にさびしい後姿ではなかつた。

越えて四月となり、傳法院の大書院に開かれた「きやり」十五週年記念句會の席上で氏にお目に

かゝつた私は、一月お會せぬ中に、氏のすつかり弱られてゐるのに驚いた。筆持つ手は顫へ、お氣の毒にも涙水さへたらされてゐた。これはいけない。しかしさう思つたのは私ばかりではなかつたらしい。今度、函館から青森、更に静岡へと行き、各地の柳人と會つて來たが、四月傳法院に於ける氏の様子を眼のあたりにした柳友達は、みんな氏のその後の容態を案じてゐた。殊に九月九日の夜は、静岡市の郊外狐ヶ崎遊園地の「翠紅園」に、その日集つた柳人の懇親會が催され、これには東京の連中の他、大阪からの水府氏、雲雀氏なども出席されたので、期せずして話は劍花坊氏の健康の上に及び、いづれも其後の消息を得ぬだけに不安をつのらせたのであつた。劍花坊氏が鎌倉の建長寺へ暑さを避けられてゐる、或ひはゐたといふことは「川柳人」によつて承知してゐるが、誰も病勢については知るところがなかつた。それだけに一度不安にかられると、ますます想像は悪くなるばかりである。

「どうも」周魚氏と私の口から一緒に出たのはさういふ言葉であつた。しかしこんなに早く逝かうとは誰がその時思つたであらう。

十日の朝の汽車で、私と周魚氏は歸京したが、東京へ着いての時間が半端になるので、私は途中周魚氏に別れ、一人鎌倉へ立寄つた。久しく逢はぬ人をそこに訪ねる爲であつた。その人はこの珍

らしい來訪者に喜び、北鎌倉の寺々を案内しやうと云つて呉れた。北鎌倉と聞いて私は直ぐに建長寺の劍花坊氏を思ひ出したが、もう東京へ歸られた後かどうか判らず、折から雨も降り出したのでその親切を斷り、兎も角一杯飲ませて貰うことにした。

その翌日の十一日である。私は「井上劍花坊氏今朝五時建長寺に於いて逝く」の通信に接し、自分の耳を疑つた。きのふの今日、誰がこれを信じ得やう。しかもきのふ鎌倉に居た自分ではないか。私は早速新聞の爲めに計報記事を書き、寫眞まで添へて工場へ廻したが、それが刷り上つて活字になつた自分の文章を読みながらも、まだ夢見る心地であつた。

十三日、私は建長寺の正統院に於ける劍花坊氏の葬儀に列し、あの日、私がこゝに來てゐたらと今更ながら縁つたなきを思ひ、更に今日のことを云ひ當てたやうな静岡の夜を考へて、いや或ひは何か通ずるものがあつたのかと實に感慨無量のもものがあつた。佛家はかういふ關係を何んと云ふのであらう。

劍花坊氏と私とは、何等子弟的關係はなかつた。従つてお目にかゝるのも年に漸く數回であり、傍近く侍したこともないので、氏の日常生活の上に反映する眞面目といふものは知るべくもなかつたが、たつた一度、本當の氏の委らしいものを見せられたことがある。昨年の初夏であつたに違ひ

ない。日は忘れたが、まだ私が羽田へ移らぬ前だつたから、六月より遅い筈はない。氏は某畫伯との合作展を三越本店に催した。その時新聞方面の批評を得たいといふので、各社の美術關係記者を一夕柳橋の某所に招待した。相手は新聞記者なので、このお取持ちは君がいゝと氏からの招きで、私も幹旋役としてその席に連らなつたが、氏の招待方法に何か通ぜぬものがあつたのか、それとも關係記者にその夜俄の用事が出來たのか、約束の六時になつても誰一人も見えない。もう藝者も來て仕舞つたのに、七時になつても八時になつてもまるで人を呼んで居なかつたやうに、影一つさもないのである。私達三人は、廣い座敷の中に白らけ切つて、ぬるい番茶をガブ／＼やつてゐるより他はなかつたが、もうこれ以上待つても仕方がない。諦めて内輪だけで始めやうと、藝者のおくやみを聞きながら、味の無い酒盛をはじめたが、どうにも形がつかなかつた。そればかりか、氏は諦めるにも諦めがつかぬ様子で、盃は手にするが飲みもせず、直ぐ下へ置いては愚痴を云ひ出すのである。氏の肚になれば尤もには違ひないが、かうなると私はどうしていゝのか判らない。我關せずと一人で飲んでゐる譯には行かない。そこで私は、かうしたら少しはお慰めすることが出來やうかと、自分にも經驗がある、かういふ失敗のいくつかの實例を話して「新聞社の方々を呼ぶと時々かういふ事がありますよ、何しろ何時事件が起るか判らないのだから約束が約束にならない」といふ

と「ウム、君もかういふ目に遭つたことがあるのか、誰も来ないことがあつたか」とはじめて顔の曇りが除かれ、幾分諦めがついたやうであつた。

援兵来る、といつたその時の氏のホツとした顔を、私はまだ思ひ出せるが、その時私は眼の前にあるクサリ返つた氏を透して何故か日頃の、川柳大将として傲然と構えた氏に「さぞお辛いことであらう」と同情の念を禁じ得なかつたのである。私はそこに眞面目に近い剣花坊氏の姿を見たからである。

人騒げども騒がずといふやうな剣花坊氏の日頃の態度は、いかにもその人の大きさらしいものと思はせる一面、また太い魂の持主らしく思はせしもしたが、氏は決してさういふ質の人ではなかつたらしい。句などを見ても、最大級の言葉を使ふことが好きで、この點、人と作品とびつたり來てゐるが氏が誇張好きなのは、元來が漢詩畠の人であり、例の白髮三千丈式の唐人趣味が川柳にまで出たといふに過ぎず、本當の氏は、もつと弱い人だつたやうに思はれるのである。たゞ一派の統率者として、その弱氣をむき出しにし得ぬ立場上、強氣の鎧兜を纏つて叱咤してゐるが、それだけ日頃の氏は自分を抑へる爲めにどんなに苦勞をされたか、齒を喰ひしぼるといふ言葉があるが、その辛さを随分味はつたに違ひないと、偶然見た氏の裸に近い姿の中に、それをお察しゝたのである。

氏の柳論は、確に強つ氣であつた。しかしよく味はふ時、その行間にどうしても弱氣を隠し得ぬ人のよさがほの見えて來る。氏の川柳的主張が時と共に轉ずるのは、この弱氣、即ち氏が他に影響され易い人であることを證するもので、氏の三十二年の足跡を見ると、幾度か、他に揉まれて心にもないところを歩いたらしい跡がある。しかしこの弱氣があつたればこそ氏は一つの人徳を持ち得たのであらう。氏から離れて行つた門下の數は少くないが、いづれも氏の川柳的態度をあきたらずとしての袂別で、人間的には誰も氏から離れてはゐない。柳樽寺といふものがだん／＼柳界の中心を外れて行きながらも、剣花坊氏が最後まで柳界の大御所として君臨し得たのは、氏が新川柳の祖といふことのみではない。この弱氣から來る情のつながりが、大いに與つてゐると見てもいゝやうに思へるのである。離れた人達がどう思つてゐたか、或ひは剣花坊氏は知らなかつたかも知れないけれど、私はそれらの人に今も變らぬ先生思ひの言葉を聞かされ、その度び、いつもひそかに涙ぐましいものを覚えてゐたのである。これだけで剣花坊氏は、安らかに眠らるべきである。

以上、私は自分を語ることに急にあつたが、これはかりそめの縁から、かゝる人に知遇を得た身の喜びをいつまでも銘記したかつたからで、この光榮を靈前に感謝し、心から「劍花院歸幸道一居士」の冥福を祈る次第である。(昭和九年九月)

人物のある風景

—川柳家の心構え—

嫌ひなものは、——景色。

何かの問合せに對し、敢然としてかう答へたのは、我が三太郎である。

私はそれを見た時、ハハアやつてるなと思つた。恐らく私以外の多くの人も、これを彼一流の逆説と受取つたに相違ない。

ところが、今夏久々に彼と長途の旅を共にし、計らずも彼のその言の偽でないことを知つた——といふのは、景色嫌ひの三太郎を、まさしくこの眼で見たのである。

今夏の旅は、生憎三太郎はおなかをいたためてゐたし、私は私で、相變らずのロイマチスに酒杯を速慮しなければならかつた。従つて途中元氣のありやう筈はない。おとなしく兩人とも寢臺に腰うちかけて、これから行く青森のこと、函館のこと、そんなことを話題として繰返すより他はなかつた。

と、突然首を上げた三太郎は、何かを待つやうに、しばらく窓外に眼をやつてゐたが、やがて「君見たまへ」と、眼前をよぎる風景を指さし、私に注意するのであつた。三太郎は年々の東北旅行にいつか馴染となつてゐる沿線の何所かの景色を、私に紹介したかつたのであらう。にもかゝはらず私は、恰度煙草に火をつけやうとしてゐたので、その三太郎の折角の親切に添ふことが出来なかつた。すると三太郎は、それを私に見せることが出来なかつたのを非常に残念として、僅か十秒とは眼前に無かつたであらうその景色（後で聞くとそれは一個の民家に過ぎなかつた）のよさについて熱心な説明をはじめたのである。のみならず、それをきつかけとして、このあたりの風物の奇を私に語るのであつた。

草の名を知らなくとも、彼は私にその可憐さを語つた。山の名を知らなくとも、彼は私にその莊嚴さを語つた。そしてまた海をも、——さう、海では私は忘れぬ。黄昏の青森の街を、私と肩を並らべて歩きながら、遙かに灯のまたゝき出した海を望んで「エトランゼ」としみくくと囁いた彼でさへあつたのである。

あゝこれが、景色嫌ひを標榜する三太郎の所業なのである。いよ／＼もつて彼の眞意のほど、疑はざるを得ないではないか。しかも私はさういふ彼の中に、ふと彼の景色嫌ひを感じ出したのであ

る。

私は青森の旅館、鹽谷本店の大きな座敷に寝ころびながら、五花村君と語つてゐた。三太郎は所用の爲外出して留守だったので、後は二人きりであつた。私は五花村君の持つてゐる「白河を名どころにして關の趾」といふ彼自身の句を染めた手拭に目をつけ、いつかは聞かうと思つてゐた。「白河關趾」に對する疑ひをいろ／＼たづねたりした。そんなことから、自然、話は芭蕉の奥の細道に及び、やがて芭蕉の作句態度について論じはじめた。論じながら私は、いつか三太郎のことを思ひ出し、三太郎が景色を嫌ひだとする理由が、だん／＼判りかけて來た。

三太郎は詩人である。詩人と云へば、安く扱はれても、星に嘆じ、董に歎くものとされてゐる。その詩人が、敢然として、僕は景色は嫌ひだと云ひ放つたのである。これは詩人にとつて自ら資格を放擲したものと云はなければならない。しかしながら、これは世の所謂「詩人」に對する場合の疑ひであつて、三太郎は詩人には違ひないが、しかし彼は尋常の詩人ではない。彼は川柳詩人である。川柳家——彼をさう考へた時、彼の景色嫌ひだといふ奇矯の言も、私にとつて極めて當り前のものとなつて仕舞つた。いや却つてその言ある爲めに、いよ／＼彼に川柳家としての生彩を加へて來るのを知つたのである。

青森への車中の態度に見ても、決して三太郎は景色が嫌ひではない。景色に興味がないのでもない。景色が判らないのでもない。その旅へ出發の日、三太郎は上野の驛で、私に、僕は今度引越すのだが、何か一ついゝ風景畫の軸をさがして呉れないかと云つた。こんな景色嫌ひといふものが世の中にあらうか。

その三太郎が、なぜ景色が嫌ひだといふのか。三太郎は景色が嫌ひなのではない。景色に負けるのが怖ろしいのである。景色の中に自分が溶かされて仕舞ふことを怖れてゐるのである。その爲めに三太郎は、景色を睥睨して、僕は景色は嫌ひだと叫んでゐるのである。こゝに三太郎の娑婆ツ氣がある。しかもこの娑婆ツ氣こそ、川柳詩人たるものにとり、その資格をつくる上に於いて、最も大切な要素ではないのか。

由來、川柳と俳句とのけじめは、俳句は天然を詠ひ、川柳は人事を詠ふものといふやうなところに分けられてゐる。が、この位あぶない分け方はない。或ひは量に於いて、さういふ傾きがないでもないかも知れないが、俳句必らずしも花鳥諷詠にのみ終るものではなく、川柳また必らずしも人情風俗のみを寫すものとは限られてゐない。この間、両者はなほだ摺々である。

川柳は前句附にはじまる。だから俳句とは兄弟にして兄弟にあらず、といふやうな川柳史觀はも

う通用しない。川柳の眞の原始形態を知らうとするには、その前句附を飛び越えて、もう一步前進しなければならぬ。そこに展かれるものは、初期俳諧の柳俳一如の世界である。こゝから發足した川柳と俳句とが、取材方面にさう相違がある筈はない。

では何所で川柳と俳句とを區別するか、俳諧に於ける發句と平句との趣きの相違、無論それも第一に考へなければならぬが、私はこれを諷詠態度の相違にあると見たい。——といふことは、詠まれたものゝ何所に作者が立つてゐるか、その作者の在る場所によつて、その一つは俳句となり、その一つは川柳となる。私一個はさう考へてゐるのである。

この兩者の相違は、おのゝ育ての親のふところから生じた後天的性質のものである。せめるといふことを一つの修行として來た俳句、何氣なくといふことを一つの修行として來た川柳、共に非人情な世界への求道ではあるが、その立場は自ら相へだたざるを得ないのである。

俳句の作者は、詠まれたものゝ向ふ側に立つ事を願つた。川柳の作者は詠まれたものゝこちら側に立つ事を願つた。かういふ作者達にとつて、諷詠態度の同じ譯はない。俳句の作者は、自然あつての人間だといふ。川柳の作者は、人間あつての自然だといふ。俳句の作者はおのれも景色の一部だと見たがるが、川柳の作者は景色は人間の一つの背景にし過ぎないとする。

例へば、南畫に於いては畫中の人物は景色を助ける爲めの存在にしか過ぎないが、浮世畫に於いては、描かれたる景色は、畫中の人物のある生活の情緒を助ける爲めの背景にしか過ぎない。廣重の東海道五十三次の版畫は有名であるが、あれは單なる風景畫ではない。旅するものゝ喜怒哀樂、さういふものを自然現象の變化を背景として表現しやうとした所に生々と私共に迫るものがあるのである。この二者の行き方は、恰度川柳と俳句との諷詠態度のそれと酷似してゐる。

かう考へて、川柳詩人三太郎が、僕は景色が嫌ひだと云ふのも故あるかなと思つた。そして、敢然としてそのことを口に出して云ひ切れる三太郎は、よほど川柳家として本物だなと、その心構えを一寸羨やましくさへなつた。

そこへ三太郎が用達しから歸つて來た。彼は歸つて來るなり、私にどうしたとも云はず「君、黒石の酒は、實に大した酒だぜ」と、ほんのり色づいた頬を撫で、見せた。私は、なんだいななか、悪いと云つてゐた癖にと、茶も飲まず待つてゐた自分が可笑しくなつて、途端に、なぜか「行く先に夕飯あつて旅衣」といふ古川柳を思ひ出し、ひとり微笑んだのである。

川柳家は昔から景色が嫌ひだつたと見える。(昭和九年十月)

十七字への惧れ

— 自由律派俳人に對する疑ひ —

所謂新しい俳句に就いて、今月（十二月）は珍らしく萩原井泉水、河東碧梧桐の兩氏が、揃つて論陣を張られてゐる。即ち都新聞文藝欄に掲げられた井泉水氏の「俳句界對立の立場」及び中央公論に掲げられた碧梧桐氏の「萬葉以後の新興運動」がそれである。私はこの二つの論文を、同じ短詩界に遊ぶ川柳家の一人として興味深く拜見したが、常々俳句の自由律といふものに對し、多少の關心を有つ私にも、讀後、何かその筋合の上にようけがへぬものが生じたので、その點をこゝに申述べ御示教を得たいと思ふのである。

尤も井泉水氏の云はれるところは、少しく抽象的で、あれだけでは「傳統派の人々はなぜもつと自らの今日を疑はぬのか」といふ以上に私には聞けぬので、これに對しては別に異説のあらう筈もないし、こゝではより詳しく検討されてゐる碧梧桐氏のそれを「自由律派」の主張を代表するものと見て専ら氏の考察を對象に、私の疑ひを申上げやうとするのであるが、その前に私は先づ碧梧桐氏の議論に九分の賛意と喝采とを贈るものであることを告白する。

碧梧桐氏は云ふ「七五調は神代ながらのリズムであるとか三十一字形式をやまと言葉の最善最美の形であるとかなすのは無根據な概念的迷信である。七五調は萬葉人の創造なのだ。歴代和歌集はその萬葉の創造の摸倣、その踏襲なのである。かういふ、詩は全的自己の創作でなければならぬ。一半の先天性を缺くところに歴代和歌集の墮落がある。外的形式及びリズムを固定して、内的感情のウエーヴを律しやうとするのが、摸倣と踏襲の大なる缺陷である。こゝに、弛張緩急區々なるべき感情内容のウエーヴを表現する形式として、或る局限された一律を選ぶことの、大なる不合理性を認めなければならない」と。

氏は更に、形式マンネリズムの行き詰りが當然招かねばならぬ「非詩的根帯としての理智の潛入」に就いて指摘され、最後にこれを救ふの道は、たゞ「先づ總ての因襲と人爲を罷脱して出来るだけ原始に還元する大旋廻運動である。古事記時代へまで溯源して、詩歌の理知化、理解化、及び形式化のマンネリズムから、感情内容のウエーヴに即する自由律の直感に轉廻すべき大なる目覺め」よ

り他にないと断じられてゐる。

右は氏の論文の大骨を拾ひ出したのに過ぎないが、かういふ條理を極めた氏の議論は、從來の「十七字だから俳句である」とか「古き革囊に新しき酒を盛れ」とか云ふ至極泰平な傳統派の醉語に聞き飽きて來た私の耳に、如何にも新しく、生々と響いたに違ひない。にも拘らず、何を私はその中に疑はうとしてゐるのか。

二

私は折に觸れ時に臨み、我が嘆きを十七字に託してゐる。それは私が川柳家であるが故に、十七字といふ窮屈な言葉に我が感慨を盛らうとしてゐるのではない。川柳といふ短詩の形式が私の感情の姿を表現するのに最もふさはしい事を知つたからである。更にその短詩の持つ格調が、感情表現の手段として効果的である事を知つたからである。

まつたくこの十七字音を一句の調べとする詩の形式は、不思議な働きを持つてゐる。表現を試みた私の感情の姿の上へ、この詩形は豫想せぬ一種の情緒をさへ加味して呉れるのである。それは確に私の計畫した効果を、二倍に價値づけて呉れるに違ひない。かういふこの詩形の微妙な働きは一

體何處から來るのであらう。私の考察は碧梧桐氏とは反對に、こゝから始まるのである。

碧梧桐氏は、三十一字形の發見も、七五調の統一も、萬葉人の創造だと云はれてゐる。私は古代歌論に就て何等の智識をも持つてゐないので、その事の當つてゐるか否かを知らないが、或はさうなのであらう。しかし氏は、何が故に萬葉人が、詩歌として價値づけられるべき感情内容のウエーヴを直感して、五七調、三十一字形といふ一律に局限する必然性を發見したか、それに就いては何も説くところがない。勿論私は、五七調が神代ながらのリズムであるとか、三十一字形をやまと言葉の最善最美の形であるとかと、それあるが故に主張するものではないが、氏の議論の基調をなすべき最も大切なこの問題に對し、充分な考案を下されて居ないのはまことに遺憾である。

七五調と云ひ、三十一字形と云ふも、言葉の一つの組合せであつて、決して人間本來の呼吸が持つリズムの形體ではない。既に言葉として先天的に五七調を持つて居なければならぬ筈の、神代から一つ手近い原始やまと民族に依つて作られたとする古事記等に見える多くの歌論が、長短區々、極めて自由な状態に於いて諷詠されてゐるのは何故か、これは彼等がその自然性に即し、卒直、無技巧に、息づかひのまゝの言葉を持つてその感情を表現してゐるからである。しかるにさういふ勝手氣まゝな古代歌論の中に、私共はたま／＼七五調を發見し、三十一字形を見出す。意識されたる

言葉の組合せとしてではなく、自然な息づかひの、ある段落として。

この事は後世の歌謡の律調を論ずるに當り、私共のよく／＼考へなければならぬ點であらうと思ふ。

三

前にも述べた如く、我が古代の歌謡は、感情内容のウエーヴの千狀萬態に従つて、自由な言葉で諷詠されてゐた。さういふ歌謡に對し、私達はこれを總括的に單に「うた」とは呼ぶけれども、例へば「和歌」とか「俳句」とかいふやうな、一つの限られた名稱を贈る事は出来ない。なぜならばそれらの歌謡にはそれを統一すべき定つた詩の姿がないからである。では「和歌」とは何か。「俳句」とは何か。

七五調及び三十一字形は萬葉人の創造だと碧梧桐氏は云はれてゐる。萬葉人は一體何所からそれを發見して來たのであらう。碧梧桐氏は「言葉及びリズムに對する敏感性」だと云ふ。それは云ふまでもない。しかしその敏感性は何を反射させたか。私は單なる「美しくあるべき言葉の組合せ」方を生んだのではなく、言葉といふものゝ向ふにある呼吸本來のリズム、この息づかひの感情表現

上に於ける効果に、創造者の敏感が働いたのだと考へる。

音楽がある音と音との組合せを行つて、一つの情緒を作り出す様に、言葉も息づかひのまゝに驅使され、ある所にまで疊まれて行けば、やはり一つの情緒をそこにつくり出すものである事に、創造者は氣がついたのであらう。創造者はこの息づかひのはすみにはずんで、あるクライマックスに達した時、そこに醸し出された情緒、その中に一つの完成された「詩」を感じたのだと想像する。

和歌とは、さういふある「詩」の全體を包む特殊な氣分に、假りに付せられた名稱である。この事は俳句の場合に於てもまた同じであるが、この情緒を醸し出すに必要な言葉の調べ、即ち創造者が「詩」を感じた刹那の現在状態に於ける詩の姿を約束化したものが「詩形」と名づけられてゐるものではないからうか。私は先に自分の川柳實作の體験に徴して、詩の固定形式が表現効果の上に微妙な働きをなす事を申述べた筈であるが、その効果は實にこの「詩形」の持つさういふ働きに他ならなかつたのである。内容それ自體の持つ情緒との二重奏が融合して、特殊な表現効果を收めてゐたのである。

他の文藝にあつては、表現即内容と云はれ、形式は單なる表現手段としてその中に包含されて仕舞つてゐるが、固定形式を持つ詩歌にあつては、形式、内容、表現、この三つが渾然と融和して始

めて價值をそなへるところに文藝としての特異性がある。詩歌に於ける「形式」は、他文藝のそれのやうに二にして一のものではなく、一にして二なるものである。詩歌を論ずるに當つてこの特異性を忘れる時、そこから錯覺が始まるのである。

四

碧梧桐氏の議論の中に発見しなければならぬ一例の錯覺も、つまりはこゝに出發してゐるやうである。碧梧桐氏は俳句の墮落を、その十七字といふ固定形式のマンネリズム、即ち詩形の踏襲と模倣とにあると云つてゐる。これは明かに氏が、俳句の形式といふものと内容といふものとを、一にして考へられてゐる證據である。

詩形といふものは、詩といふものに特殊な情緒を保たせる爲め、はずみかゝる息づかひに、ある統制裁斷を加へたものである。故にこそ「和歌」にはしか呼ぶべくふさはしい詩形が設けられ、また「俳句」にもそれにふさはしいものが定められてゐるのである。従つて詩形は感情表現の自由を阻むものではなく、却つて感情表現の効果を助長させるものなのである。

既に「和歌」と云ひ「俳句」と呼ぶ以上、さういふ名のもとに、或は意識のもとに製作された詩歌には、その名にふさはしい詩感が無ければならない。詩感とはその詩形が醸し出すところの情緒の意識を云ふのである。これはその詩歌の内容とは別に、常に有るべきもので、またその名のある限り永久に日本人と共に存在すべき筈のものである。

碧梧桐氏は、俳句の墮落は形式のマンネリズムにあると云はれてゐるが、それは内容のマンネリズムの誤りではないのか。そこに疊むべき息づかひのマンネリズムにあるのではないか。感情内容のウエーヴに即して弛張緩急區々なるべき息づかひを無理にある時のある人の息づかひに律して言葉に移さうとするところに、自然さと濺瀾さを失ひ、今日の生氣なきマンネリズムに陥つたのではないのか。私の考へるところ今日の定形詩の墮落は、たゞその詩形の醸し出すところの情緒にのみかくれて、内から湧き起るべきもの、それを忘れたに原因すると思ふ。

碧梧桐氏は、蕪村が俳句の十七字を破壊しなかつた事を疑ぐつてゐるが、寧ろ逆に蕪村が何故俳句の十七字を捨てなかつたかを考ふべきであらう。「春風馬堤曲」の如き、或は「晋我追悼曲」の如き、あの頃にあつては破格の長詩を試みてゐる蕪村である。もし蕪村にして俳句の詩形が、我が感懐を託すのに有害無用のものであると知つたならば、何で破壊を試みずにあやう。蕪村はこの詩形の効果を知つてゐたのである。

蕪村は詩形は詩形として、そこに盛る言葉の息づかひを、常に我が感情内容のウエーヴに即してはすませた。

柳 ちり 清水 か れ 石 と ころ く

かういふ蕪村の句を引例するまでもない。かるが故に彼の句は詩形に準據しながらも私共に清新な響きを傳へるのである。私はこの事實を芭蕉の發句に於いて一層感じさせられる。

五

詩形と字數といふものとは、自ら別問題である。詩形とは字の數ではなく、この音から來る調べを尊ぶのである。従つてその字數はその詩形の持つ特殊な情緒を亂さぬ限り、息づかひに従つて、必ずしも十七字である事を要さないかに思ふ。

私にとつて、所謂「新しい俳句」と呼ばれる自由律派の人々の句の字數は問題ではない。長からうと短からうと、その息づかひさへ「俳句」と名づけられた詩の持つ情緒を亂さないものならば、私はこれを俳句として認める。たゞ疑ふのは十七字といふ詩形にのみ呪ひをかけてゐる事である。私は言葉を急がなければならぬから、再び前文を繰かへす事を避けるが、自由律派の人々が、

俳句の墮落を、その内容のマンネリズムに原因すると見ず、十七字といふ固定形式の踏襲にあると見てゐるのに疑ひを抱くのである。新しい俳句とは云ひ既に「俳句」と名乗つてゐる以上、それらの人々も、この詩の形式が持つ一つの情緒と、その情緒がもたらす効果とを認めてゐるのであらう。さういふ意識のもとに我が嘆きを諷詠される時、その息づかひはたま／＼言葉としてその詩の原始的な姿を備へる事はないか、果して有り得ない事であらうか。もし「新しい俳句」であるが故に十七字を惧れると云ふのであれば、固定詩形の中に作句するよりも窮屈な事である。自由律派の亞流の人々の句が、既に、従來の十七字形を離れて、何か一つの姿を形づくらうとしてゐるのを見て、私はつく／＼さう思ふのである。碧梧桐氏は、十七字形の正統觀を固守して、その初期に於ける十七字に則らない作をも改ざんせんとした晩年の芭蕉を「創造に勞れた、形式中毒者」として憫んでゐる。十七字を惧れる自由律派の人々にして、逆にこのそしりを招く事なければ幸ひである。(昭和四年十二月)

俳諧の厄難

——忘れられた人事趣味——

天保頃の俳人に、師竹庵吾山といふ人がある。どういふ俳歴の人か知らないが、この人が斯ういふことを云つてゐる。此頃の俳諧を見るといづれも古池や流ばかりで無味無氣誠に興がない。これは世の宗匠達がたゞ幽寂高尚のみを心がけ、眞の俳諧なるものを忘れてゐるからであると。そして人事趣味の句が全く影をひそめたことを「俳諧の厄難」だと嘆じてゐる。

正風にあらざれば俳諧にあらずとされてゐた當時の俳壇にあつて、斯様な言を試みた吾山は、たしかに一個の異端的な存在であつたに違ひない。しかも斯ういふ吾山の呪ひの的であつた當時の宗匠達が、月並俳人として悉く退治されて仕舞つた現在の俳壇に於いても、吾山のこの言葉のみは依然異端者のそれとして残されやうとしてゐるのは皮肉である。

一口に「俳諧」といふが、現在行はれてゐる俳句は、俳諧の發句の獨立變化したものであつて、眞の俳諧からは大分距りのあるものである。その意味で虚子氏の「花鳥諷詠」といふ命題は確かであり、今の俳句の姿を正しく説明してゐる。が同時にこれは、今の俳句が如何に俳諧を忘れつゝあるかといふことを物語るものである。

芭蕉は「さび」といふ藝術を俳諧の上に創造した。しかし眞の俳諧がこの一點にのみかゝるものでないことは、連句に於ける芭蕉の俳腸に見て明らかであらう。芭蕉がなぜ炭俵に落ついたか、それを知れば眞の俳諧とは如何なるものであるかゞ背ける。しかるに、子規は俳句革新に當つて、この俳諧の連句方面を採り上げることを見せた。従つて子規を亞ぐ人々もまた喰はず嫌ひにこれを顧みなかつた結果、發句に於ける芭蕉のみ傳へられて、今日のかたくな「俳諧思想」がつくられて仕舞つたのである。

今の俳人達が「寫生」を俳諧唯一の道として小説味、戯曲味、さういふ人事趣味の題材を俗なるものと排斥してゐるのは、發句專一、連句を忘れた結果であつて、俳諧の眞面目に觸れぬ爲に起つた誤りである。更にこの觀念は川柳の如きは我が住む世界とは別な世界の、低調卑俗なものゝ如き思想をさへ抱くにいたつた。

「ホト、ギス」十二月號の「還曆座談會」を見ると、その中で虚子氏が、川柳は文化文政頃から始まつたものであらうと云つてゐるが、虚子氏にしてこの言あるがやうに、俳人達の川柳に對する知

識はおほむね斯くの如きである。

化政度の川柳は狂句と云つて眞の川柳ではない。この歪められた川柳を對象にしてゐては、いつ迄経つても、川柳の判る譯はない。それより遡つて寶暦明和期のものを讀めば、川柳が決して俳句とは他人でない事が明瞭にならう。他人どころか、眞面目の俳諧といふか、さういふ俳諧味は、芭蕉以後、所謂俳句よりも寧ろ川柳の方に繼承されてゐるのである。何處からそれが來たか、元祿から天明へかけての連句集を繕けば、その間の事情は自ら判明する筈である。

現在の俳句は斯うして全く人事趣味を忘れたが。俳人もまた詩人である以上、葛籐美に對して心動かぬ譯はない。心動いても俳句にそれが許されぬとしたら、他に何かの方法を考へねば腹ふくる。そこで最近連作といふやうな表現形式が新しく問題となつて來たのだと思ふが、斯くの如く俳人が今もつてその句材に制限を設けてゐるのは、月並俳人は退治し得ても、まだその幽靈に憑かれてゐる證據である。藝術に於ける「俗」とは題材の如何にあるのではない。問題は「せめる」そのこと一つにある。

俳人達は一茶を珍しがる間に、もう一步進んで、親しい眼で川柳の世界を、といふことはまた連句の世界をでもあるが、それを覗き直したなら俳諧の天地にもまだ忘れられてゐた世界のあることに氣がつくに相違ない。蕪村の天明に於ける俳諧復興の壯業は、實にこの視野の轉換からはじまつたのである。

今の俳人にその發明ありや。(昭和九年十二月)

柳界小事雜稿

一、先づみづからへ

芭蕉はみづからの俳諧を「道の邊の草」に譬へた。にもかゝらず芭蕉は、その一方に於てさういふ「道の邊の草」の俳諧を、西行の和歌、雪舟の繪、利休の茶にも比し「只この一筋につながる」おのれを、却つて誇りとさへしてゐたやうである。この芭蕉の二つの言葉には、表面あきらかに矛盾がある。しかし芭蕉の俳諧に於ける態度はその間に些の矛盾をも感ぜしめぬ程、この二つの言葉を、身をもつて正しく一つに結びつけてゐた。芭蕉が、俳諧を「道の邊の草」としたのは、それをもつてかへり見るに足らぬ小事とするの意でもあつたらうが、この中にはまた、誰にも摘み易きものといふことも含まれてゐぬことはない。

人は摘み易きが故に、たやすく觸れてたやすく捨てる。その中であつてたゞ一人これを守り、我が一生の仕事としてこの一筋につながるおのれを知り、芭蕉が誇りとしたのは當然である。芭蕉はわが生活の充實を喜んだのである。

川柳を「道の邊の草」に譬へたなら、多くの川柳家は、その言者のおそび心をたしなめるであらう。しかく川柳家は、口をひらけば川柳は我が一生であり、命をかけての仕事だといふ。しかも未だかつてその川柳家の口から「只この一筋につながる」よろこびを聞いたことはない。川柳家の矛盾を、わたしはこゝに見るのである。

川柳家は、ともすれば川柳の「道の邊の草」とも譬へられやうとする現在をこゝろよしとせず、その「道の邊のしめ」たる日の一日も早からんことを祈つてゐる。しかしながら「道の邊の草」はやがてみづから「道の邊のしめ」たる日を招來するであらうか、なるかならぬか聞いて見よといふ果してその草にしめたるの能力ありや否や、その日を待つには、先づそのことを草に聞いて見ねばならぬ。だが川柳家は、誰も川柳にそれを聞いてみやうとはしないかに見える。

我が一生である筈の川柳に對して行はれる柳論の多くは、曰く句會經營論であり、賞品論であり等級法統一論であり、更に課題論であつて、いづれも集團的川柳遊戯法に就てのあげつろひのみでその前の川柳とは何かに就てはあまり考へやうとはしない。かういふ議論は、人々の身近き問題であるが故に、その反響も早いし、また派手であるにも違ひない。とはいへ、こゝに一人の川柳家があつて、我が思ひをひそめる足しにもとそれらの議論に耳を傾けると、そのいづれが彼の心の糧

となるか、所詮は耳吹く風であり、文字通り「道の邊の草」にしか過ぎないであらう。かういふ川柳家に川柳が「只この一筋につながる」喜びを持ち得ぬのも、また當然であるかも知れぬ。しかしながら、川柳を「道の邊のしめ」たれと祈りながら、一方その態度に於てかくの如く「只一筋につながる」熱を缺いて、いつの日川柳の上にその榮譽がもたらされるであらう。ものをはぐくむものは愛である。川柳家は川柳に對し、果して眞の愛を感じてゐるか。

愛とは又一面勇氣である。多くの川柳家は、川柳と四ツに組む勇氣ありや、四ツに組む勇氣とは「只この一筋につながる」よろこびである。しかもたゞ漫然とこの一筋につながるのみであつてはいけない。それが「道の邊の草」と知りつゝも、なほそれにとゞ一筋につながるとする大勇猛心が必要である。川柳を今、名のみにあこがれて、強ひて「道の邊のしめ」たらしめるには及ばない。愛は、望まずとも川柳を、いつかは「道の邊のしめ」たらしめずにはおかないであらう。

百のものを百のものに收めるのは容易である。しかしそれだけの事である。十のものを十のものに收めるのは容易である。しかしそれだけの事である。しかしながら、百のものを十のものに收めるのはさう容易なわざではない。だが、收め得た時の緊張を思へ。芭蕉はみづからの俳諧の中に、その緊張のよろこびを知つたのである。そのよろこびを知らぬ人にとつては詩歌の道はある方便にしかすぎない。方便なればこそ、ともすればおのれの川柳にたるみを感じ、これを川柳全體のくだらなさとして錯覺し、事あれば惜し氣もなく川柳を捨てやうとする。川柳に愛を感じ得ぬのも無理はないのである。

川柳を我が一生と思ひ、命がけの仕事とするからには、何が故に川柳にその價值ありや、これを先づ以つて川柳にたゞすべきであらう。先づみづからを疑ふことである。疑つて後會得すれば自然この一筋につながるよろこびを知るであらう。今までの川柳家にこの覺悟があつたか。川柳界に川柳家多くして、川柳家の少き所以である。(昭和八年十二月)

二、潔癖の人々

川柳、俳句境界論は、何も今に始まつた問題ではないが、最近またやかましくなつて來た。しかしなぜさういふ人達は、これは川柳、これは俳句の領分といふやうに「句」にハッキリ分けへだてを附けなくては居られないのであらう。なぜ句といふものを(こゝで句といふのは十七字型の短詩を指すのである)單に句として素直に受取ることが出來ないのであらう。何にしてもうるさいことであり、また窮屈なことをいふものである。

一口に俳句と川柳との特徴を説く時、よく「俳句とは自然を叙したものの、川柳とは人事を抒べたもの」といふやうな分け方が使はれてゐるが、一體これは誰が決めたものなのか。成程その傾向は強い、が然し決して兩者の全き姿を示したのではない。初心者に手取り早く兩者の姿を思はせるにはまことにいゝ言葉であるが、これをそのまま川柳、俳句の境界線へ、お上が打込んだ傍示杭かの如く思ひ込んで仕舞ふのは少しせつかちすぎる。ところが多くの人を見ると、或ひはさう思ひ込まないまでも、自分でさう決めたがつてゐる。——自分で自分の體へ繩を巻きつけてあがきの取れないやうにしてゐるのである。世の中にこんな馬鹿々々しい事があるであらうか。川柳、俳句に對する一種の謬見はこゝから生じて來る。

果して俳句とは自然のみを叙すべきものか、果して川柳とは人事のみを抒べるべきものか。——俳人とは自然以外の日常の俗事に、耳を借すことを許されてゐないのか、川柳家は人事以外の自然の姿には一さい眼をつむつてゐなければならぬものか。人間の詩情などといふものは、第一そんなに都合よく勝手のきくものであらうか。

一體川柳とは何か、俳句とは何か。——しばらく兩者の發生にまで遡つて考へてみたい。云ふまでもなく兩者の母體は俳諧である。ではその俳諧とは如何なる文學であるか。この事は何もわたし

が喋々するまでもない。手近かにある俳諧七部集の一番も繙いたなら、誰でもその如何なるものであるかを、よく頷くに違ひない。俳諧とは決して當今の俳句に見るやうな、あんな狭い窮窟なものではない。それは自然の美しさを背景として展開する人事葛藤美の一大繪卷である。芭蕉にして既にその連句に於いては

後朝や餘りかぼそくあでやかに

の如き、濃艶極る句を詠んでゐるではないか。この小説的、戯曲的温かさこそ俳諧の生命なのである。

俳句とはその俳諧の一部の獨立したものである。俳句は俳諧の發句から獨立するや、いつかその母體であるところの俳諧の、廣く自由な精神を忘れ、徒らに芭蕉の「幽玄」とか「閑寂」とかいふ彼だけの持つ風流のその形をのみ眞似て、いはれなく人事の一さいを俗として排して來た。その結果は俳句をして竟に今日の如き寫生萬能のはなはだ無味な、氣の利かぬものとして仕舞つたのである。

俳句が俳諧から獨立すると同時に、川柳もまた俳諧から獨立した。しかもこれは俳句の置き忘れ

て行つた人事方面の句を提て（連句から發句を除いたものはこれごとく川柳だと云つていゝ）俳句に對抗して起つたのである。がこれも、俳句が風流の爲めに風流を事として來たと同じく、川柳の爲めにのみ川柳を續けて來た結果、やはり一つの觀念の世界に墮さなければならなかつた。——かくてこゝに川柳、俳句の世界は、確然と區別され得るに到つたのであるが、然しこれ、果して詩歌の正しい姿であらうか、問題はそこである。

川柳とは何かといふことを考へる前に、わたし達は先づ、なぜ自分は川柳をつくるか、——つくつてゐるのかといふことを考へてみなければならぬ。わたし達は川柳の爲めに川柳をつくつてゐるのであらうか。恐らくさうではあるまい。詠はねばゐられないから、——自分の氣持を表現したいから句をつくるのである。この氣持は誰の爲めのものでもない、皆自分の爲めにである。この考へを深めて行つたならば、川柳も俳句もそんなけじめはいつか眼の前から消えて無くなる。あるものはたゞ表現様式としての「句」の姿だけである。

あの川柳は俳句に近いとか、この俳句は川柳に近いとか、いふ言葉がこの頃よく使はれてゐるがその人が俳句とか川柳とかいふ概念の中に作句せず、本當に自分の句をつくらうとするならば、勢ひそこへ——その俳句と呼んでもいゝ、また川柳と呼んでもいゝ句境へ行くのは當り前である。な

ぜなら、それは「句」といふ詩型の母體であるあの、俳諧の自由な廣々とした天地に遊ぶことだからである。「句」には川柳の領分も俳句の領分もない。俳諧の曠野に於いては、俳句川柳境界論などもう無用のあげつろひである。

「句」に還れといふ事——俳諧の精神に還れといふことは、と云つて決して川柳を殺すものではない。川柳を殺すどころか却つてそれは川柳をよりいき／＼と、眞面目に生かさうとするものでなければならぬ。——俳諧といふ母の懷へ還ることは、本然の姿に立ち戻ることである。

この自由な境地、そこへ憧れの眼を向けた川柳家も、今までに決して無かつた譯ではない。曰く短詩、寸句、市民詩、草詩等々の運動は、いづれも己が棲む「川柳」なる世界のあまりに窮窟さに、概念化された「川柳」のあきたらなさに、わが「句」のさうした進展を願つての、川柳の一つの解放運動ではなかつたか。この點俳人よりもやゝ目醒めてゐたと云はなければならぬが、惜しいことには、みんなまだ川柳の幽靈にとりつかれてゐた。眼の前のそれは打破ることが出来ても、遠い世につくられてゐたそれを打破ることは出来なかつた。いや、それを打破らうとはしなかつたのである。川柳といふ名を捨てながらも、その實際に於いては、彼等は「川柳」なる觀念を捨てられなかつたのである。これではその運動が後戻りするの當然で、彼等の事業の揃つて中途半端に終つ

たのはみなこゝに原因する。もう一步その上への飛躍、それさへその人達に出来てゐたならば、なんと幸福な川柳界であつたか知れないのに。

が、然し、このやうに昔から、俳句川柳境界論に於ては、川柳家の方が、俳人よりも案外話は判りがよかつたのである。たゞそれを自覚しないだけの話で、事實は既に一步その境界から平然と足を踏み出しかけてゐたのである。——けれどそれが夢中でやつてゐた仕事だけに、ともすると川柳の幽霊に引戻されたがるのである。

江戸座の系統に屬する俳書「武玉川」や「俳諧鑄」の作品を川柳と呼んで少しも怪しまない程の雅量ある川柳家が。何も今更、これは何々の領分のと、その境界争ひに角目立ての必要はないではないか。

わたし達は何の爲めに句をつくつてゐるのか、先づこゝから考へて行き度い。話はこゝから始まるのである。——形式を捨て、精神へ、わたしの願ふのはそこである。

さても川柳家は「川柳」なる名に於て禍されてゐることよ、——そしてまた俳人も。かうなるともう苦笑どころの騒ぎではない。つい嘆聲も洩らし度くなるのである。(昭和三年二月)

三、本格川柳なるもの

最近、柳壇の一角から「本格川柳」なる叫びが揚げられて來た。しかもその叫びの中には、この「本格川柳」なるものをもつて、川柳の「王道」とすると云つた氣組みが、多分に藏されてゐるのを感じさせられる。「本格川柳」をもつて川柳の「王道」とするといふ意見は、或ひは正しいものであるかも知れない。しかし何をもつて「本格川柳」となすか、それが問題である。提唱者はその謂ふところの「本格川柳」に就いて、何等言葉をもつて具體的に示すところがないが、宣言の氣構えから察して、右の謂ふところの「本格川柳」とは、ある一派の、即ち提唱者の屬する一派の「我黨の川柳」を指してさう自ら任じてゐるかに見受けられるのである。

本格的なるものゝ目安を何處に置いて「我黨の川柳」を本格となすのか、もしもそれがお手盛り の尺度によつてなされたのだとしたら、このくらゐ危つかしいものはない。私一個の考へから云へば、本格なる稱呼は實に容易ならざるものであつて、まだ川柳とは何かといふ目星さへ付いてゐないこの手さぐりの現在の柳壇に於いて、さう輕々とたやすく、一つのものゝ上に冠せ得べきもので

なはいと思ふのである。况んや、ある一派が獨りぎめに自分等の川柳を本格などと名乗るなど、僭越と云ふよりも寧ろその妄想を笑止とすべきであらう。

芭蕉の俳諧は、誰からも本格的なものとして許されるに違ひない。しかも芭蕉は、決して自分の俳諧を本格的なものとは考へてゐなかつたやうである。或ひは内々その自負がなかつたとはしないまでも、かつて芭蕉はその言葉の中に自分の俳諧をもつて、本格とするといふやうな態度は、少しも見せたことがない。芭蕉は「本格」の俳諧よりも「我家の俳諧」を重しとしてゐた。従つてまた芭蕉は他の俳諧に對しても「本格」を認めては居なかつたやうである。「俳諧に古人なし」といふ有名な芭蕉の言葉はさういふ芭蕉の態度をよく物語つてゐるものと思ふ。芭蕉は「本格」よりも「破格」或ひは「超格」を寧ろ尊んだ人のやうである。「格に入りて格を出でよ」これが芭蕉の俳諧修行の玉條であつた。芭蕉は「常套」を憎み、「概念」を嫌つた。第一に澁んで腐ることを惧れたのである。芭蕉の求めてゐたものは、流るゝ水のやうな、常に清く新しきものである。

しかし芭蕉は、新しきものを求めることにのみ汲々としてゐたのではない。その一方、千古を貫く正しきものをより以上愛した。「千歳不易、一時流行」といふ言葉は、芭蕉自らその態度を説いてゐるものである。この芭蕉の「不易、流行」といふ言葉は、今もつて種々の解釋が行はれて居り、

芭蕉直門の人々にあつてさへ各々の説をなして、去來はこれを

蕉門に千歳不易の句、一時流行の句といふあり、是を二つに分けて教へども、其元は一なり、不易をしらざるは基立がたく、流行をしらざれば風新にならず、不易は古に宜しく、後に叶ふ句なる故に千歳不易といふ。流行は一時々々の變にして、きのふの風は今日宜からず、今日の風は翌日に用ゐがたきゆゑ一時流行とは、はやることをいふなり。(去來抄)

と云ひ、土芳はまた

新み俳諧の花なり、古きは花なくて木立ものふりたる心地せらる、先師常に願ひにやせたまふも新みの匂ひなり、——せめて流行せざれば新みなく、新しみはつねにせむるが故に、一步自然に進む、地よりあらはるゝ也

名月にふもとの霧や田のくもり

は姿不易なり

名月や花かと見え綿畑

とあるは新しきなり。(三冊子)

と云つて居る。これによると「不易、流行」とは何か不易の句、流行の句とでもいふやうな句ぶりの相違があるかに見える。が、これは二人の言葉が足りないので、北技の

天地を右にし、萬物山川草木人倫の本情を忘れず、落花散葉の姿に遊ぶべし、その姿に遊ぶときは、道古今に通じ不易の理を失はずして流行の變にわたる（山中問答）

といふ言葉こそ、芭蕉の胸裡に参したものと云へやう。このやうに「不易、流行」とは、決して對蹠的な二つの存在ではなく、芭蕉俳諧を構成するところの二つの要素とも見るべきものなのである。即ち流行とは感覺のことで、物を見る感じの變化、それを云ふのであり、不易とはその裏にある意向、その動かざる心構えを云ふのである。つまり正しく物を掴め、しかし時と共に常に新しくあれと芭蕉は云つてゐるのである。これは實に創作態度の根本に云ひ及んだもので、こゝにこそ藝術の永遠性があるのである。

私はこの芭蕉の「不易、流行」といふ言葉を新しく云ひ換へて、「不易」を情緒的方面を云ふもの、「流行」を認識的方面を云ふものと見たい。——かうして私どもの川柳を眺め直す時、「不易、流行」の説はそのまゝ川柳の上にも考へることが出来るのである。認識は常に變化するものであるが、情緒は不變のものである。即ちそこに「不易、流行」への通ひがあるのである。これを具體的に例を

もつて示せば、早い話があの歌舞伎劇である。歌舞伎劇は既に亡びると云はれて居る。それにも關はず私どもは飽きた／＼といふその歌舞伎劇を事實に於いては捨て得ないのである。これは何が故かと云ふと、歌舞伎劇といふものは「認識」の世界よりも、「情緒」の世界を多分に持つてゐるものだからである。例へば歌舞伎十八番の「助六」或ひは黙阿彌の「十六夜清心」であるが、これを今日の私どもの眼から見れば、つまり「認識的方面」から見れば、助六は不良少年と地廻りとの喧嘩であり、十六夜にしても破戒坊主と安女郎との心中沙汰であつて、芝居としては極めてつまらぬものである。それなのに何故私どもがそれにつり込まれるかと云ふと、それはそこに豪快な啖呵だとか、或ひは淨瑠璃音楽といふやうな、氣持のいゝいろ／＼なものが添へられてある、即ち「情緒的」方面のものがそこに働くからである。もしそれらの芝居から、さういふ「情緒」の世界に訴へるものを取りのぞいたなら、誰もかういふものを喜んで見る人は無くなるに相違ない。そこに「認識」といふものゝ變化しつゝあるのを見ることが出来るのである。

「情緒」といふものはかういふ風に永久に不變のものである。詩歌はその「情緒」を詠ふべきものであつて、そこに詩歌百年の人の胸を打つ力があるのである。斯くしてこの二つの、即ち「不易」と見るべき「情緒」の、「流行」と見るべき「認識」の、二つのものゝ働きを、從來の川柳の中に見て

行くと、今までの川柳はあまりに「流行」にしげく、「不易」を忘れてゐたことに気がつくであらう。謂はゞその多くが川柳として片輪であつたことを知るのである。つまりは「柳多留」以來多くの川柳家は、たゞ目前の事象にのみ興じて、そこに自分の魂を盛ることを忘れてゐた。けれどもまたある意味から云つて従來の川柳は、それを一つの特徴としてゐたとも云へぬことはないのであるが、しかしこゝで考へて見なければならぬのは、さういふ川柳の多くが、だん／＼私どもに無用ものとなつて來ることである。たゞある時代の風俗を語る資料としてのみ残り、私どもの心の糧としては甚だ縁遠いものになりつゝある事實を、正視しなければならぬと思ふ。今まで川柳の特徴として考へてゐたものが、詩歌としての川柳を願ふ上に、大變間違つてゐたといふことに気がついて來るのである。かう考へる時、どうしても今後の川柳は、「情緒的方面」のものを、もつと盛に込んで、即ち「不易、流行」この二つを兼ね備へて、川柳としての本當の姿にならなければ、やがては川柳も、忘れられて仕舞ふのではないかと思はれて來もする。

私は「本格川柳」なるものゝ提唱に敢て反對するものではない。しかし、かういふやうに昨日の川柳觀とはまた異つて行く明日の川柳を前に、一時の安逸をむさばらんが爲めに、いまだ到らざるに自ら齒止めをかけて、徒らに「本格」の名に隠れ、小さく固つて仕舞はうとするその態度に、あきたらぬものを見るのである。前述の芭蕉の態度を思ふ時、私どもは自らに鞭打つべきものが數多くあるを知る。まだ目鼻もつかぬ柳壇にあつて「本格」など、納まるのは早すぎる。私どもはその前にもつと自ら疑はねばならない。疑つて求める、そこに進歩もあり發展もあるのである。小主觀的の「本格」に落ちつく前に、先づ川柳とは何か、そして又、何處に生くべきものか、川柳に對してさういふ再吟味を試みるのが急務だと考へる。かうしてシツカリ目標を定め、一歩進めばまた目標を進めて、格以上の格への道に、常に新しい氣持で精進すべきではなからうか。(昭和七年一月)

四、川柳は屁であるか

近頃はやりものゝ「先生」廉賣に就て、その卸問屋の一軒と目さるゝ川上三太郎氏は「對社會的に、川柳會では先生と呼ばれる人が選をすると言ふことを認めさせたいため」にそれを敢えてするのだと放言してゐるさうである。こゝにわざ／＼「ゐるさうである」と斷る以上、勿論私が直接氏の口から聞いた譯ではないので、きやり七月號に於ける塚越迷亭氏の「先生漫語」の中で、始めてその事を知つたのである。何も迷亭氏を疑ふ譯ではないが、私はそれを讀んだ時「まさか」と思つた。しかしつゞいて配本された國民川柳第二十五號を見ると、三太郎氏はその「蒼々亭から」の中

で「川柳を社會へ提げていくのは實にむづかしい。殊に東京に於ては尙且つ然りである。何故かと
言へばこれが大阪とか神戸とかいふ所だと文壇といふものがないから川柳を直接大阪市民へ、神戸
市民へ呼びかける事が出来る。ところが東京には全日本を背負つてゐる文壇といふものがある。従つ
て川柳はその文壇の中の一行動にすぎないのだ。だから川柳を先づ文壇的に存在させ、それから社
會へ打つて出なければならぬのだ。その代りその打つて出た日こそ川柳は日本的に認められ、そ
の作品は月評にもり、川柳作家は常に文壇を賑はす事になる。而して此の仕事は大阪や神戸に居
ては駄目だ。この意味に於いて本當に川柳を何うにかしようかと考へてゐる人は、先づ東京に出てさ
うして文壇と闘つて貰ひ度い。これは眞^ま自^じ面^めな實際的の問題だ」云々といふやうな事を云つてゐる。
かういふ三太郎氏の文壇への成心を考へると、曩の先生の一件も満更ではないのであらう。もし迷
亭氏の傳へる所にして事實だとすれば、三太郎氏ともあらうものが、よくもこんなタハケたことを
云つたものである。

三太郎氏の先生廉賣の引札は後廻しとして、先づ「蒼々亭から」の言葉に就いて見ると、氏は案
外に理想家であるらしい。理想家なればこそ、白晝かういふ夢が説けるのである。關西地方に於け
る川柳と社會との交渉を、文壇なるものゝ存在の有無にかけて云々してゐるところは、流星に見

識あり、確かに事實を穿つた言葉であるが、川柳を先づ文壇的に存在させ、などいふあたりから
少々言葉がよろけて来る。川柳の文壇乗取り案は、如何にも華々しい、勇氣に満ち／＼た論で、ま
ことにさうあり度いものであるが、さてその文壇なるものを乗取つてどうなるのか。かういふと却
つてこちらが何か文壇なるものへ心を持つてゐるかの如く疑はれるかも知れないが、文壇といふも
のはそれほど大したものなのであらうか。川柳はそのお恵みを受けねば、世の中へ一本立は出来ぬ
ほど片輪の文藝なのであらうか。先づそれもいゝとして、その作品が月評にもり、川柳作家は文
壇を賑はす事になるとは、何たる迷言であらう。後進へのお土砂には何よりのものかも知れないけ
れど、心ある人は、三太郎氏が正氣でそれを云つてゐるとは誰も思はぬに違ひない。よし川柳が文
壇を乗取るの日があるとしても、そんな事は行はれべくもない一片の空論だからである。

正岡子規は近世の大きな文人の一人であつた。しかしその正岡子規は在世時、文壇的にどういふ
待遇を受けて來たか。彼のもした處の俳句、短歌は、俳人歌人以外にどれほど文壇の問題となつた
であらう、況んや彼の俳論、歌論など、果して何人の文壇人の關心を呼んだかは疑はしい。近刊の
正宗白鳥氏の「文壇人物評論」の中の「正岡子規論」の一節に「私が感動したのは病苦の記録であ
る。その時々心持の記事である。今夜の地獄思ふだに苦し、とその苦惱に襲はれるのを豫期しながら

ら稍安らかな間に、只今の内にと、原稿を書いたり、畫を描いたりしてゐる所に、古今の不朽の人生苦を私はひし／＼と感じるのだが、子規の文學論、その他の意見については、殆んど感動した所がない」とあり、當時俳壇に名聲のあつたこの「子規といふ人に對すること路傍無縁の人に對すると同じだつた」と併せて氏は告白してゐるが、これが當時の文壇人の子規に對する偽らぬ態度であつたのであらう。明治俳壇歌壇の大先覺者子規の作品にして既に此の道りである。その月評など俳誌、短歌誌以外行はれたとは思はれない。しかもその爲に子規の文人的存在は、微塵もゆるぎはしなかつたのである。要は看板よりも本物か否かにある。

判るか判らない、認める認めないは別として、川柳家の思ふほど、さきやさほどにも思はぬのが世間である。さういふ世間を向ふに廻し、補一代の奇計を眞似た藁人形の「先生」を並らべ、サアどうだと大見得を切つたところで、誰がビツクリしやう。こんな道理の判らぬ三太郎氏でもないであらうに。

しかし、かういふ錯覺は何も三太郎氏一人に限つた事ではない。兎角自大主義の人のひつかゝり易い弊である。最近「川柳の社會浸潤」或ひは「社會進出」なる言葉がよく使はれる。こゝへも川柳、あそこへも川柳と愚にもつかぬ處へ川柳を持出して、いつぱし川柳の社會へのデビューの第一

線に働きつゝあるかの如く自信し、川柳家から御禮でもいはれ度いやうな顔つきをしてゐるのがよくある。それならそれで正しき川柳を世に示し得たかといふと、その當人が川柳とは何かといふ事さへ實はよく知らないなどゝ云ふにいたつては、笑止の沙汰よりも寧ろ情なくなるのである。彼等の多くは所謂「川柳の社會浸潤」なるうまい假面を冠つて、我が名を賣らんとする卑怯者に過ぎないので。川柳界は彼等の爲めにお爲を蒙るよりも、却つて害を受けてゐるのである。

自ら柳界の三勇士を以つて任ずるの諸君。諸君はその勇敢なる戦ひによつて、世間大衆の川柳に對する誤謬を正し得たか。かういふ設問の前に、自らかへりみて、然り我勝りと手を擧げ得る者が何人あらう。今もつて谷脇素文は川柳漫畫の大家として大手を振つて歩いてゐるではなぬか。私は先々月來ある新刊大衆雜誌の柳壇の選を依頼されてゐるが、この第一回の集句約八千、その中二百は新古川柳の剽竊、他に「屁」を詠んだもの約五、六百句を數へた。あゝ川柳は屁であるか、私はそれらの句稿を前にしばし呆然たらざるを得なかつた。笑ふにも笑へぬ、泣くにも泣けぬ無殘なる經驗である。世間をしてかく狎らしめた罪は、一體誰が負ふべきであらうか。川柳の社會浸潤とは何か、兎に角川柳とは可笑しなものだといふ事は、川柳漫畫其他のヒワイな川柳により世の中に宣傳普及し得たのであらう。川柳投句家のかういふ増加は、明らかにそれを證するのである。もし數

に於いてその功を云ふのならば川柳の社會浸潤は確かに成功したと云へるかも知れない。しかし果してこれでいゝのか。ある人はかう云つてゐる。それが正しいか正しくないかは別として、兎に角川柳といふものに關心を持つ人を一人でも多くつくればよい。もしその人が間違つてゐればあとはこちらで教育すると。偉なる哉その言、だが、さうは問屋で卸さないのである。一體誰を教育しやうといふのであるか、川柳組みし易しと見て入つて來た者に、七面倒な小理窟を云つた所で、へえさうですかと座り直す者はない。大變話が違ひますから、私はよしやせうと退却するのが落ちである。教育などゝは、砂利の中からダイヤモンドを得るよりも至難である。月並俳人はつひに運座發句より轉向し得ないではないか。

川柳をよくするのは數ではない。質の問題である。百人のワイ／＼連よりも、一人の眞の作家を求めの方が、川柳の向上、社會進出に益する事どんなに大きいか知れない。もし數を持つて功績とするならば、柳風狂句の元組四、五代川柳は初代川柳以上に今人に感謝されていゝ筈である。事實の如何は云ふまでもないであらう。川柳家は徒らに文壇の扉の固きを嘆く前に、自らの柳壇の門戸をもつと固くする事を考へねばならない。外へ開くよりも内へ閉める事、先づ以つて内部整理が急務である。川柳家は社會へ呼びかけ、文壇へ呼びかけて、何を示さうといふのか、見せるべき何を

今私達は持つてゐるのであらう。氣紛れなチンドン屋の散歩でしかない現在ではないか。

川柳家は議論よりも句である。議論は飽きた。句で行かうではないか。こんなきいた風な言葉が今柳界にしたり顔に唱へられてゐる。成程、川柳家は作句を持つて生命とし、その人の價値はまた句によつて定まるには違ひない。しかし、何が故によき句であり、正しき川柳とするか、未だ嘗て本質的な議論の行はれたことがあるか。議論とは根底をなすものである。その批判を忘れたものは自慰の作品でしかない。自慰の作品は正統の他にある。さういふものを振廻されて、これが本當の川柳でございは、ハタの迷惑である。批判なき柳界、今の流行語で云へば「理論闘争」無き柳界、そこに向上を考へる事は出來ない。社會進出の、浸潤のと叫びながらも、何等社會から酬はれることなき今の川柳が、このまゝイーディーゴイングを續けたところで、いつの日社會から認められやう。正しいもの、價値あるものであれば、自ら騒がなくなるとも、決して世間は見越しはせぬ。正岡子規を再びこゝに例するまでもないであらう。

文壇々々と、兎もすれば川柳家は、文壇への秋波を心がけてゐるが見苦しい。川柳をもつて、所謂「文壇」へ乗り出したものはまだ聞かないが、川柳家で文壇へ乗り出したものは二三にとゞまらぬやうである。さういふ人が、文壇に出てから川柳を紹介してゐるか、皆川柳など知りませんとい

ふやうな顔つきをしてゐるではないか。私共はこの事實をよく知らなければならぬ。それらの人々が現在の川柳を紹介すべく、今の川柳があまりに何も持つてゐないのに愛想をつかしてゐるのではないか。それともそれらの人々が柳人としてその過去に於いてその位の程度にしか居なかつたのか。いづれにしても川柳は、まだ大手を振つて社會へ立向ふ程に身の垢を落してはゐないのである。私は川柳家の文壇への成心を何も嗤ふものではない。たゞその自大主義を、その辯反對に自らを小さくしてゐる考へを嘆くのである。文壇へ文壇へと騒ぎ廻つても、認められたいのは、内心、川柳よりも寧ろ自分がではないのか、さもなければ今直ぐこゝで躍起となる必要もないやうに考へられる。私共が本物の川柳にさへ目醒める事が出来れば、文壇に對立して立派な柳壇をつくる事が出来る。況んや文壇への割り込みなど易々たるものである。しかし恐らくその時は、文壇への成心など問題とならなくなるであらう。

川柳家よ、太鼓をはづして、しばらく我家に歸らうではないか。(昭和七年六月)

五、滑稽味 其他

昨今また柳壇のあちこちに、川柳に滑稽味を要求する聲が聞えて來た。近頃のやうに、川柳とい

ふものが全く「味ひ」を失つて、カラ／＼なものになつて仕舞つては、かういふ要求の起つて來るのも當然であらう。——いや、要求したいのはたゞに滑稽味ばかりではない。味といふ名で呼び得るすべての詩趣、情味をである。今日の川柳に缺けてゐるものは、ひとりこの滑稽味ばかりではないのである。

が、然し、わたくしは決して現在のこの情味のない所謂「御尤川柳」に、悲觀してゐるものではない。川柳といふものゝ方向轉換の上から、つまり新川柳への發展の上から云つて、現在の川柳がかういふ味も素つ氣もない所に居て呉れるのを、わたくしは寧ろ(結構だとは云へないまでも)却つていゝ傾向だと思つてゐる。こゝらで滑稽味といふやうなものを早呑込みして、なまじいな概念をつくられるよりも、この不器用な素人らしいまゝで居て呉れる方が、その將來に、どんなに安心だか知れない。

たゞ怖ろしいのは、そこへ固まられて仕舞ふことである。——概念の殻の中へ閉ぢ籠もられて仕舞ふ事である。然し、現在の傾向を見ると、そこまでは先づ行かないらしい。いや行けないらしいのである。確信があつて現在のやうな状態をつゞけてゐるのではなく、大部分はそこ以外に出られないから仕方なしにその中を歩いてゐるとしか見られないからである。わたくしが安心だといふの

はこゝで、すべては時間の問題だと思つてゐる。

川柳家は、現在の味も素つ氣もない所謂「御尤川柳」をもつと續けて行くのがいゝのである。このまゝ傍から何も云はずに、もつと續けさせて行くのがいゝのだ。そして川柳をもつとつまらなく、もつとあがきの取れないものにまでして仕舞ふ方がいゝ。そこまで行かなくては本當に川柳はよくならない。川柳家もそこまで行けばしみく、自分のやつてゐる川柳のくだらなさに氣がついて、始めてどうにかしなくてはならないと考へるに違ひない。問題はこの時である。

今の川柳家が、不器用で素人らしい有難さは、この時になつて現はれるのである。川柳といふものに對して何等の概念もつくりせず、白紙であることの有難さには、この時、今の川柳家たちは、本當の川柳といふものに、——自分の爲の本當の川柳といふものに目覺める事が出来るであらう。わたくし達の新川柳運動は、こゝから、この自覺から起つて來なくてはウツである。

古き革袋に新しき酒を盛れ、とは、今までに随分多くの自ら川柳改革者を以つて任ずる人々によつて叫ばれて來た言葉であるが、このくらゐ世にも横着な言葉はない。大向受けはいかにもよさうな言葉であるが、言葉花咲くものは、心かならず實なしで、わたしから見れば無責任な一つの放言としか思はれない。のみならず、今の川柳家に向つて、かういふ言葉を叫ばれるくらゐ、危険で

迷曠なものはない。

滑稽味の要求も、これと同じことで、滑稽味とは如何なるものであるか、それを指示しての上の要求であれば兎も角、單に「滑稽味」とだけではこの上もない危険である。花傳書の言葉を藉りて云へば「まことの花に非ず」の、その時分の花にすぎない今の川柳家に、かういふ要求をするのは却つて川柳というものに對する悪い概念をつくらせるばかりで、少しも進歩にはならない。かういふ要求は、今の川柳家が、もつと人生の鹽氣を味つてからの事である。今はたゞ彼等がもつと素直に育つ事を願へばいゝのである。

わたし達始めまだ浮世の鹽氣を知らぬ今の若い川柳家によつてつくられたる句に「コク」がないのは當り前である。——あつたらそれこそ妙にひねくれた。いやなものに違ひない。今俄にそんな間違つたものに出られるよりも、少し氣を長くして、新しく生れるものを、——彼等の本當の自覺を待つ方が、どんなに川柳の爲にいゝか知れない。自分で始めてそこへ行ない限りは、本當にもいゝ姿といふものは判るものではない。(昭和三年三月)

六、無用の饒舌

ダイヤモンドが如何に貴重なものであつても、あれが無人島に轉がつてゐたのでは、たゞの石ころと同じく、何の値打ちも無い。そこに人間といふものを得て、はじめてダイヤモンドとしての價値が生れて來るのである。ものゝ價値とは、相對的なものであつて、絶對的には決して生じない。詩歌の道も、やはりこれと同じで、たゞ眼に映つたものをそのまま放り出して見せただけでは價値が無い。作者といふ人間がそれに値踏みをしてこそ、はじめてそこに價値を生じるのである。詩歌の價値とは、即ちその作者の値の踏み方を指すのである。對象そのものは、はじめから値打ちに變りはない。それを作者がどう評價したか、高かか安かか、その買ひ方によつて定まるのである。詩歌は、云ふでもなく人間の「なげかひ」の聲である。美しいとか、嬉しいとか、或ひはまた悲しいとか云ふ人間のもろ／＼のおどろきの心、そこから生れるのが詩歌である。對象に對する評價とは、作者のその「おどろき」の味ひ方を云ふのであつて、前にも云つたやうに、その味ひ方の深いか浅いかによつて、作品の價値は定まるのである。

この「おどろき」の無い——即ち、その對象に向つて何ら、作者の心の働いてゐないやうな作品は、詩歌の世界に於いては、無用のおしやべりにしか過ぎない。結局有つても無くつてもいゝものなのである。

わたしは最近、二三の句會の席上に於いて、其選評を命ぜられ一々の集句を味ふの機會を得て、今更ながら川柳家の多くが、いかにこの「無用の饒舌」に無駄な時間を過してゐるかといふ事を知り、全くびつくりさせられたのである。正直に云へば、こんな句にも作者が「ちやん」とあるのを不思議に思つたのである。

一體この作者達は、何を見、何を感じ、何を味ひ、いや何を詠はうとするのかを疑つた。わざわざ句につくる位であるから、眼の前のものに對して、せめて面白いとか面白くないとかぐらゐは感じてゐるであらうと思つたのに、何とこの句達の無表情なことよ。わたしはしばし茫然とせざるを得なかつたのである。

わたし達が、今もつて古川柳にある親しみを覺えるのは何故か、わたし達はそれらの句の中に、まさ／＼と江戸人の溜息を聞き、ほゝえみを見、哄笑を感じる事が出来るからである。句の向ふに作者が見えるからである。時代を超越してそれらの作者達と自由に語り得られるからではないか。藝術の有難さはこゝである。これが彼を永遠に生かすのである。

わたし達は何が爲に川柳をつくるのであらう。わたし達の川柳は決してヒトに注文されたのではない。ヒトの爲めにつくつてやる川柳ではない。自分の爲——自分が詠ひ度いから、何か詠はねば

居られないから詠ふのである。詠はねばゐられないといふ以上、そこに何かを——詠ふべき何かを感じてゐなければならぬ筈である。なのに、それを何も感じてゐないとしたら——。無感覺の詩人といふものゝ存在を許して置く程、川柳界は國土が廣いのであらうか。

二時 三時 何時か障子が白くなり
懷 爐 灰 捨 て れ ば 庭 の 雪 よ ご れ
押 し て や る 車 今 度 は 赤 く な り

これらの句が平然としてつくられ、選者もまたこれを平然として頂いてゐるのが現在の柳界である。或ひはわたしに句の鑑賞力が無いのかも知れない。然しながらこれらの句の何所に川柳としての價值があるのであらう。いづれも二に二足の四である。品川の先きは海である如く、全くその通りの句である。句にせずとも確にその通りなのであるから、大丈夫間違ひはない。然しこの場合一體作者といふものは何處に居るのであらう。これでは作者は單にある事實を十七字に纏めたといふだけの、機械的労働者としての存在にしか過ぎない。

句にせずともその通りのものなら何もわざわざ骨を折つて十七字に纏めずともよい。直接そのものを見てゐる方が、絶えず變化があつて餘程面白い。そんな無駄骨を折る暇があるなら、寝てゐる方がマシである。

句をつくる楽しみは、そのつくつた句の中に、自分の魂が——或ひは二度と味ひ得ないであらうある時の魂が、いつまでも生きてゐて呉れるからである。この有難味の判らない人には——所詮云ふだけ野暮であらう。(昭和三年四月)

七、選者を濫造せよ

最近また柳界に「句會淨化」の聲が聞えて來た。思へば久しい句會淨化の聲ではあるが、最近のそれは第一に選者濫造の弊を鳴らし、しかもこれを問題の中心としてゐるところに、從來の抽象論に比し一步進んで實際化したものがある。詮じ詰めれば從來のそれも、結局はこゝへ落つく事になるのではあるが、今までの聲には多少の遠慮が窺はれた。その氣兼ねから兎もすれば呼かける力も薄いモヤモヤ論になり勝であつたのを、兎に角今回は卒直にそれを指摘する事が出來た。川柳家も強くなつたものだと思はざるを得ない。

しかし考へれば、今まで句會を毒してゐたものは、全くこの川柳家の「氣兼ね」といふ弱氣であつ

た。——句會の選者といふものが、從來如何なる標準によつて定められてゐたのか、一般のその詳しい事は知らないが、多くの場合、やゝもすると句會當事者達の、所謂「花會氣分」によつてそれが行はれてゐた。と或ひは云ひ切れないまでも、それに近いものがあつたやうである。例へば、今夜の會には甲の會から誰それが來てゐる。乙の會から誰それが來てゐる。だから甲の會からは誰、乙の會からは誰にといふやう譯で、先づ人より團體といふものに對する關心によつて動き、その人の力量如何は第二にされてゐたとも見られるのである。従つて、ある一つの團體に籍を置いてゐれば、経験や見識の有無に拘らず、いつか一度選著になれるのである。いや、或ひはならねばならぬのである。勿論、例外はあるとしても、かうして今までの句會に於ける選者の選定は、謂はゞ「おつきあひ」の、他團體に對する儀禮の一つも事實含まれてゐたのである。即ち「花會氣分」と名づける所以で、投句者の迷惑思ふべしである。

が、迷惑はたゞに投句者のみではない。また選者も大いに有難迷惑である。——中には決して迷惑ではない。それがやり度いばかりに團體に加はり、又は團體をつくつたのだと、或ひはいふ者もあるに違ひないが、しかしいづれにせよ、當人の好むと好まざるに關せず、右様のイキサツをもつて、その人に選者なる重大責任を負はせながら、しかもその選者の選にあつてなした事に對して

句會當事者は、何等の責任をも負はうとはしない。甚だしくは、選を依頼しながら、その選者の不首尾を却つて手を叩いて嘲ひ、その人に輕蔑を贈るをもつて快としてゐるものもある。悲惨なる哉選者、選者とはつひに選ぶべき人ではなくして、試さるゝ人なのであつた。

句會當事者が、ある人に選者たることを乞ふ事は、その句會の責任の一半をその人に委ねるものである。従つてその選者の行つたことに對しては、またその一半を句會そのものが負はねばならぬ。選者の行つた事を他人事として冷々然たるを許されない筈である。この點に於いて、きやり吟社がその五月句會の席上、長野榮二氏の選者推舉に就いて、吟社の責任者村田周魚氏が先立つてその理由を述べ、立派に披露した態度は好ましい。周魚氏は單に選者榮二氏を紹介したのではない。氏の選に對し、句會がその責任の一半を負ふべき事を來會者に約束したのである。しかし、それは句會當事者として當然さうあるべき事なのである。がそれにも拘らず、今まで他の會でこれをなしたものがいくつある。省て自分等も忸怩たるものがないではない。

句會の責任を委ねべき選者は、句會當事者の信頼し、敬ふに足る人でなければならぬ筈である。その信じ敬ふべき筈の選者に對し、既に句會當事者にして前述の如く禮を缺くとしたら、何で來會者がその人を敬ひ得やう。句會が眞面目を缺き、混亂に陥るのは云ふまでもない。今までこの種の

句會の空氣の惡化を、たゞ來會者の態度のいたらざるものとのみ考へたのは大きな誤ちである。つまり選者に力が無かつたのである。更に云へばさういふ選者を文臺に送つた句會當事者の罪でもある。當事者の不眞面目が、席上に反映したと見るべきである。徒らに來會者の態度を云ふ前に、先づ句會當事者より反省すべきであらう。

しかし、翻つて考へると、今日の句會低落——墮落とは云はない——の原因は、投句者にも又一半の責任はある。今日の句會の様を見ると、投句者はさながら命ぜられたる者の如く、選者の如何に拘らず、宿題何題、席題何題、その悉くに句を投じなければ止まない。披講に際し、嘲笑を贈り或ひはあらはにはなくも俺の句が判るものかの嘲罵を私かに試みる選者の選句に對してまで、惜し氣も無く句を投じてゐるのである。假りに我が勞作——魂をこめた創作の批判を乞はうとするからには、その選者を絶對信頼してゐるものと見なければならぬ。勘くとも、その人を我よりも經驗、見識あるものと見て、その裁斷を待つのである。我が句が惜しければ惜しい程、その人を選び、その人を尊敬しなければならぬ。若しその人の選にして我が腑に落ぬ時は、堂々と所信を述べてその不可なる點を教へを乞ひ、萬一選者に不明のものがあれば、その蒙をひらいて共に知らざるをたづね携へて道をすゝむべきであらう。かつての句會に於いて、この種の不審を選者にいたし

たものが幾人あつたか。あいつは判らぬと、ひそかにその人を嘲罵して快とするのみで、兎に角表面は如何なる判を受けやうと、唯々諾々としてゐるのである。

この卑屈な遠慮がまた、如何に句會を、といふよりもこゝでは、選者を毒してゐるか知れないのである。全く現在に於ける選者は批判なき國に住む幸福なる人達である。如何なる選を試みやうとも、選者の判には唯々諾々として服すると見る選者達は、始めは自らの力量、眼識を疑ひながらも、度重なれば、選とは甘いものだと思つて錯覺する。この錯覺はやがて我が力を過信する。こゝに一人の公認された天狗が生れるのである。これより危険なものが他にあらうか。

あいつは判らない、は私語すべきものではない。堂々と論すべきである。堂々と論じ得ないのならば口にせず、その選者の判に服すべきである。假にも我が勞作を、判らない奴に見せてどうする氣なのか、判らない奴に判らない儘捨てられて、何も云ふ事か出來ず引さがるとしたら、何の爲に句會へ出て川柳をつくつてゐるのかと聞き度くなる。かういふ人は自分の句を惜しいと思はないのであらうか。句が惜しいと思つたら、さういふ判らない選者は潔きよく忌避すべきである。そんな人に見て貰つて何のたしになる。骨折損の草臥れ儲けとはこの事である。

その骨折損を承知で、さういふ選者にまで句を投ずるいふのは、いゝ句をつくる、そしていゝ句

を見つけて貰ふと云ふ心の歡び以外に、何か他に目的があるからに違ひない。賞品とは云はない。従来の句會に於ける「點取り」なる制度が兎もすればこの自製の垣を破壊するのである。句數制限問題なるのもまたこゝから生じて来る。如何に句は選者の判を乞ふものだからと云つても、句を惜しむものにとつては、自ら見て先づ不可とする句は投ぜられぬ筈である。句數制限の掟ある無しに拘らず、投句は選者の手へ渡す前に當然我が手で整理されなければならぬ。いや、されるのが本當である。かうする時、句數制限問題などは問題となるべきものではない。それが重大な問題として論議されるのは、萬一を頼む心があるからである。いやな選者だが、若し抜いて呉れれば一點殖える。さういふさもしい根性からである。こゝに於いて排斥すべき選者に却つて縋りつくといふ極めて不思議な、皮肉な現象を起すのである。(この句會の點取りといふ事も、當然句會淨化の前に問題となるべきものであるが、今は選者問題を中心としてゐるので、わざとこれ以上觸れない)これでは選者濫造の弊も大きな聲では叫べないではないか。

かうして、現在の句會は、句會當事者も、投句者も、あまりに選者を利用しすぎてゐる。利用で可笑しければ功利的に扱ひすぎてゐる。選者を道具視する前に、先づ選者を尊敬する事を考へなければならぬ。もしそこに尊敬し得ぬ選者が出現したら、我々はこれを潔きよく忌避すればよい。判

らぬ奴に句を見せるのは勿體ない。さういふ觀念を作り度い。句を大事にする。句を惜しむ。更に云へば、自分自身の魂をいとほしむ心、それを深めなければならぬ。如何に句會當事者が選者を押しつけたからと云つて、句會自身が責任を持ってぬやうなそれらの選者を、——兎んや自ら名乗り出た似而非選者など、句を投ずる必要はない。一樣にポイコツトすべきである。かくて事實に於いてその選者をあつて甲斐なき選者とする時、選者自身も、句會當事者も始めて自己の否なることを知るであらう。投句者にこの心構えさへあれば、選者濫造何するものぞ、恐るゝに足りないのである。句會は自然明るく、信と愛と敬とに滿ちて、芽出度く淨化されるに違ひない。

しからば、今後選者といふものを何所に求むべきか、現在の川柳家の中から何人か、その階級のものを選ぶ、さういふ選者公選論。或ひはある人々をもつて選者級と見なし、其後に来るものはそれらの人々の眼鏡を通して選者の列に加へるやうにしてはといふ選者審査論も、昨今一部から聞こえぬではない。が、その心配は無用である。前述のやうに投句者の我が句を惜しむ心が、もつと深まり行けば、かれこれあつて、やがては、極めて自然に選者なるものゝ淘汰が行はれ、信頼し得る、尊敬し得る人のみが選者として殘されて来る。これは意識的なものであるだけ、その選者に重みを加へる事必然である。その時、ひとり句會のみではない。柳界の淨化もまたなるのである。が

所詮その日の待望は、各自が先づ我句を愛する事、——そこから出發するのであらう。

（昭和七年六月）

八、天地人制に就て

川柳雜誌九月號の「編輯の窓」といふ欄に、次の様な記事があるのを見た。

「本社八月句會（中略）當夜の句會プリントでは天地人制廢止の不可なる實例として、主幹や雀郎氏などの選句を示し、益々のその感を深からしめた」云々。

右の句會プリントには如何なる説が試みられてゐたか、また私の選句の如何なる點がそれに引例されてゐたか、これだけの文章ではそれを知るよすがもないが、私もまた天地人制廢止の是非に就いては多少の感想を持つてゐるので、それはそれとして、こゝで引合ひに出されたのを幸ひに、川柳雜誌社の主張とは別に、私一個の考へをいさゝか述べて見たい。

番傘六月號によると、この天地人廢止の事は、既に大正十三年六月、小田夢路氏により、早くも「はこやなぎ」誌上於いて問題にされたものだとあるが、今柳界の關心を集めてゐるのは勿論それとは別で、これは同じく番傘の五月號に於ける岸本水府氏の「天地人の呼び方を改めたい」といふ

一文にその端を發するものである事いふまでもない。

しかし私は、かういふ提唱はその幾つもの理由を知る方が便利だと思ふので、さういふ兩氏の説の間の時間的な距りを取り拂つて、これを一つのつらなりあるものと見て、それから検討して行き度いと思ふ。

が、さうは云つても、兩氏の説は必らずしも一致するものではない。小田夢路氏の理由とする處は、天位の句と云ふのは普通集句中の天位であつて、五人の集りのものと百人の集りのものとはそこに甚しい相違を見る。即ち天位かならずしも佳句にあらずと云へるし、更に地、人、五客とさう都合よく句が揃ふものではない。だから天地人制を廢して、これを十點とか九點、或ひは八點、七點といふ採點法に改め、しかもその點數には一定の標準を置いて、もし集句の出來榮えにしてそれに及ばぬ時は、十點、九點の句を缺いてもいゝし、八點或ひは七點といふやうな句を何句でもつくつたらよいではないかといふのである。

一方岸本水府氏の説は、天、地、人、五客といふやうな抜き方は、月並俳句連が定めた明治頃の習慣であつて、即ち發句や川柳がまだ有閑階級の手すさびにされてゐた頃の制度である。かういふ月並俳句の制度を何故眞似なければならぬのか、しかもこれある爲め、感じの上に句の新味を損

ねてゐる事いくばくか、川柳が文壇的に打つて出られた今日、尙こんな呼方をつゞけてゐる事は氣恥しい。自分は採點に階級を設ける事には反對しないが、この呼び方だけは何とか改められぬものか、といふのであつて、その結果に於いては同一であつても、要するに夢路氏のは「採點法に無理がある」といふのであり、水府氏のは「よび方が古いから」といふのである。

兩氏のお説いづれも御尤な次第で、私もこれに對し別に反對の意見を有してはゐない。が、少々腑に落ちかねる處があるので、失禮ながら一應借問したい。その第一は小田夢路氏の採點制に就いてある。氏は採點に當り、五點、十點といふものに如何なる標準を設けて、句に臨まうとされてゐるのか、何がその目安になるのであるか、自分の經驗から云つてはなはだこれは難かしい事である。

數學とかその他の學術に見るやうな智的なものと違つて、詩歌は情の世界のものである。魂をもつて魂を判するのである。その觸れ合ふ度合ひによつて、價値に差違を生じるのである。選者たるものゝ見識、經驗はもとよりであるが、又環境、健康の状態などもその日の選に大いに影響する。さういふ選者の心理状態によつて、同一の人の選、必ずしも同一ではあり得ない。従つて昨日選したものを今日見てその等級に疑ひを生じたとして、その選者を誰が「たよりなき者」と咎め得やう。「A

選者は天に抜き、B選者は没にした」としても、かういふ選者の心境の相違から見て決して可笑しくはない。其角が「聞くはむづかし」と云つたのはこゝのところである。

小田夢路氏は、選者のさういふ心理的な方面の現象を無視しやうといふのであらうか。それとも自分は十點の句は十點の句と必ず見極め得る確信があると氏が自信を持つて居らるゝならば、又何をか云はんやであるが、「天、地、人、五客と、さう都合よく句の揃ふものではない」と云はれてゐるのは名詮自性、選句に不安を感じられてゐる證據である。天地人に於いてさへ不安があるなら、十點、九點、八點の確たるはじめをつけなければならぬ採點法に、それ以上の不安が伴はぬとは云ひ得ない。さういふ不安に對し、從來の天地人なる漠然とした稱呼の方がまだしも却つて好都合ではないか。

尙、氏は「天位の句と云ふものは普通集句中の天位であつて、五人の集りのものと、百人の集りのものとは餘りに差を見るであらう」と云はれてゐるが、私はこれはこれでいゝのだと思ふ。三才制度に於ける天位とは、その日の集句の中の最高點のものに冠すべき假の名であつて、何も他の選と比較する必要はないのである。オリンピックに於ける或種の競技の最高點者の得點が、既に過去に於てその競技が持つ最高點の得點(記録)よりも遙かに遠いものであつたとしても、御承知の通り一

等は何所までも一等である。如何なる場合でも順位の無い事はない。最高標準といふものは、その日の出来栄えとは別の問題である。

△よく句會などで「本日は天に推すべき句がありませんでしたから、地の句を何句、人の句を何句頂きました」など、得々としてやつてゐる人があるが、私は苦々しく考へる。その地の句何句かの中に他の句より少しでも優れたと思ふ句が無かつたか、あつたらそれを天の句に推してはどうなのか、さうする事が選者の估券にかゝはるとでも思つてゐるのなら嗤ふべしである。殊にこれが三才制を廢して、採點制に代つたとしたら、どんなものであらう。文臺から「本日は七點の句より以上のもはありませんでした」など、やられたら、大概の氣の弱い者はその席に居堪れたものではない。句會は不愉快極まるものになるに違ひない。それよりも普通に抜いて置いて、本日は一般に餘り出来はよくなかつたと斷る方がまだしも好もしいやり方である。

岸本水府氏は、天地人の三才を句位の等級の稱呼に用ゐたのは明治代月並俳句の連中に始まると云はれてゐる。私は見聞狭くその事を知らないが、或ひはさうであらう。成程古い俳書にも柳書にもさういふ抜き方は見當らない。川柳宗家の柳風一派の狂句では、今もつて高番、中番（或ひは平番）末番、即ち大尾といふ抜き方で、別に天地人の等級なく、佳作は感吟の名でこれらの中に特記

してある。かういふ抜き方の行はれ出したのは何時か、「柳多留」第九編卷頭所載の「不忍率納句合」には既にこの俳が見えるのを見ると可なり古いものゝやうである。しかしこの方式は俳諧の方には無かつたらしい。俳諧では「武玉川」や「俳諧鑑」に見るやうに點しきの印章によつて句の等級を表はしてゐたやうで、其角に關する話の中にもこの點しきの讓渡が云々されてゐるのがあるが、これはひとり江戸座の宗匠に限つた事ではなく、その頃は一般にさういふ選の仕方をしてゐたのであらう。が、よし天地人制が月並俳句連に始まるとしても、それが普遍化されて現在ではあらゆる場合の等級稱呼の概念となつてゐる以上、川柳家もまたこれを使用するのは極めて自然であり、岸本水府氏は「川柳が月並俳句の制度を何故眞似なければならぬか」と云はれてゐるが、逆に何故川柳のみがこれを用ゐてはいけないのかも云へるのである。

しかも岸本水府氏がこれを嫌ふ理由は、それあるが爲めに句の新味を損じ、一方、他文藝に對してありやうは恥かしいといふのである。又しても對文壇意識が出て來たが、これだけの理由ならば天地人を廢して何か新しい如何にも近代的なBACを使ふとか、尙、月並俳句連の制度を模倣するのを潔しとせぬといふのなら、川柳本來の勝番制度にかへつて、高番、大尾とならべる感吟高點法を試みるのもいゝであらうし、更に文壇への思惑があるのなら、一等、二等、三等と無事な等級法

に據るのが一番である。採點に階級を設ける事には反対しないといふのであれば、その等級の稱呼の變更など何でもない。今更ら珍らしげに云はなくとも、既にいづれも自由にこれを行つてゐる。かう云つて仕舞つては、或ひは實も蓋もないかも知れない。しかし岸本水府氏は、これを全國的に統一しやうとするから重大に考へられるのである。全柳壇の採點法を統一するといふ事は、成程大變な事には違ひない、が、統一してさてどうなるのであらう。

阪井久良伎氏は、早速く氏の説に賛意を表して來たさうである。しかし阪井久良伎氏の持論とする天地人制度廢止説は、岸本水府氏の考へとは姿に於いては似てゐても、その内容は相去る事甚だ遠いのである。即ち阪井久良伎氏は、江戸時代の川柳の選には、天地人など、いふ等級の區別は無かつたから、先祖の方法に従つて自分もこれを行はぬといふのである。が、これとても點しきや感吟高監の過去の制度に見て俄に同感し得ないけれど、前二者の主張に較られば、寧ろこの方が態度がハツキリしてゐていゝ。何故なら岸本水府氏の稱呼變更に對して、阪井久良伎氏は全くの等級廢止論だからである。

私は前に天地人といふ抜き方のよさを云つた（この制度が投句者の心理——單數及び複數に於いて——にどう働きかけるか、その効果に就いては私が改めて説明するまでもなく、夢路、水府兩氏

の説の中に、自づとそれは反映してゐる）しかし私は何所までもそれを固執するものではない。現に氣紛れに稱呼を變へてゐる事もあるし、今後私を納得させる名説が現れれば、いさぎよく等級廢止も斷行する考へである。が、現在行はれつゝあるやうな薄弱な理由によつては、いづれを行ふも結局同じであるし、私は天地人制ある爲めに川柳が向上を阻止されてゐるとも、新味を缺くとも、又それを改めたとして立派になるとも思つてはゐないので、同じものなら口馴れた、天地人制を喜んで當分つゞけて行きたい。

しかし、考へてみれば、こんな事をあげつらうのは、川柳本質の進展には何のか、はりあひもない枝葉の問題である。私達にはもつとミツチリ眞剣に考へなければならぬ問題が、他に澤山殘されてゐるのではなからうか。（昭和七年十月）

九、列車衝突と句數制限

八月廿一日午前それがしの刻、日暮里驛に於いて、旅客列車衝突の大椿事が突發した。

「あすこは、東北本線と常磐線とが落ち合ふ所なので、どうもあすこの所へかゝつて來ると、機關手に識らずく、競争心が起つて來るらしいのですね、けふのは少しぶつかり方が變ですが、さう云

ふふだんが多少原因してゐるやうです」

あの朝、私は、社の編輯室に於て、机を隣りにする社會部長に、そんな風に説明してゐる外交記者某君の、事のいきさつに關する報告の言葉を傍らにあつて聞きながら、不幸な結果を切り離して事件そのものゝ原因だけを考へると、これは近頃餘程面白い出來事だと、その心理的なのに興味を覺えて行つた。そして遠い昔、私自身旅に於いて經驗した、これに似たある小ひさな出來事をいつか私は思ひ出してゐた。

その頃私は、下町の一部の青年達が、必らず一度はそこを通るやうに、納札趣味といふやうなものに凝つて、やはり同じく繼竿をかつぎ廻つてゐた。相棒は味噌屋の長やんといふ、私より一つ年上の、若い癖にもう戸主名で納つてゐる小學校からの友達で、二人はよく集つてはいろ／＼な趣向を考へ、時には連名の札などをつくり、揃つて神主におどかさされて歩いたものである。

その中どちらが云ひ出すともなく、お互に四丁掛けの大札をこしらへた。この大札を持つと、もうどうにもじつとしてはゐられなくなつた。それ以來二人は、よく一日の暇を偷んでは汽車に乗つた。そしてある日、たうとう二人は鹽原に來て仕舞つた。

まだ輕便がやつと關谷の上まで敷けたばかりで、そこから鹽原まで歩かねばならなかつたが、札

箱を肩にかけた二人には却つてその方が面白かつた。眼に入つたが最後、路傍の道祖神へまでも私達の刷毛は伸びた。

二人は遠くに來てゐる事も忘れてすつかり遊びに耽けつて仕舞つた。そして漸く鯛の聲に「歸へる」と云ふ事を思ひ出した時には、もう三時を廻つて、輕便の終列車の出るまでには後二十分より残つてゐなかつた。二人は驚いて竿を疊むと急いで俵を呼んだ。が、駈けつけた時には既に残る煙が癪の種となつてゐた。

「だから急ぐのに……」最初に泣き言の口を切つたのは私だつた。この列車に乗り遅れると、もう上野行きとの連絡は明朝まで無いのである。

「いゝさ、引返して泊らう」長やんは慌てなかつた。然し戸主の長やんと違ふ部屋住みの私は、ここでふんぎりがつかなかつた。無斷で汽車に乗るといふ事さへ許されてゐなかつたその頃の私には歸つてからの叱言は覺悟するとしても、とても無斷で外泊するなど云ふ、大それた勇氣は出せなかつた。

「電報を打てば」

然し私は、どこまでも歸る事を主張した。長やんは私の駄々ツ子を承知してゐるので、とてもと

どまらないと考へたか、兎に角私と行を共にする事にして、馬車を捜して來た。やがて私達は馬車の人となつた。

「あと五十分きりないが、汽車に間に合ふかしら」不安に、もう口を開く元氣もなく、隅の方に腕を組んでゐる私の方を振りかへりながら、長やんも心配さうに、馭者臺へ顔をつき出した。

「大丈夫、間に合はせます」

馭者の自信あり氣な口を聞くと、長やんは腹掛の井から随分長い財布を出して、「頼む」といくらか馭者につかませた。私もヒョイと股を割つた。

馬車は關谷の坂を降りて、あの一直線の三島道路へ出ると、盛んに土けむりを立て始めた。私は時計を出して見て、眼をつぶつた。

「頼む」また長やんが、いくらつかませたやうだつた、

はるか後ろに自動車の警笛が聞こえて來ると、馬車は俄に大きく動き出した。たゞならぬ動搖に眼をひらくと、私の前には盛んに馬に鞭をくれてゐる馭者の姿があつた。馬は飛び上るやうに駈けてゐる。そしてそれらの、馬車全體の上につけてゐる動作の總ては、自動車の音がだん／＼後ろに迫つて來るにつれ、いよ／＼迅速に繰返されて來た。長やんも足を張つた。私も足を張つた。私

の心にはいつか汽車の時間に間に合ふ合はないといふやうな不安は跡かたもなく消えて、新らしくある快感と焦燥とが入つてゐた。私は思はず手を握りしめた。

自動車の警笛は、馬車の後ろ間近かに大きく起つた。馭者の頸には玉のやうな汗が湧いた。長やんはたうとう馭者臺へ半身を乗り出して仕舞つた。その瞬間である。スツと自動車は馬車の横腹をかすめて、馬の鼻面へ煙を浴びせて去つた。

とたん、前方數町先に當つて素的な、物の破裂する音がした。と同時に、今駈けぬけた自動車のタイヤの一つが、ポーンと横に數間飛んで、誇りげに疾走してゐたその車體が、ガツクリ斜にかしぐと、そのまゝピタリと進行が止つて仕舞つた。

「バンザイ」馭者は馭者臺に立上つて、鞭で屋根を叩きながら雀躍した。長やんも叫んだ。私も叫んだ。私達はその自動車を追ひ越す時、お互に眼に一杯涙をためながら、今一度ある限りの聲で萬歳を繰返した。馭者は大きく馬の尻に鞭をあてた。

私達が汽車の窓から西那須野の往來を振かへつた時、その自動車は、いま一臺の自動車に綱で曳かれながら、ヨボ／＼と驛前の宿にたどりついて來た。

話はこれだけである。が然し、この時の子供らしい感激は、孟夏、旅を憶ふ時、いつも痛快な出

來事として私の胸に蘇つて來る。その日もそれを思ひ出したのであつた。

日暮里の列車衝突の原因は、當局者の説明によると、成田線の機關手が、競争意識にのみ自己をうちまかせて竟に信號をも無視した結果ださうである。もしそれが事實としたら、その時信號を無視しやうとしたものは、獨りこの機關手のみではなかつたであらう。かう云ふ場合、おそらくはその列車の乗客全部がさういふ心を、いや單に信號をばかりではない。線路も、さうして齒車をも、あらゆる調節機關の無視を機關手に望んではゐなかつたか。この心は、途上圓太郎の上に於いて、また京濱線の車中に於いて、しばしば私達の經驗するところである。

競争心理と云ふものは、必らずしも計畫的なものではない。二つのものが同一のある目的への進行の途上におかれた時、その偶然から容易に起り得るものである。私はその夜、再びこの事件を考へながら、ゆくりなくも、昨今柳界の一部に云々されてゐる句數制限反對の事を、思ひ浮かべてハツとした。そして、句數制限反對の叫びが、信號を無視せんとする機關手の、それになければ幸ひだと思つた。(大正十四年九月)

十、江戸及び江戸ツ子

聞くは難し、と昔の人も云つてゐるが、全くさうである。「米見新聞」第九十六號、第九十七號の兩號にわたり、阪井久良伎氏はその「繼古庵柳語」の中で、静岡に於ける第三回全國川柳家交際會の席上、私の試みた講演の一部を取り上げて大分問題にされてゐるが、これなども今云つた聞きそこなひの一つであらう。しかも氏の私への抗議は誠に見當違ひも甚しく、私にとつては意外といふよりも寧ろ迷惑なものが多いので、私はこゝに當日の講演中、氏の問題とされてゐる箇所を再説して、氏が「繼古庵柳語」に私の言葉として引かれた言詞の、私に責任なきものである事を明らかにしもつて一般の誤解を防ぎ度いと思ふ。

私の静岡に於ける講演の内容が何所から氏の耳へ入つたのか、その詮議はしばらく措き、たゞ困つたのは、それが事實から遠く、多分に歪め、誤まれて傳へられたことである。でなければ久良伎氏とも云はれる先生が、知る人ぞ知る私の講演内容に對し、あんなお門違ひの抗議を持ち込まれる筈がないからである。

同紙第九十七號に於いて、氏は「十八大通すら僅かに黒羽二重を着てよがつてゐたに過ぎない、野暮な話だ」といふ意味の事を私が述べたと云つて、これを私の一知半解の見解だと指摘されてゐるが、私は決してさうは云はなかつた。氏の言葉に従ふと、私のそれには嘲笑の意が含まれて

もゐるかのやうに聞こえるが、これは飛んだ履き違ひである。

私が述べたのは、江戸とし云へば、イキ（意氣にあらず粹なり）とかイナセとか、さういふ傳法に近いものを考へたがるが、それが江戸人の全部ではない。さういふのは寧ろ江戸も末期のそれもあまり上等でない階級の思想、風俗であつて、川柳發生當時の、即ち寶暦期の江戸人の思想、風俗は、かの十八大通と云はれた人を見ても窺はれるやうに、黒羽二重をもつて象徴し得る人柄、その「折目正しい」といふ事をもつて生活理想としてゐたのである。この思想（これの洗練されたものが所謂滋味である）は、長く江戸の町人を支配して來たもので、今日、大阪の船場あたりの人々の中にも残つてゐる。「お隣りへも氣兼ねする」と云つた生活態度が、恰度それであつて、芝居の世話物の中に見る職人や遊び人のやうなのを江戸ツ子風態の代表だと考へるとんでもない事になる。その頃の江戸人といふものは、さういふ風に今の眼から見ると、寧ろ野暮とも見えるまでに手堅いものであつた。（私は當日この事の例證として、初期黄表紙の中に見る思想、或ひは助六劇の變遷等當時の文學及び劇に就いても多少説明するところがあつたが、こゝには省く事とする）従つてかういふ時代及び人を背景として生れた川柳は、我々の概念にある江戸ツ子のやうな、決してイキなものでも、イナセなものでもなく、この本當の江戸人のやうに野暮に近い生眞面目なものなのである。

しかしこの野暮とも見える飾り氣のないところに、川柳の平民詩とし、風俗詩としての尊さがあるので、川柳に變通は禁物である、と述べたまゝである。ありやうは川柳家が川柳に對し、一つのけじめを持つ事の危険を警告したのであつて、新しき川柳家は寧ろ野暮たれ、と忠告したのである。この言、或ひは一知半解の見解であるかも知れない。が、氏が折角私に誨へながら「後世の眼を以て百年二百年の文化を見ればいづれが野暮臭からざらんやである」など、云つてゐるのは、語るに落つて、却つて氏の江戸ツ子を疑はしむるものである。

尙、同紙第九十六號には、同じ静岡に於ける講演中、私が「川柳は江戸のものではない、日本のものだ」と云つたとして、私が地方人であるが故に、そのヒガミをもつて「江戸」なる言葉に反感を持つのだと、極めて狭い解釋のもとに私の肚裏を付度され、私へ非難を加へられてゐるが、埒もない。私は決して一田舎者のヒガミをもつて説をなすものではない。

これは前の講演に引つゞき、かるが故に我々は正しい川柳をする爲めには川柳に對して抱いてゐる一つのけじめを捨てなければならぬ。それには先づ川柳は江戸のものであるといふやうな觀念、さういふ誤り易い概念に立つ事を避け、何所までも魂に色氣をつけず川柳すべきである、と述べたそれを指すのであらう。

これによつて知らるゝ如く、私は何所にも「江戸」に對する反感を述べてはゐない。のみならず却つて私は江戸人の律氣に對し、その床しさに憧憬の念をさへ持つてゐるのである。にもかゝはらず、今日川柳の上に私が「江戸」なるものを排すのは、川柳家が鬼もすれば形の江戸にとらはれやうとするからである。川柳する上に於てこれより危険なものがあらうか。

形の江戸は既に過去のものである。我々にとつてそれは概念でしかない。いかに川柳は江戸に發生し、發達したものだからと云つて、江戸とは總てに事情を異にする今日の東京に生活する者が、今更ら江戸がつた處で仕方がないし、本當に生きる者には、おかしくつて時代錯誤な江戸顔は出来るものではない。よしまた勇を鼓して江戸がつたところで、結局それは聲色か借物かに過ぎないであらう。江戸に往めば江戸らしく、東京に住めば東京らしく、要は時と共にその生活に従つて、偽らず我が感懐を川柳する。そこに眞の川柳があるのである。かく時代の人心を背景とすればこそ、川柳の平民詩、風俗詩としての價値があるので、又それあるが故に川柳萬歳の命があるのである。だから私は、古句鑑賞の場合は別として、新しく川柳をつくるには江戸を忘れ、それよりも素の氣持、夾雜物のない人間（日本人）に還つて川柳すべきであると云つたのである。

この素直な氣持こそ、柳多留初期の川柳に見る背景思想ではないか。私が静岡に於て寶曆期の江

戸人の生活及び思想を述べたのも、こゝを闡明しやうと思つたからで、私は江戸及び江戸人に對し、何等の惡罵をも放つてゐない。（若し氏が、氏が私の言葉として引いた「川柳は江戸のものではない日本のものだ」といふ、この自製の言葉だけをとつこに問題とされてゐるならば、これは見解の相違でどうもいたし方がない。時代を無視した江戸一貫主義と國民性を主とした私の無色主義とは、いつまで経つても一致する筈はないし、私はこゝの考へ方の相違から氏と理論的に川柳上の袂別をなしたのでから）

が、私が江戸及び江戸人をかく見る事は、田舎者のヒガミ故であらうか。聞くは難かしいといふが、全く聞くといふ事は、語る以上に至難なものである。私は、久良伎氏を取り上げた私の誤りなるものが、もし直接私の筆によつて何かに發表されたものゝ中から發見されたのであるとしたら、その抗議も甘受しやう、誨へにも傾聴しやうが、又聴きの、それも我々の川柳的立場を本當に理解してゐるとは思はれない人の誤れる（故意ではなからうが）報告をそのまま信じられて、何等たゞすこともなく、鵜呑みに、私へ抗議されて來たのでは迷惑の上もない。氏としても輕卒のそしりを免れ得ぬであらう。後輩に對する忠告的かたちをとられたのは有難いが、思ある先生の態度としてたゞこの點を惜しみ悲しむものである。（昭和八年六月）

十一、飴ン坊氏の死、其他

最近の川柳界に於ける大きな出来事は、何と云つても近藤飴ン坊氏の死であつたらう。私は心から氏の死を惜しむものである。が、これは何も私はと特に断る必要はないやうである。全柳壇人こそつて同じ心であるに違ひない。私は氏の葬送の日のあの美しい風景を思ひ出すし、近刊の柳誌が競つて氏への追慕の記事を掲げてゐるのも知つてゐる、氏の死に對して柳壇の人々の拂つた敬意はいつまでも記憶されていゝものだと思ふ。

私は諸氏の故人追慕の記事を、一々なつかしいものに讀んだ。讀んで我が知らざる故人の一面を補ひ得て、私は故人に對する親愛と尊敬との念を新しく一層深めたが、同時にさういふ心の何處かに、何か危険なものゝあるのを感じた事も告白しない譯にはいかない。

故人は交友のひろかつた人だけに、故人を語る人もまた多かつた。が、その悉くがと云つてもいゝくらゐ、いづれも語るところは、故人の私人的逸話か、川柳家としても極めて外側の一部であつて、川柳家飴ン坊としての故人の川柳に對する働き（思想及びその業績）にまで言を及ぼした人は無かつたやうである。故人の美しき點、高き點をあげてその人となりや賞揚する事は、死者への禮

としてさうあり度い事である。しかしながら私人としての飴ン坊氏に對する評價を、そのまゝ飴ン坊氏の藝術に對して置きかへる事は間違ひである。私はいくつかの故人追慕の文の中に、さういふケジメのぐらつてゐるものを讀み、今云ふ危険を感じたのである。

飴ン坊氏が一個の市井の風流漢であつたのならば、その私人的行動に對する評價は、直ちにまた全人格的なものゝ反映と見ることが出来るかも知れないが、飴ン坊氏は、兎に角、「川柳史」の何頁かに永遠に書き残されなければならない人である。本當の値打ちでそこに書き留められなければならない人なのである。さういふ記録に於ける私人的行動は、外傳であつて、正史ではない。親愛なる飴ン坊氏を傳へることもいゝが、私共は氏の死に對する感傷から醒める時、次の仕事として、この正史を残す事を忘れてはいけない。一切の主觀的な見方を捨て、客觀的に、冷やかに氏の藝術を眺め直し、嚴肅に川柳家飴ン坊を再検討すべきである。これこそ故人の靈を本當に慰むべきものであらう。

川柳家の價値は、その人が川柳家として川柳界にどれだけの仕事をしたか、それによつて評價されべきものだと思ふ。その人の社會的地位とか、他の方面に於ける勢力を、川柳家としての重みの中に加へべきではない。が、これは兎もすると混同され易い。

凡そ近頃くだらないと云へば「川柳報國」なる運動ぐらゐ馬鹿々々しいものはなからう。川柳家が女優の總見をしたところで、日本の國民思想がどう變るものではない。報國といふ言葉が一種の流行物になつて、何か勳章でもブラ下げた氣で、これを看板に使ふものが殖えて來たが、他は云はず、川柳にまでこれを擔ぎ出して來るなどは大あわて者である。私共は、自分の感懐を詩化する喜びの爲めにのみ川柳するのであつて、そこにまたこれの尊さがあるのだと思つてゐる以外、何等功利的なものを考へた事はない。遊戯はその遊戯の三昧境をもつて至上とする。若し一度その遊戯の中に何か功利的なものを考へたなら、つひに三昧境に座し得ぬであらう。報國には報國の道がある。その道のべの頼む木蔭として私共は川柳をしてゐるのである。川柳家にはいつでも野郎自大主義は絶えぬものと見える。思へば初代川柳翁に於ける「高枕これも日光細工なり」といふ傳説の發生なども、或ひはその頃のかういふ川柳報國屋の製造したものかも知れない。恐るべきファツショである。かつて一川柳家詠つて曰く「ほととぎす鳴きや米でも下るかい」と、川柳報國屋は、この句を百萬遍唱へて見る事である。かくして詩歌の何たるかを悟り得なかつたら、その時はいさぎよく川柳を捨つべきであらう。

x

x

最近短歌及び俳句の雜誌によく、川柳の記事が載る。私の眼に觸れたものだけでも「芭蕉に關する川柳」「其角に關する川柳」「山邊赤人に關する川柳」其他一二を數へる事が出来る。かう書くと愈よ川柳も他の詩歌壇から認められたと、川柳社會浸潤派は鬼の首でも取つたやうに喜ぶかも知れないが、私共としては實は却つて有難迷惑なのである。といふのは、それらは他の詩歌壇の人々に正しく川柳を示したのではなく、古川柳の、といふよりも多くは狂句の紹介だからである。例へば芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」といふ句を振つて、川柳では「芭蕉翁ぼちやんといふと立留り」と詠つてゐるといふの類で、誠に情なくなる。これでは彼等をして川柳とは駄洒落と皮肉と思ひつきばかりだといふ大時代な概念を益々裏書させるばかりである。

川柳と俳句との相違はと問はれて

道のべの木槿は馬に喰はれけり (俳句)

煮賣屋の柱は馬に喰はれけり (川柳)

この兩者の相違がさうだと答へた人があるとの事であるが、いまだに川柳家の中にもそれを信じてゐる人が居るのではなからうか、俳誌などにかういふ記事が載るのは、所詮はまだこちらの足並

が揃はないからである。チンドン屋よ、太鼓を捨て、家へ歸れとはこゝを云ふのである。

(昭和八年四月)

十二、批評といふこと

八せんから降り出した雨も、一暴れ暴れたせいとか、どうやら上りさうな氣配を見せて来た。久しぶりの晴間に、上野の展覽會へでも出かけて見やうかと思つたが、途中のぬかるみを考へると、つい出漕つて仕舞ふ。仕様ことなしに、肘掛窓に頼杖をついて、先日の嵐にすっかり裸にされて仕舞つた合歡の木の梢を眺めてゐる。

それにしても、めつきり秋らしくなつて来た。その秋風の中に、かうして頼杖をついて、窓から天を仰いでみると、能因法師のことが思ひ出されて来る。能因法師と云へば

草鞋くひまでは能因氣がつかず

といふ句を始め、よく川柳に引き合ひに出される愛嬌ある坊さんだが、その能因は一日

都をば霞と共に立ちしかど

秋風ぞ吹く白河の關

といふ歌を得て、どうもこの歌を都にゐて世に出したのでは面白くない。一つ旅で得た事にし、發表したいと、それからは家の中に引籠つて、毎日裏の窓からかうして顔を天日に晒しては、旅した人のやうに焦がしてゐたのださうな。

この話は、昔からあまりに有名である。そして人々は机上の空論家の標本として、常に笑ひ的としてゐる。

所がこの間、吉田絃二郎氏の何かの隨筆を見ると、その中にこの話を引いて、昔の歌人は一首を得るにさへ、かうして旅行く人の困苦と哀愁とを身をもつて味はひ、その心境にあつて詠んだのであると、能因のその行ひを褒めそやしてゐる。私はそれを讀んだ時、危く吹き出さうとして止めた。そしてイヤ、これは笑へないと思つた。

成程物事はかうも解釋する事が出来るのである。この場合その見方が當つてゐるかどうかは別として、とに角批評といふ仕事の難かしいのはこゝである。立場々々に依つて起るこの喰ひ違ひである。

私はかういふものを見せられる度に、いつも私共が絶大のものと信じてゐる私共の主觀の、案外

小さなものであることを悲しく教へられる。結局は我意に過ぎないのではないかと。——そしてお互がそんな小主観の上で、其日の風次第で踊らせるあげつろひに、何の價值があるだらうと疑ふのである。

眞の批評とは……。然し、私にそれを云ふ資格があるであらうか。私は秋風に吹かれながらそんな事を考へて、今腋の下へビツシヨリ冷汗をかいてゐる。(昭和四年九月)

附 録

影法師と語る

—一つの作句態度—

今でも相變らずつゞけてゐるかどうか、すつかり御無沙汰してゐるので、かいてもくその後の様子を知らないが、まだわたしが籍を置いてゐた頃の講談社では、毎月一回、三五會と呼ぶ、社員の茶話會が催されてゐた。茶話會と云つても、それは琵琶を弾いたり、劍舞を踊つたりするやうな、そんな世の常のものではなく、この會に列したが最後、誰彼の用捨なく演説をさせられやうと云ふ、如何にも講談社又の名大日本雄辯會の催らしい會であつた。しかも一わたり演説が済むと、その後で社長の講評があり、出來のいゝのはそこで面目をほどこさうといふのだから、つい我こそはいふ氣にもなつて、その會が何時の幾日と發表されると、いづれも胸を躍らして、ひそかに身振り手振りのお稽古などをやつたものである。

然し厄介な事には、當日の演題は、その演壇に立つて、はじめて司會者から指定される事になつてゐるので、前もつて名論卓説を腹案して置く譯には行かない。行あたりばつたり、本當の奇智を弄するよりほか仕方が無いのである。その上、そのまた題といふのが、例せば「××君のハゲ振りを論じて世界の大勢に及ぶ」など、いふのが出て來るのだから、面喰はされる事夥しく、例の米騒動の頃など「わが二食主義に就て」といふ題を得た某君の如きは、喋つてゐる中にいつか實感が昂じて來て、壇上でポロ／＼やり出したやうな事さへあり、その爲め飛んだ悲喜劇を演ずる事が尠くなさう。

その三五會の或る時、わたしには「わが影を見よ」といふ演題が當つた事がある。少年客氣の頃で、わたしはその題を得ると「わが影を見よとは、世に處する上の、わたしの日頃のモットウである」とか何とか、一ばしな顔をして、怪しげな我が處世哲學論を滔々と一席やつてのけたものである。

どんな事を云つたか、今では記憶も薄らいだが、大體の論旨といふのは「我々は常に我が影を見てゐなければいけない、つまり常に自分といふものを第三者の位置に置いて、己れ自身の行動を、己れ自身で批判するだけの餘裕を持たなければいけない」といふやうなことであつたと思ふ。

わたしは今、ひとりポツネンと嵐の底の燈下に、秋の夜らしくクツキリと襖に寫つた我影法師と

向ひ合ひながら、ゆくりなくもその頃のことを思ひ出したのである。

當時、本當に自分でさう思つてゐて語つたのか、或ひは、たまたま誰かからの耳學問を、そつくりそのまゝ受賣りしたのか、どうも、そのところがハッキリしない。が、然しそのいづれにしても、今になつてそれを味つてみると、平凡な言葉の中に、何か私自身に教へるところの多いのに、わたしは、はじめて他人から聞いた言葉でもあるかのやうに、今更らしく感心したのである。これは川柳家にとつても大事な心得だ、と氣がついたからである。

古川柳を讀んだ（味つたとは云はない）ものゝ先づ第一に口にするのは、きまつて彼の警拔なる社會批評眼に就てゝある。従つて川柳とし云へば、何か世の中のあらひろひ……惡口、毒舌でゝもあるかの如く思惟するのが一般のそれであるが、これは如何なものであらうか。

かういふ古川柳の作家達の川柳眼の正體を知るといふ事は、とりも直さず、川柳といふものゝ正體を知ることではなければならぬ。それには先づ、當時の江戸ツ子なるものゝ正體から知る必要があらう。

川柳が漸く落首などゝ混同され出して來た化政度以後の江戸ツ子に就いてはしばらく云はず、それ以前に於ける江戸ツ子は、如何なる道德、如何なる哲學を有してゐたか、これに就いて三田村鳶魚氏は次のやうな興味ある説を吐かれてゐる。氏の曰く、

「さまア見ろ」は本來自分で自分を嘲ける言葉であつた。「さまア見やがれ」は他の内省自覺を要求する言葉であつた。それを今日は自他轉倒させるから固有の意義を失つて淺薄な惡對になり果てる。「外聞がわりイ」の前に既に、自己批判をしてゐる。即ち彼等は自身にさまア見てゐるから、他人に笑はれて、はじめて外聞が悪いのに心づいたのではなく、自己は早く己に知つてゐるが其處を他人から突かれるのだから、眞に痛み入るので、一本參らずとも先刻降參してゐるのだ。さうだから自己批判に依つて、豫め其の弱點を取除いて置かうとする。是が「外聞がわりイ」なるものである。彼等は向ふ見ずのやうでも、常に善く自己批判をして居る。それは習性でもあつたから、誰にしても自己批判をする筈のものと思つて居る。若しも當り前の事なのに、自己批判を怠る者があれば、早速「さまア見やがれ」を持出す。今日なら「氣を付け」程度なのだ。江戸ツ子は自己批判の凄じいもの、自嘲自罵は彼等の得意なことであつた。云々

ら理解出来る筈である。古川柳の作家達は、好んで徒らに毒舌を揮つたのではない。彼等の毒舌とも見えるものは、みなこれ三田村氏の云ふ、自分自身への嘲罵の聲にほかならないのである。彼等は常に自分を第三者の位置に置いて、絶えず我が影を見詰める事を忘れなかつた。そして、その影の動きに、少しでも嫌悪すべき何ものかゞあれば、彼等は用捨なくそれに向つて罵倒を試みたのである。

古川柳に、寸鐵人を殺す底の鋭さを感じるのは、この罵聲の中に匿された、さういふ假藉なき自己批判が、その讀者の胸を強く打つからである。同じ人間である以上彼もまた既に承知してゐるであらう彼自身の急所を、キユツとそれが刺して来るからである。

古川柳に詠まれてゐるさういふ種類のもものは、單にある人を対象とした、ある人の感情ではないので、そこに見出すものは、あらゆる人間の持つ、ある弱さ、醜さ、さういふ自己嫌惡の聲なのである。——それは永遠に變らぬ人間の嘆かひの聲でなくて何であらう。

己れ自身の行動をまで、かうして常に客觀しやうとした江戸ツ子のかういふ潔癖は、やがて他人の中にまで自分の姿を見るやうになつた。

古川柳の作家達が、新吾左や淺黄裏を好んで嘲りの的としたのも、決して彼等が、彼等田舎侍や

田舎通人の上に、都會人の優越を感じてゐたからではない。彼等は、彼等新吾左や淺黄裏達の自己批判なき、自省なき振舞ひに嫌惡を感じたからである。——さういふ振舞ひの中に、ともすれば見せつけられるある時の自分自身の姿に、彼等は寒む氣を覺えて、ベツと唾を吐いたのである。

三

かういふ江戸ツ子の處世態度はまた川柳の上に特殊な描法をつくり出した。間接感情といふのはある人の姿を借りて我が思ひを吐く事である。ある時は花魁の氣持になつて我が花魁を詠ひ、ある時は居候の氣持になつて我が居候を詠ふ。好んで古川柳に使はれてゐる妙味ある客觀描法である。通り句となつてゐる古川柳の一つに

町内 知らぬは亭主ばかりなり

といふ句がある。(正しくは亭主一人なりである)この句は人も知る如く、妻の不義を知らぬ亭主のろまさをあざけたものであるのに違ひない。が、しかし一步退いて、この句のわたしどもへの迫力を考へると、これはそんな暢氣な他人事ではなくなつて来る。もう單なる嘲罵ではないのであ

る。恐らくこの句の作者は、妻を盗まれた男自身ではなかつたかと想像される。他人事と見る時、この句は餘りに慘酷である。この假藉なき悪態は、當人その人の自己嫌惡の聲でなくて、誰がよく吐き得るか。即ち不義された作者自身が、それを他人事として、自らを客觀しつゝ川柳したところにこの句の深刻さが、主觀的なたゞの詠歎以上に強く人を打つのである。更に

故郷へ廻る六部は氣の弱り

といふ句もまた人口に膾炙する古川柳であるが、これもその表面の字句通りに解するならば、六部が我が故郷へ歸つて來たといふのであつて、先づ嬉しがるべき氣持がそこに見えなければならぬ筈である。然るにこの作者は、氣の弱りと云つてゐる。こゝにこの句の作られた動機を考へてみなければならぬのである。わたしはこの作者もまた、恐らくは六部その人ではなかつたかと想像するのである。天道様と米の飯は何所にもあると、親兄弟を捨て國を捨てた男が、思つた通りに芽もふかず、寄る年波にいつか生れ故郷なつかしさのあまりそれとなくその邊へ立廻る、——と考へて見れば、この「氣の弱り」に無限の感慨が籠められて來る。この作者は或ひは六部でなかつたかも知れない。しかしながらその人は、必らずやその六部のかういふ氣持と同じ佗しさを經驗した人で

あつたに違ひない。その人がさういふ氣持を寫すのにもつともふさはしい六部といふものゝ姿を假りに借りて、我が感慨をそれに托して述べた、さうもまた考へられるのである。いづれも古川柳の特色とする客觀的主觀描法の妙である。

四

あらゆる藝術は、その制作にあつて鑑賞家の存在を無視する譯には行かない。既にさういふ意識のもとに或るものゝ制作に従ふ以上、そのつくられたものが、獨合點に終つたのでは何の價値もない譯である。つくられたものは自身のものであると共に、それはまた直ちに民衆のものでなければならぬ。いや、自分のものであるといふ意識さへ、こゝでは問題である。制作者の手を離れると同時に、その作者は誰であつたかなどといふことは、寧ろどうでもいゝのである。それが本當に民衆のものにさへなつて呉れるなら。

作者はその仕事の中へ、人間——わたしでもあなたでもないその人間を、表はす事が出來さへすればいゝのではなからうか。

古川柳の作者達のかういふ態度は。わたし共もまた大いに學ぶべきであると思ふ。しかもそれは

單なる作句上の一技法たるにとどまらない。わたしは年少客氣の頃「わが影を見よとは、世に處する上の、わたしの日頃のモットウである」と一ぱし顔に他人の受賣りをやつたが、今からみて、よし他人の受賣にせよ、これは今も自分の處世上のモットウとして間違ひのない言葉だと信じてゐる。私は今から三年ばかり前、川柳作句上の態度として「人境一致」といふことを提唱したことがある。その論旨は、川柳家は如何なるものでも川柳化し得ぬといふことはない。が、だからと云つて目にうつるもの悉くが川柳になるのではない。それを句に作らうとする心、謂はゞ川柳する心がこちらにあつて始めて川柳になるので、例へば、こゝに或るものが存在する、わたし共はこれに對して、これを川柳にしようといふ心を働かせる、そこで始めて川柳が生れるのである。しかしこちらからのみ働きかけるのではない。その前に、その對象たる或る事物、若しくはある現象が、先づこちらの川柳しやうといふ心を動かして呉れたかどうか、それをよく考へなければならぬ。即ち心ばかりを詠つてもいけない。物ばかりを詠つてもいけない。この二つがうまく溶けあつてこそ、本當の川柳となるのである。といふのであつて、つまり「人境一致」とは、觀察する立場にある自分、即ち「人」と、その對象物、即ち「境」とが完全に一致してはじめて趣きのある句が生れるとわたしは論じたのであつた。云ふところまことに平凡幼稚ながら、所詮は「所」と「能」との間

に川柳があるとしたのであるが、しかしこれは現在のわたしからすると、平凡どころか、まだ／＼至らぬ考へであつて、その上そこに或る程度の距離を兩者の間に保たせねばならぬものであることに、今かう考へて來て氣がついたのである。

五

「距離は美の要素なり」と云ふ言葉があるが、まことに至言であると思ふ。手近い例が、一枚の油繪を見る場合にも、近くから見ると、殆ど畫としての見分けもつかぬ程にべた／＼に塗りつぶされてゐて醜いが、ほどよき距離を得てこれを眺めると、その醜きものが立派な畫となつてわたし共の眼に入つて來る。これをまた時間的に見ても、わたし共は「江戸時代」と云へば何となくゆつたりしたのびやかな感じを受けるのであるが、實際の江戸は必らずしもさうではなかつたであらう。現在の世の中と同じやうにせよこましい、窮窟な事ながらもあつたに違ひない。しかるに江戸時代がわたし共に美しく思はれるのは、大正何年は江戸時代でなかつたから、昭和何年は江戸時代でなかつたからである。現在と江戸時代との間には時間のへだたりといふ距離がある。その距離がその時代をペールの向ふに美しく見せてゐるのである。

かくの如く距離といふことは、時間的にも、空間的にも、美の要素である。が、更に一歩進めると、これらの時空を超越した自分自身の中に於いても、また非常に大切なものとなつて来るのである。

前に述べた如く、すぐれたる句を通してその川柳の作者の作句態度を見ると、大きな悲哀に直面しても、直ちにその悲しみの中に溺れず、若しくは同じく大きな喜びに直面してもその喜びの中に踊つてゐない。靜かに他人事のやうに自分を眺めてゐる。即ちそこに自分と自分との間に距離が程よく取られてゐるのである。

芭蕉は常にその門下に「情より姿を先にすべし」と教へてゐたさうである。云ふまでもなく芭蕉のこの言葉は客觀の大切なること、つまりは物との距離の必要であることを説いたものであるが、その芭蕉の「幻住庵の記」の中に、實によい言葉がある。「人家よき程にへだたり」云々といふのがそれである。これこそわたし共の風流に於ける心構えであるべきものではなからうかと思ふ。人を捨て、仕舞つたのでは仙になる。と云つて人に交りすぎては俗になる。その仙と俗との間、そこに芭蕉の求める境地があつたのである。

わたしの「我が影法師を見よ」といふモットウは、こゝでどうやら「川柳は我が影なり」といふ

スローガンに變つて來て仕舞つたやうであるが、しかし事實多くの川柳家は自分の影を見つめることに依つて、煩ららしい世間から救はれてゐるのである。そして川柳家は社會のあらゆる悲しみ、喜び、その他すべての苦惱に勝つてゐるのである。本當の川柳家は百の喜びを五十にとどめて、残りの五十を句にする。百の悲しみを五十にとどめて、残り半分を句にしてゐるのである。それなればこそ、川柳家は悲しみの爲めに自滅することなく、喜びのために有頂天になることもなく、常に反省を道づれとして歩んでゐるのである。これは實に「距離」がわたし共を救つて呉れてゐるのであらう。川柳味とは或ひはこの距離を云ふのではないか、餘裕こそまことに魂の憩ひ場でなければならぬ。

わたしは自分の影法師と向ひ合ひながら、こんなことをとりとめもなく考へて見た。

(昭和三年十一月)

川柳の作り方

—内容と表現といふこと—

どうすれば川柳がうまくつくられるか、その秘訣とでもいふやうなものがあつたら、それを話して欲しいといふやうな御注文であります。どうも難かしい御注文で……これが何とかの術とでもいふものですと、急所々々をお話して行けば、ある程度その人に糸道をつける事も出来ませうが、川柳——別に川柳と限つた譯ではありませんが、すべて斯ういふ詩歌の道は早く云へば腹藝で、そのニンにある問題でありますから、その人自らあるものを會得しない以上、いくらハタからワア／＼云つたところで、結局どうにもならない。その人の身上しんじやう以上のものは出来つこないもので、一に自分の精進に待つより仕方がないのであります。

従つて折角の御注文ではございますが、かうすればかうなりますといふ風に、ある方程式を示してお話するといふやうな事は、とても出来るものではありませんから、自分がかうして句をつくつてゐるといふ、私自身の作句態度、ならびにその時の心境とでもいふやうなものと、終りに作句

の一二例を申述べて、その責めをふせぎたいと思ひます。御参考になるかどうか、しばらくお聞きとりを願ひます。

そこで先づ第一に、川柳のうまいまづいはどこにあるかといふことでありますが、これに就いてはいゝ實例がございますから、私の所感を申述べる前に、ちよつとお話をいたします。

この間、素人の方ばかりで川柳の會をするといふので、それへ招かれて参つた事があります。その席上「犬」といふ題が出まして、これを私が拜見する事になり、その選で私は「自慢犬右手に石を持つてゐる」といふ句を没にいたしました。と申しますのは、この句に現はされたものだけを見ますと、恰も自慢犬といふ犬が右手に石を持つて歩いてゐるやうで、何の意味か少しも判らなかつたからであります。するとこの會の世話人で、非常な愛犬家の某氏が、その短冊を見つけて出して、これはとても名句です。この作者はよほど犬に就いて知つてゐる方です。と云つて、暗に私の選の杜撰を攻めるが如く、まア私に抗議を申込んで來た譯であります。

この方の説明によると、愛犬家といふものは、朝夕の犬の散歩にはきつとどこかへ石を忍ばせてゐるものだといふ。つまりこの愛犬に對して戦ひを挑む犬があつたなら、その石を投げつけて未然に闘争を防がう爲めで、愛犬家の心理をよく穿つた句だといふのであります。

その句が斯う表向きになつて仕舞つては、私も選者としての責任上黙つては居られませんので、席上、今申上げたやうな句評と一しよに、なぜ私がこの句を採らなかつたか、この理由を辯じましたが、成程「自慢犬」の句も説明を聞けば大變有難いものとなつて来るが、それは説明の力であつて、句の力ではない。つまり我々をうつものは、その事實の力で、この場合句なんてものは、有つても無くてもいゝものとなつて仕舞つてゐる。私は事がらを選んでゐるのでなく、句を選んでゐるのだ。——と、こんな風によく話してやりましたが、川柳の詠み方の難かしいのはこゝの所でありませう。

藝術が事實の再現でない事——事實の模倣でない事は今更皆様に申上げるまでもない事と思ひますが、世の中にはまだ／＼この考へが呑込めずにゐる方も尠くないやうであります。事實を事實のままに現すのならば、なにも小面倒に川柳なんて云ふ形式を借りる必要はありません。そのまゝ事實を放り出して見せた方が手つ取り早くもあり、また人にもよく判る。それを苦しんで十七字といふものに纏めるからには、そこに何か無くてはならぬ筈であります。

即ち、この何か無くてはならぬの「何か」が私共の魂であります。私共が苦しみながらも、尙ありがたい氣持で作句に精進するのは、自分自身の魂を宿し得る——見る事が出来るからでありまして、こゝに藝術といふものが生れて来るのであります。

早い話が、こゝに一個金拾錢也の林檎があるといたします。然るにこの林檎は、名ある畫家のカンプスに寫されると、急に何百圓、何千圓といふ高價なものになつて仕舞ひます。これは何故でありませうか。

なぜ本物の林檎よりも、それを題材として描いた畫家の林檎の方が値が高いか、ちよつと考へるとおかしき氣がいたしますが、これはその場合——つまり描かれたものを指して云ふのであります。——そこにある林檎は、もとの果物屋の店頭に、或ひは畑の中に轉がつてゐた林檎ではなく、畫家自らが生んだ新しい一個の林檎だからであります。更に云へば林檎と云ふものに姿を借りた畫家の魂を——先程申上げましたその魂を其所に見るからであります。これが藝術の尊さであります。従つて高い意味から云へば、そこに描かれたものは、畫家にとつては或ひは一つの便宜にしか過ぎないかも知れません。ある對象を一つの機縁として、そこに自己の美に對する感激を——魂を表現し得れば足りるのであります。即ち藝術の價値とはこの魂の價段で、そこに描かれた題材の價段ではないのであります。

と申します意味は、忠臣孝子を描いた繪が皿小鉢を描いたものよりも尊いとは云ひ難いといふの

でありまして、要は描かれた繪の中に、畫家の魂が生きてゐるかゝりないかゝり價値の岐れ目でありま

す。』
▽川柳作家の心がけも、矢張りこれと同じであります。その句の中に、作家の魂が生きてゐるかゝりないか、これでその句の價値は定まるのであります。本當に美しいと感じて美しと詠んだか、本當に悲しいと感じて悲しと詠んだか、本物か、つくりものか、其所が大切なところであります。頭だけでつくつたものはどんなにうまいことを云つても、どこか迫つて來る力がない。嘯みしめて見て味がない。こちらの魂をうつて來るものがない。これは云ふまでもなくその句の中に作者の魂が宿つてゐないからで、即ち血が通つてゐない。——生きてゐないからであります。

よく見詰めて、嘯みしめて本當に自分の心にピタリと來た時、即ち本當に自分のものになり切つた時、詠んだものでなければ本當の句とは申されません。

然しこんな風に、物をよく見詰めるとか、實感を偽らずに詠み出せとか申しますと、直ちにこれを寫實と心得て對象を克明に寫す。そして眞に近いものを描き出せば、もうそれで立派な句だと思つてゐる人も尠くありませんが、これは飛んだ大間違ひであります。何等その物に對して作者の心の動かないものを、たゞ克明に寫したとて、それは詩でもなければ藝術でもありません。それでは

單なる説明にしか過ぎないのであります。

私が最近提唱して居ります「人境一致」といふやうな議論もつまりはこの事を高調したものであります。こちらの心即ち人と、その對象の底に流れてゐるある魂、即ち境とが、お互ひに觸れあつて、その刹那に火花の如く生れたものでなければ本當に尊い句ではないといふのが、その主意であります。

このことはいづれ詳しく申述べる機會もあらうと存じますので、茲ではさし控えますが、先程申上げました寫實といふことについて、手近い例を引いて申し上げますと、あの生人形、役者の顔だとか、藝者の顔だとかを、さも本物の人間が眼の前にあるかの如く作られてゐる人形でありますが、私共はあれを見て果して本物以上——或ひは本物と等しいと申してもいゝと思ひますが、さういふ本物から受けるやうな美しさを、そこから感じませうかどうか。

成程、似てゐるには似てゐます。いや似てゐるところではありません。これらの人形細工師は、本物の顔にある小皺一つ、黒子一つを、その人形の顔から落すまいとしてゐます。従つて顔の構造から云ひますと、本物と瓜二つと申してもよい程であります。惜しいかな生きてゐない。人形ですから、生きてゐないのは當り前かも知れませんが、兎に角血が通つて居りません。

これは彼等が、それらの顔に少しも魂を動かされてゐないからであります。止むにやまれぬある衝動から感激の中に刀をとるのではなく、手間仕事としてこれを作つてゐるからであります。彼等は俳優の顔から美を感じる前に、先づ眞を寫す方に急がしい。かくて作者の魂といふものは少しもその人形に籠められては居りません。ですから似は似ても死物より出来ないであります。

例へばこゝに羽左衛門の生人形があるとします。ところがこの生人形の羽左衛門は何役に扮しても、いつも同じ樂屋の羽左衛門——正しく申しますと、それほど生活さへも持たない羽左衛門で少しも舞臺の上の演技中の、つまり或る人物になりきつた彼ではありません。め組の辰五郎だらうが、木村長門守だらうが、いつも羽左衛門に似た木偶坊が、その役に扮してゐるといふだけの話でそこには役の氣魄とでも申しませうか、さう云つた内から發するものが、爪の垢ほども見られませぬ。

しかもそれは寫實であればある程、一層私共にその醜さを思はせるばかりであつて、あのロダンとかさう云つた優れた藝術家の手になつた塑像に見る、溢るゝばかりの美や力などは、夢にもそれらの人形から受ける事が出来ないであります。これは何か、云ふまでもなく、作者がその作品に魂を宿すことを忘れてゐるからであります。

ではその「作品に魂を宿す」といふことは、どういふことかと申しますと、まさか形のない魂を、作品の中へ割り込ませる譯には参りませんから、この場合はそれと反對に、その句なら句にしやうといふ目的物——つまりその素材を、一度自分の魂に通はせるのであります。私はこれを魂の裏渡しにかけると云つて居りますが、その「魂の裏渡し」にかければよろしいのであります。

魂の裏渡しにかけるといふことは、自分の實感をランピキにかけることでありまして、そこでもろくの無駄を捨て、自分の實感のその核心を——最も純粹であるところのものを絞り出す。即ちこれによつて、その時の自分の感激を、情緒を、一層強めさすこととあります。これでこそその作られた句は、始めて人の胸へまで強く響くことが出来るのであります。

魂の裏渡しにかけるといふことは、要するにその素材を自分のものとなし切ることと、そのものを完全に自分のものにして仕舞はない中は、いくら掴んだものがいゝにしろ、自分の思ふ通りの句は出来はいたしません。然し一旦自分のものにして仕舞へば後はもう自由で、殺さうと生かさうとそれからはどんな勝手な眞似でも出来るのであります。

例へばこゝに四角なものがあるといいたします。自分はその四角なものを詠みたいのだが、どうもたゞ四角と云つただけでは、自分の思つてゐる四角は出て來ない。却つて丸と云つた方が自分には

その感じが強い。といふやうな場合があるとします。さういふ場合、もし自分が本當にさう信ずるならば、その時は大膽に丸だと云ひ切つて仕舞つても、——といふことは圓形をもつてその角なるものを示しても、一向差支へないのであります。これは少し極端な例かも知れませんが、その「丸」だといふ言葉によつて、その句を見る人に一層四角を四角らしく、即ち作者の思つてゐる四角と同じ四角を感じさせることが出来ればよいのであります。

これが魂の裏渡しの方法であります。然しこの裏渡しの方法が、獨り合點であつたり、借りものであつたりしては、危険の上もないことで、何所までも作者の大きな主觀から出たものでなければなりません。我といふ小ひさな個を出で、人といふ大きな個の中に生きるもの——即ち私の心であると共に、それは直ちにあなたの心でなければいけません。と云つて決してそれは、誰にも判りきつたもの、平凡なものを詠めといふのではありません。人の心の奥に必らず潜んでゐるであらうものを、叩き起せと云ふ意味であります。

こゝで話の順序として、少し諄くなりますが、内容と表現といふことについて、一通り申述べて見たいと思ひます。何だかお話が急に逆轉いたすやうであります。これはつまりは今までのお話の結論とでも云ふべきものであります。

▽そこで、表現法などと申しますと、今までは作句上の一つの技巧か何ぞのやうに考へられ、全く内容とは別々のものゝやうに思はれて居りましたが、これは大間違ひで、決して兩者は別個のものではなく、その關係は、例へば靈魂をつゝむ肉體、とでも見ませうか、一つを殺して一つが生きるものではないのであります。兩方同一だとは申しませんが、これは兩者即したもので決して切離して考ふべきものではないのであります。(尚、念の爲お断りして置きますが、詩歌に於けると詩型とは定つた一つの表現形式であつて、表現そのものではありません。従つて形式と内容とはまた自ら別個のものであり、こゝに詩歌の他文藝との相違があるのであります)

これを詳しく申しますと、従來表現といふものから全く切離して、獨立したものとして考へられて居りました多くの人の所謂内容と稱してゐるところのものは、實は内容でも何でもなく、そのものゝ題材——素材であつたのであります。従つてその内容は、同じく内容と呼ばれるものであつても、單に題材だけの持つ内容であつて、そこに示されたもの——作品の内容では無いのであります。内容とは表現されたものゝ中に宿つた姿を云ふのであります。題材は何所までも題材であり、決してその作品の内容とは云へないのであります。それを兩者混同しますから妙なものが出来る。先程の「自慢犬」の句の如く、そこに示されたもの以外から、その題材となつた事實を拾つて來て、

それと現れたものとを較べたりしますから、飛んだ間違ひが起つて來るのであります。

即ち表現とは内容を形づくるところのものであつて、表現を持たない内容などと云ふものは存在しない筈なのであります。にもかゝらず、世間にはよく「この句は内容はいいが表現がまづい」などと云ふ言葉が行はれてゐますが、これは全くべら棒な話で、表現がまづければまづいだけに、その内容もまたなつてゐないのであります。試みにこゝに芭蕉の句

荒海や佐渡に横たふ天の川

を引いて來て、仔細にこれを味はされたなら、私が今まで申上げた表現即内容といふ事が、ハツキリ判つて頂けると思つて居ります。

斯様に、表現といふものは創作の上に大切なものでありますから、作句にあたつては充分心を使ふべきで、例へ川柳の一句にしろ、摺んだ材料がいゝのだからなど、そのまゝ投げ出すやうな事は慎しむべきであります。いかにしたならばその摺んだ材料が、即ち見つめた境地が、今自分が感じてゐるそのまゝに現れるかと云ふ事を、よくよく考へなくてはなりません。こゝに前に述べた「魂の裏渡し」が必要になつて來るのであります。

とまア理窟だけで申せばかういふことになるのでありますが、あまり抽象論のみを申して居りましても實作に御経験のない方にはお判りにくいと思ひますので、以上申述べました作句態度——謂はゞ川柳の仕立て方を、次に二三實例に就いてお話いたしませう。

恰度唯今、兩國の國技館に夏場所が開かれて居りますから、どなたにもお判りのいゝやうに、角力を題材にそれを申しますと、昔の句に

角力場で氣のない男 頬杖し

といふのがあります。これは氣のない男が角力場で、人の騒ぐのも知らぬ氣に、頬杖してゐるとだけの句でありますが、しかしよくよくこの句を味つて行きますと、この男一人を置き去りに熱狂しかへつてゐる周囲の人々の姿がだん／＼目に見えて參ります。更に土俵の上の力士の、或は大物を喰つた姿までが、やがてあり／＼と浮かんで來て、今や白熱化した角力場の空氣を耳近く感じてさへ來るのであります。が、もしこの句が

横綱が土を冠つた大騒ぎ

といふのでどもありましたらどうせう。私共の句を通しての想像は、前の句の場合ほど無邊に擴がつて行きませうか、必ずや横綱が倒れたといふそれだけの事實をしか眼の前に描かぬに違ひありません。さう思ふ時、いかに前の句がうまい句かといふことが判りませう。後の句は一を描いて一を想像させるだけですが、前の句は一を描いて百を想像させる。こゝに働きがあります。萬緑叢中紅一點といふ言葉がありますが、この紅一點があるので萬緑もまた生きて來るのであります。萬緑のみでは極めて平凡、單調なものになつてしまひます。川柳の狙ひ所はこの紅一點、これを萬事につけ、狙ふべきで、單純なるものを描いて、隠されたる複雑なるものを連想させる、これが仕立て方のコツであります。

と申しますのは、川柳は俳句と違ひ、多くの場合動的なものを題材と仕勝ちです。さういふ時、それを正面から描いたのでは、前の横綱の句のやうにある事柄の説明に終つてしまつて餘情といふものが無くなります。そこでそれを絞つて行つてその中心を捉へ、あとは連想にまかせるといふ手段も時に必要となつて來るのであります。

これは前にも申しましたやうに、何も川柳にのみ限つた譯ではありませんが、すべての文藝は、他に傳へるといふことが眼目であります。獨り合點は許されない。人が自分と同じ氣持になつて吳

れなくては何にもならないのであります。でありますから丸を描いて四角を思はせてもいゝと先程も申したのはこのことで、その丸が四角以上に四角な物に向ふに感じさせることが出來れば、その表現は成功したと云へるのであります。

この頬杖の句など、やゝその筆法でありますが、川柳にはまたかういふ表現法の外に、他人の姿を借りて、その人のことにして自分の經驗を述べる、といふ獨特の仕立て方も行はれて居ります。同じく角力の句に

子を抱いて總身のすくむ角力取

といふのがあります。これは角力取があつた大きな體で赤ん坊を抱いた不調和を詠んだものであります。それが角力取がもしや赤ん坊を潰しはしないかと怖がつてゐる様子と見、更に「總身のすくむ」とその氣持にまで入つて詠んでゐるところにこの句の面白味があります。しかし角力取が子を抱いて果して總身がすくむか、これは疑問であり、またこの作者にしても、わざ／＼角力取にさういふ氣持を聞いた譯でもないでせうが、この句が如何にも本當らしく出來てゐるのは、作者が自分の常々の經驗に見て、馴れぬ男手に赤ん坊を抱くさうな心配を、角力取といふものを持つて

来て、その人らしく更に誇張させたその働きにあるのであります。

即ち自分といふものを一遍通り越させてゐる。こゝにもまた違つた意味での魂の裏渡しがある譯であります。がしかし、川柳のかういふ手段は、謂はゞ一つの小説的な表現法でありまして、自分といふものを全然他人にしてしまつて、そこに一個の影武者をつくり、我が喜び、悲しみをその人に託すので、ある時は自分が直接訴へるよりも、更に深刻にその嘆きを他に訴へることが出来るのであります。川柳がともすると皮肉なものと思はれますのも、かういふ表現法により、時に作者が自分自身へ冷笑を浴びせかけるやうな場合もあるからで、決して川柳は諷刺のみをことゝするものではありません。

要するに川柳に斯様な手段が行はれて居りますのも、今までくどくも申して参りましたやうに、どうすれば本當のものが傳へられるかといふ爲めの工夫でありまして、句が説明や理窟に墮することを避けやうとする苦心に他ならないのであります。

正しく物を見、正しく自分に入れ、これを正しい言葉と正しい姿とで——即ちその時の情緒に一番ふさはしい言葉と姿とで——新しく自分のものとして表現する。新しく川柳をお始めになる方は先づ第一にこの心がけを養ふことが大切であります。

以上、御希望の題とは大へん離れて仕舞ひましたが、常に作句にあたつて自分の考へます點を、前後もなく申述べました。不用意のところへの御需めなので、言はなはだ蕪雜であります。幸ひに他山の石ともなればと思つて居ります。(昭和三年五月)

をはりに

私の仕事はまだ未完成である。さういふ未完成のものをかうしてお目にかけるのは省て何か慚愧たるものを覚えぬでもないが、しかし、だからと云つてこの仕事をいつまでも私して置いたのでは、その完成を望めない。そこで機会を得たのを幸ひに今までの逡巡を捨て、敢てこの貧しい川柳觀を世に問ふつもりになつたのである。所詮は叱正を待つ心に他ならない。

従つてこゝには新舊の抽稿の中から比較的考察方面のものゝみを探り、一應ある程度系列を興へてみたが、舊稿の中には散失のものも尠くなく、つひにその二三を缺いたので、各篇の聯絡に多少落丁の感なきを得ないやうなものとなつて仕舞つたのは残念である。

前にも云つたやうに私の仕事はまだ未完成である。しかしその未完成の中に私が何を意圖してゐるかは、この集によつて凡そお察しを頂けたかと思つてゐる。謂はゞ本書は私にとつての一つの設計圖で、私の本當の仕事はこの設計圖を土臺にこれから始まるのである。

思へば川柳も、よく今日まで狂句百年の負擔に堪えて來たものである。が、川柳はもうその負擔から免かれていゝのではないか。——私の願ひはそこにある。たゞ恐れるのは微力よくそれを成し得るかである。しかしそれにしても私は、兎に角川柳なるものゝ眞面目の姿だけは、いくらか自分に頼めたのではないかと考へてゐる。

本書を云へば、私は寧ろ、俳壇の方々に先づ本書を見て頂き度いと希望してゐる。

その何が故には、もうこゝで云ふを要さないかと思ふ。たゞ一言贊をなすなら、俳句の何たるかを眞に知るには、また川柳をもよく知ることが必要であらうといふことである。同時に川柳家も、俳諧の何たるかに無關心であるべきではない。私は私のさういふ持論に従つて、本書の内容もその立て前で編んで見た。

が、さうは云つても正直なところ、本書は意あつて力足りずの觀がないでもない。なればこそこゝに世の批判の前に擧げ、ひろく教へを待つて將來を期さうとするものである。かういふ、この一筋につながる私の渡せを理解され、常に私に對し御鞭撻を惜しまれぬ久保田萬太郎先生の御厚情と、御多忙の中を特に拙著の爲め長文の序文を惠まれ、この道の困苦に御同情下さつた喜多村謙郎先生の御好意とに、今改めてこの機會に、私は心から御禮を申上げる次第である。

尙、終りに、本書の内容につき多少の蛇足を加へるなら、巻頭の「俳諧から川柳へ」は、文藝春秋社の文藝思想講座に掲げた「川柳略史」の前後を少しく改めてそのまま使つた。「柳界小事雜稿」は各種の川柳誌に掲げた時評めいたものを集めたもので、云はずもがなこのみであるが、現在の川柳界の消息を幾分傳へるものとして、これまた何かの興味があらうかと、わざと掲げることにした。篇中「潔癖の人々」は我ながら少し極端すぎる議論だと思つてゐるが、誰しも自説を強調するとなれば、承知でこゝまで行つて仕舞ふのではなからうか。心ある方にはそれも判つて頂けると思つて捨てなかつた。

附録の二篇は、初心の人の爲めに何か手引風のものといふ出版元からの需めに、それらしい舊稿を補筆の上、しばらくそれに應じた譯である。この他「西鶴の俳味」及び「川柳發生の時代」の二篇は是非加へて置きたいと思つたのであるが、その切抜きを得られなかつたので、他の隨筆風のものと共に後日に讀ることゝした。

昭和十一年三月廿七日

著者

昭和十一年五月十日印刷
昭和十一年五月十五日發行

川柳と俳諧

定價一圓五十錢

著者

前田雀郎

發行者

飯尾謙藏
東京市小石川區江戸川町十八

印刷者

萩原芳雄
東京市牛込區山吹町一九八



不許複製

發行所

東京市小石川區江戸川町十八

交

蘭社

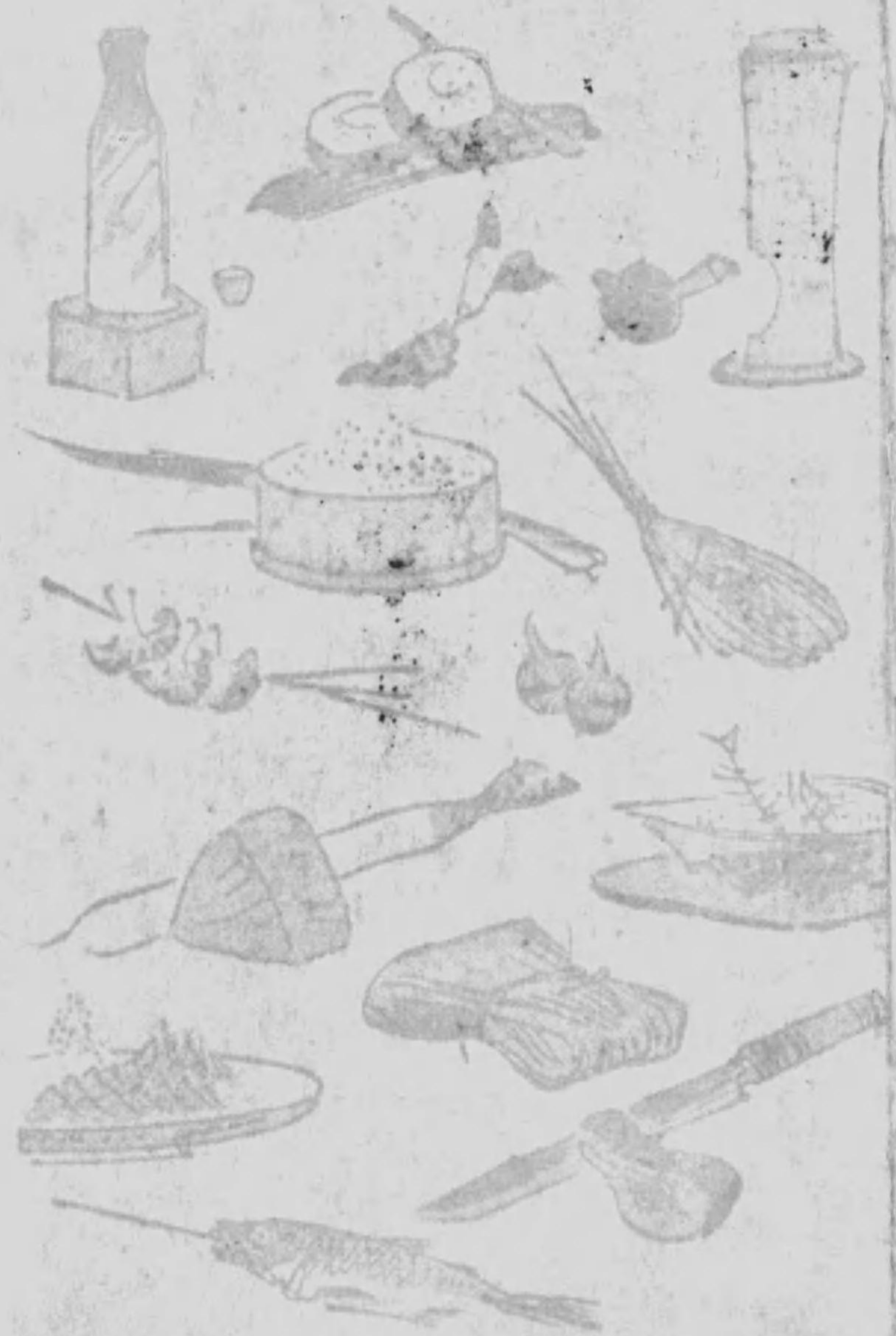
接替東京四〇二七九番
電話小石川四三五一番

44-65

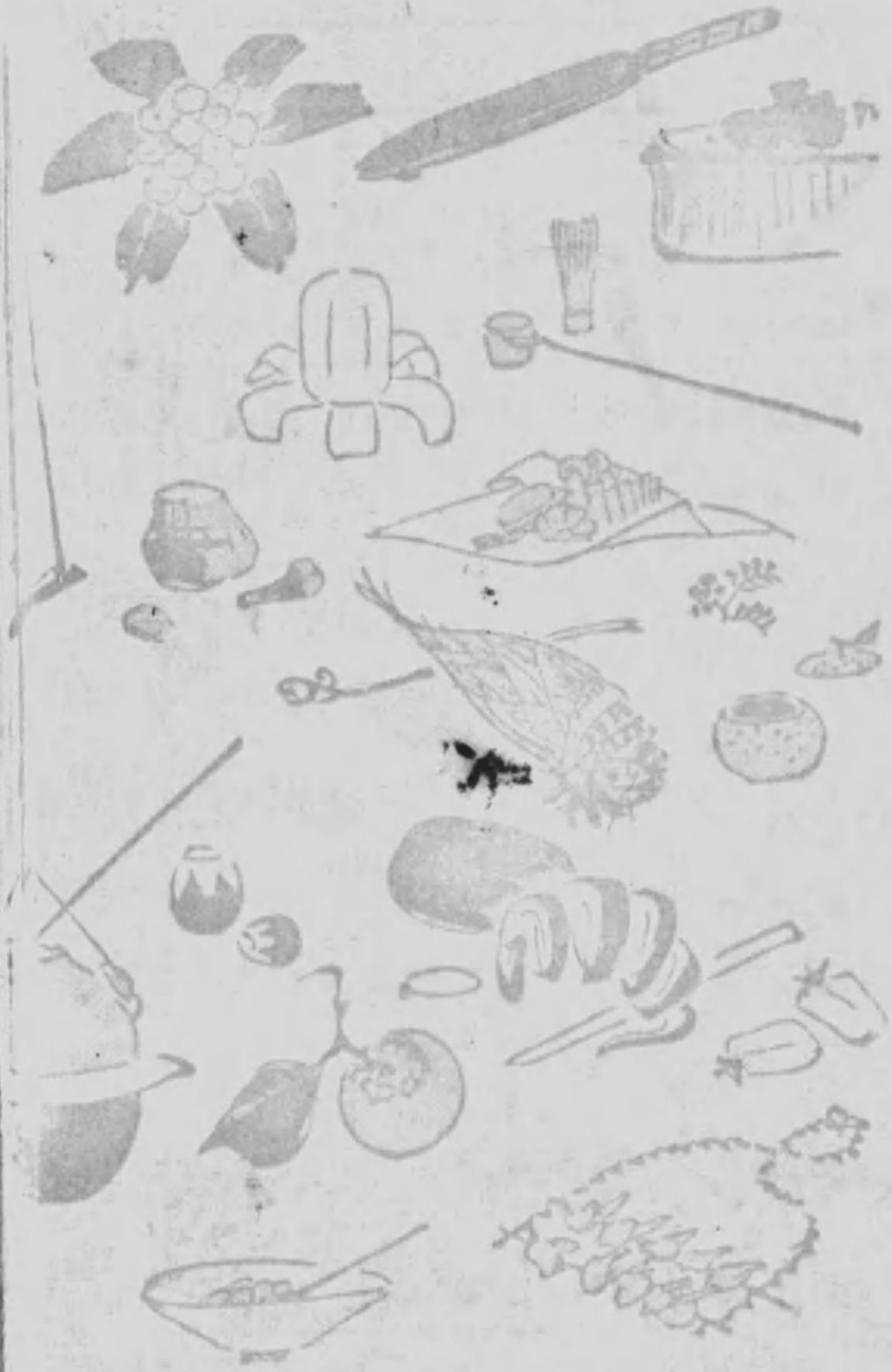
交蘭社發行好評書目

著者	書名	定價	送料
星野武男	明治天皇御製新講	一圓五十錢	十錢
水原秋櫻子	現代俳句季語解	一圓八十錢	十錢
飯田蛇笏	俳句文藝の樂園	二圓	十二錢
小杉放庵	草畫隨筆 (支那・朝鮮・滿洲)	二圓	十錢
小川千麩	新纂俳畫法	二圓	十四錢
水原秋櫻子	俳句になる風景 (と生活)	一圓二十錢	八錢
海野夢一佛	川柳史講話	二圓二十錢	十四錢
伊東月草	俳句になるまで (續篇)	一圓二十錢	八錢
嶋田青峰	自句自釋・海光	一圓二十錢	八錢
水原秋櫻子	自句自釋・吾が俳句	一圓二十錢	八錢
久佐太郎	正風冠句新講	一圓五十錢	十錢
永田義直	芭蕉の句作心境を解く	一圓三十錢	十錢
橋本敏夫	日本山岳短歌集	一圓三十錢	八錢

44-55



65



終

